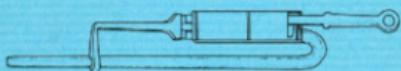


昭和61
年 度 平城宮跡発掘調査部
発掘調査概報



1987

奈良国立文化財研究所

凡　　例

1. 本書は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が、昭和61年度に実施した平城宮跡および平城京内遺跡の発掘調査の概要報告である。各調査報告の執筆は、各現場の発掘担当者が行なった。
2. 第174～12次調査については本書に概要を収録したが、下記のように別途報告書が刊行されているので、詳細はそれによられたい。

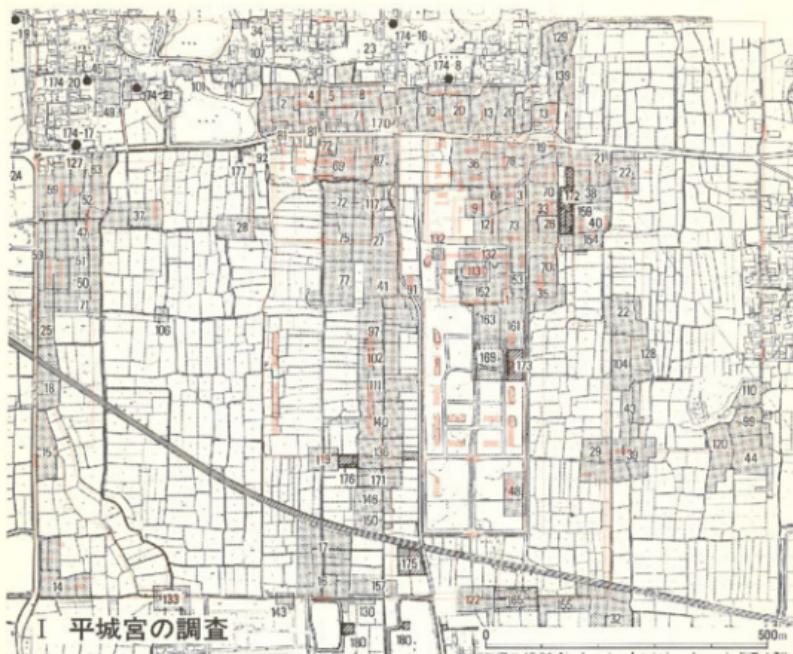
『平城京左京四条二坊一坪』（1987年3月、奈良国立文化財研究所）

3. 発掘遺構図に付した座標値は、平城宮内遺構の場合が、平城方位に基づく座標値であり、平城京内遺構の場合は、国土方眼第VI座標系による座標値である。平城方位とは、内裏内郭をめぐる築地回廊北面の北雨落溝の方位に基づくもので、国土方眼に対して北で $0^{\circ} 7' 47''$ 西偏する。宮内に設けられた基準点のうちNo.7（推定第二次大極殿基壇上）を（0, 0）とし、東西南北をE W S Nとして正数（単位m）で示す。なおNo.7は国土座標ではX=-145,412.55, Y=-18,322.19である。高さはすべて海拔高で示す。
4. 遺構図には、遺構ごとに一連の番号を付け、番号の前に、SA（築地・塀）、SB（建物）、SC（廊）、SD（溝・濠）、SE（井戸）、SF（道路）、SK（土壠）、SS（足場）、SX（その他）などの分類記号を付した。なお遺構番号のなかには仮番号で示したものも含んでいる。
5. 平城宮出土軒瓦・土器の編年は次のように表わす（カッコ内は西暦による略年代）。平城京内についてもこれを準用した。

軒瓦；平城宮出土軒瓦編年 I 期（708～721）、同 II 期（721～745）
同 III 期（745～757）、同 IV 期（757～770）、同 V 期（770～784）
土器；平城宮土器 I（710）、同 II（725）、同 III（750）、同 IV（765）、同 V
（780）、同 VI（800）、同 VII（825）
6. 本文未収録の調査については、巻末「その他の発掘調査一覧」を参照されたい。

目 次

| | |
|----------------------------|-------------------|
| I 平城宮の調査 | |
| 1 推定第二次朝堂院地区の調査 | 第173次 3 |
| 2 内裏東方東大寺地区の調査 | 第172次 11 |
| 3 推定第一次朝堂院南門東側の調査 | 第176次 27 |
| 4 内裏北外郭北方の調査 | 第174—8次 34 |
| 5 佐紀池南辺の調査 | 第177次 35 |
| 6 馬寮地区北方の調査 | 第174—20次 42 |
| 7 北面大垣の調査 | 第174—16次 43 |
| 8 平城宮北方遺跡の調査Ⅰ | 第174—2次 44 |
| 9 平城宮北方遺跡の調査Ⅱ | 第174—5次 49 |
| 10 平城宮北方遺跡の調査Ⅲ | 第174—6次 51 |
| II 平城京の調査 | |
| 1 左京一条二坊十四坪の調査 | 第174—11次 55 |
| 2 左京三条一坊一・八坪の調査 | 第180次 56 |
| 3 左京三条二坊三・四坪の調査 | 第174—10次 58 |
| 4 左京三条二坊七坪の調査 | 第178次 61 |
| 5 左京四条二坊一坪の調査 | 第174—12次 72 |
| 6 右京一条二坊三坪の調査 | 第174—24次 74 |
| 7 右京八条一坊十四坪の調査 | 第179次 75 |
| 8 頭塔の調査 | 第181次 77 |
| III 平城京内寺院の調査 | |
| 1 法華寺旧境内の調査Ⅰ | 第174—1次 82 |
| 2 法華寺旧境内の調査Ⅱ | 第174—22次 83 |
| 3 興福寺旧境内の調査 | 第174—7次 88 |
| 4 薬師寺旧境内の調査 | 第174—13次 89 |
| 5 西大寺境内の調査 | (次数外) 90 |
| その他の発掘調査一覧 | 96 |
| 写真 1 (第173次調査) 2 (第172次調査) | |
| 3・4 (第181次調査) | |



昭和61年度 平城宮跡発掘調査地一覧

| 調査次数 | 調査地区 | 面積(㎡) | 調査期間 | 備考 | 発掘担当者 | 掲載頁 |
|---------|--------------|-------|------------------|-------|-------------------------|-----|
| 172 | 内裏東方東大溝 | 1,900 | 86. 3. 24~11. 20 | | 館野 和己 小林 謙一 玉田 芳英 | 11 |
| 173 | 推定第二次朝堂院 | 1,400 | 7. 1~9. 23 | | 寺崎 保広 | 3 |
| 174- 2 | 平城宮北方遺跡 | 95 | 4. 22~5. 1 | 奈良市上木 | 田中 哲雄 | 44 |
| 奈174- 4 | " | 6 | 5. 13 | 乾口 良信 | 千田 剛道 | |
| 174- 5 | " | 17 | 5. 13~5. 16 | 中西 準治 | 松村 恵司 | 49 |
| 174- 6 | " | 220 | 5. 15~5. 28 | 岡田 博无 | 千田 剛道 | 51 |
| 174- 8 | 内裏北外郭北方 | 14.5 | 6. 9~6. 11 | 溝辺 文昭 | 千田 剛道 | 34 |
| 奈174-15 | 平城宮北方遺跡 | 16 | 10. 7~10. 13 | 武野 昭和 | 綾村 宏 | |
| 174-16 | 平城宮北面大垣 | 21 | 11. 11~11. 14 | 岩田 正則 | 綾村 宏 | 43 |
| 奈174-17 | 馬寮地区北方 | 10 | 11. 13~11. 14 | 今井 徳治 | 毛利光俊彦 | |
| 奈174-18 | 平城宮北方遺跡 | 6.5 | 11. 25~11. 27 | 中村 久雄 | 井上 和人 | |
| 174-20 | 馬寮地区北方 | 75 | 12. 9~12. 12 | 横田 貞子 | 玉田 芳英 | 42 |
| 奈174-21 | " | 10 | 12. 17~12. 18 | 亀田 畿 | 綾村 宏 | |
| 奈175 | 推定第一次朝堂院南 | 2,000 | 11. 6~ | | 松本 修自 | |
| 176 | 推定第一次朝堂院南門東側 | 600 | 8. 12~12. 18 | | 井上 和人 | 27 |
| 177 | 佐紀池南辺 | 140 | 10. 13~10. 31 | | 毛利光俊彦 | 35 |

奈は本文に収録せず。巻末「その他の発掘調査一覧」参照。

1 はじめに

この調査は推定第二次朝堂院（以下「推定」を略す）の東第二堂において実施した。第二次朝堂院地区ではこれまで第161次・163次・169次と発掘調査がおこなわれ、第161次では東第一堂と、その下層に掘立柱建物遺構を、第163・169次では朝庭部分で3時期の大嘗宮を検出した。今回の調査は、第二堂および下層遺構の規模と構造を明らかにすることを目的とし、第161次の南、第169次の東に接して調査区を設定した。

前期難波宮や藤原宮の例では、第一堂と第二堂との間には、規模・構造の面で相違がみられるのに対して、第三堂以南の朝堂については、第二堂と基本的な違いが認められないことから、第二堂の発掘は、第三堂以南の朝堂についても見通しを立てることが可能となる。

2 地形と層位

調査地は奈良山丘陵から南に延びる尾根の一枝丘上に位置し、東及び南に向かって傾斜している。基本的な土層は、昭和40年代の整備の際の置き土が20~30cmあり、以下、旧耕土が20~30cm、床上10cm、暗茶褐色ないし暗黄褐色の遺物包含層10~20cmをへて遺構面にいたる。調査区西北部では地山上で奈良時代の遺構を検出したが、地山は南に向かって緩やかに、東に向かって急傾斜で下っていく。朝堂の建設に当たっては、この地形を大幅に整地しており、整地土は南および東へ行くほど厚くなる。調査区中央の東西方向 S 174 ラインの断面図（第2図）によれば、西端では15cm程の整地土が東8mの地点では1mに達し、それより東ではさらに厚くなる。

3 遺構

検出遺構は、朝堂院東第二堂、及びその下層遺構、掘立柱東西棟建物、掘立柱南北塀、第二堂東側に点在する小柱穴群などで、これらはA・B 2期に大別できる。

A期 東第二堂下層遺構（SB12930）がある。SB12930は西側に廂をもつ12間×3間の片面廂掘立柱南北棟である。柱間は桁行・梁行とも10尺（3m）等間であり、柱間総長は南北120尺（36m）・東西30尺（9m）となる。上層朝堂の基壇の下に隠れる部分を除き、27個の柱穴を検出した。柱は全て抜き取られている。身舎部分は1辺1.5m程の矩形の柱掘形をもち、柱抜取り跡は径40cm程である。西廂は柱の掘形、柱抜取り穴とともに身舎に比べて小さく、掘形が1辺1～1.2m、柱抜取り穴は径30cm程である。この建物は、基壇をもつ。上層朝堂基壇下の柱穴断ち割りによると、整地土上に積んだ約20cmの黄褐色土の上から柱掘形を掘り、柱抜取り穴はその上25cmほどの赤黄褐色土および明褐色土の上面から掘られている。そして抜取り穴の上を上層朝堂の基壇土が覆っている。従って、SB12930はある程度基壇土を盛った段階で柱を立て、その後更に土を築いて基壇を形成していることがわかる。

このSB12930の基壇との関係で注目すべきは、E75ラインで急激に東へ傾斜する整地の落ちである。この東西では土層の断絶がみられ、初めに西側一帯を整地し、その後さらに東に土を盛ったことがわかる。この上層の断絶は調査区南端やS159ラインの土層でも確認でき、比高差が約1mある。平面的にみると、調査区南端から15m程北の間はSB12930の東約3.5mのところを南北に走り、そこから北で方向をやや東にかえている。したがって、SB12930を建てる際に第一次整地として西側に高く整地し、東からみた場合にSB12930の基壇を高くみせる役目を果していたものを、第二堂上層の朝堂建設時に東を整地して段差をなくした、というように時期を異にする可能性も考えられる。

B期 東第二堂（SB12920）を建設する時期である。SB12920は瓦葺き礎石建ち9間×4間の四面廂を持つ南北棟建物である。柱間は、身舎が桁行・梁行



第2図 東第二堂基壇東西方向断面図

とも12尺（3.9m）等間で、廂の出が10尺、第二堂の柱間総長は南北111尺（33m）東西46尺（13.5m）となる。基壇規模は南北36.5m、東西17.5mとなり、基壇縁は廂から約6尺外に出る。

基壇の四辺は後世の耕作等によって大幅に削平され、礎石も全て抜き取られていたが、根石の一部（7カ所）と、階段の痕跡、および基壇外周の礎敷きの範囲によって第二堂の基壇と建物の規模を復原することができた。

基壇土は黄褐粘質の均一な上であるのに対して、基壇の外側は上面に径5cm前後の礎を敷き、その下は径1cm程の小礎を含む暗褐色上で、現存部で15～30cm程の厚さがある。基壇の北辺、及び東辺は、この礎敷の範囲が明瞭で、その内側が基壇となる。西辺は、階段の痕跡である突出を中央と南の二カ所で検出し、階段が基壇に取り付く部分を南北に結んだ線が基壇縁となる。検出した2つの階段の間で、この線上に地覆石と考えられる凝灰岩が1個残っている。南辺については、それほど明確ではないが、遺構検出面に僅かに残る凝灰岩の粉が混じった幅約30cm程の東西方向の帯状の土を地覆石抜取りの溝底と判断した。

この第二堂基壇は、第161次で検出した第一堂に比べると南北が約8m長い点が異なるだけで、東西長が一致し、南北に位置を揃えている。第一堂の基壇と柱位置の関係を参考にすると、第二堂で検出した7カ所の根石は建物の身舎部分の南半にあたり、第一堂と同様に四面に10尺の廂の出を想定できる。南北長が約8m長いのは、身舎が第一堂に比べて2間分長いことを示している。

基壇の築成は掘込地業を行わず、下層建物の基壇土の上に、さらに現存部分で2～3層（約25cm）の基壇土を積んでいる。版築はかなり雑である。基壇化粧は、凝灰岩片の存在から考えて、凝灰岩切石による壇正積み基壇と推定できる。

階段は西側に2カ所、北側に1カ所検出したが、西側は中央階段をはさんで南北対照の位置にもう1カ所あったと考えられ、計3カ所となる。東、南側の階段については、削平のため不明である。

SD11749 基壇西辺から約3m西に位置する幅40cm、深さ10cmの南北溝で、径5～10cmの礎をつめている。全長34m検出した。第161次調査で検出した基壇

外周の湿気抜きの「盲暗渠」と一連のものであろう。

SB12922 基壇から約4m北にある2間×3間の掘立柱東西棟で、柱間は7.5尺、柱掘形は不揃いで、一辺50cm～1mほどである。

SA12921 SB12922の西にある2間の掘立柱南北棟で、柱間8尺、掘形一辺50cm。

SA12924 調査区東北隅で検出した4間の掘立柱南北棟で、柱間8尺、掘形は径20cm程の小さなものである。

SX12928・12929 基壇の東側に点在する多数の小柱穴群である。いずれも基壇の外側に限られ、南北方向に二列並んでいるが、それらの配置には規格性がみられない。第二堂建設に伴う足場穴の可能性もあるが、建物の東辺に確認したのみであり、いまのところ性格を決めがたい。

以上に述べたB期の遺構はいずれもSB12920基壇外周の礫敷下の小礫混じり暗褐土の面で検出したものであり、第二堂建設時に作られ、短期間のうちに埋められ、第二堂が機能していた時期には外周は一面に礫が敷かれていたと考えられる。

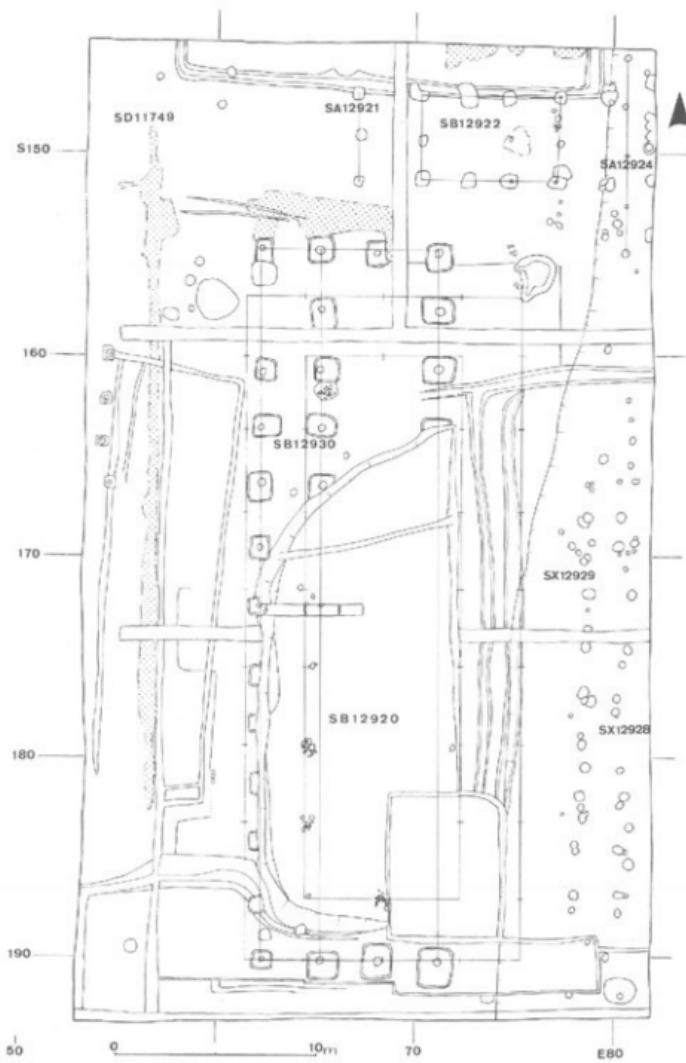
4 遺構

軒瓦が49点出土しているが、いずれも包含層からの出土である。49点の中では軒丸瓦6225型式と軒平瓦6663型式が計30点にのぼり、過半数を占める。これまでの第二次朝堂院地区の上層建物群と同様に、この組合せが第二堂上層建物の所用瓦と考えられる。

5 成果と課題

今回の調査によって明らかになったのは次の2点である。

1. 「第二次」朝堂院東第二堂SB12920の規模と構造が明らかになったこと。
従来、この第二堂は切妻の建物と考えられていたが、先に述べたように9間×4間の四面廂建物で、入母屋ないし寄棟造建物となる。また、東第一堂においては、西面の階段のみ検出したが、第二堂では北にも階段を持つことが明らかになった。
2. 東第二堂の下層においても、第一堂と同様に掘立柱の殿舎SB12930を検出した。西廂の南北棟であるから、切妻造建物に復原できる。規模・構造等に迷



第3図 推定第二次朝堂院東第二堂発掘構造図

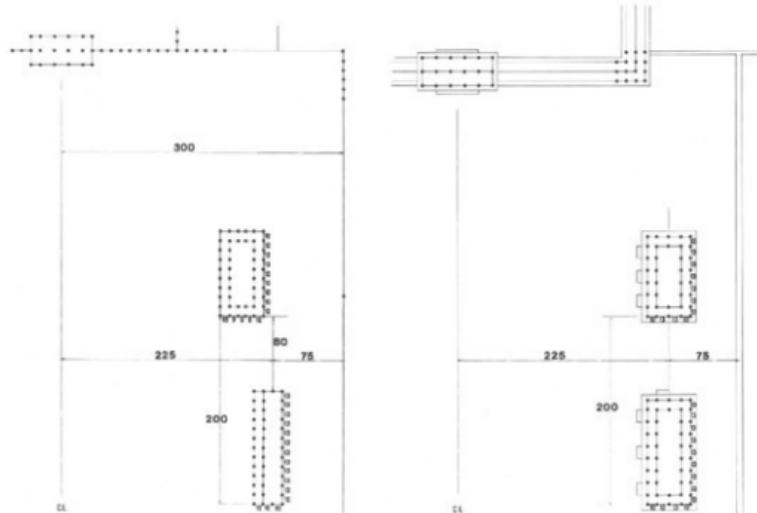
いはあるものの、第一堂下層と一連の遺構と考えることが出来る。

以下これに関連して、次の点を検討しておく。

1 第一・第二堂の上・下層の位置関係

2 朝堂下層遺構の性格

位置関係 第一堂・第二堂上層の南北方向の中軸線と第二堂下層の身舎中軸線が一致し、それは第二次朝堂院の中心線から225尺(67m)東になる。第一堂下層だけはそれより10m西に建物中軸線が位置し、第一堂下層の東廊と第二堂下層の身舎西側柱、第一堂下層の身舎東側柱と第二堂下層の西廊がそれぞれ柱筋をそろえるという関係になる。第一堂・第二堂の下層建物は南北にちょうど80尺(24m)離れており、上層建物は各々の下層建物と南側柱列が一致する。藤原宮朝堂のように、第一堂のみに特徴をもたせていると考えれば、下層の遺構群は第三堂以南は第二堂と同じ西廊の南北棟で、柱筋も揃っているものと予想できる。もしそうだとすれば、朝堂院全体の設計計画は次のように推定できる。まず下層の遺



第4図 推定第二次朝堂院位置図 左；下層，右；上層（単位は尺）

構群は中軸線から東西に300尺の位置に扉を設け、建物の身合中軸線はその4分の3（225尺）に設定した。第一堂と第二堂以下は南北80尺ずつ間隔を取り、第一堂のみ四面廂とし、中央に寄せた。上層遺構の造営にあたっては、下層遺構の建物中軸線を受け継ぎ、第一堂も特殊性を解消して南北中軸線を揃えた。各朝堂はそれぞれの前身建物と南側柱列を一致させることとしたが、建物の規模は下層のそれとは必ずしも一致しないから、上層の朝堂間では間隔が80尺といった完数が得られない。

また第169次調査で検出した大嘗宮遺構との位置関係をみると、最も古いA期の大嘗宮に対し、B・C期のそれは約30尺（9m）南に位置するが、B・C期の大嘗宮の南辺が第一堂の上・下層の南側柱列とほぼ一致するのに対し、A期の大嘗宮はそれらとの明確な関連性を見いだせない。

朝堂下層遺構の性格 結論を先に述べれば、朝堂下層遺構についても「朝堂」と称してよいのではなかろうか。理由は以下のとおりである。1、これまでの調査によって、朝堂の第一・二堂のほかにも、内裏・大極殿・大極殿後殿・閑門・大極殿院と朝堂院をそれぞれ囲む塀といった第二次朝堂院全体について、いずれも上層の建物配置に類似する形で下層遺構群が検出され、それらは全て掘立柱建物で、堀形の規模など共通点が多い。つまり、それらの遺構群は一体のものとして計画されたといえる。2、朝庭部分には、大嘗宮跡のような仮設の遺構をのぞけば、恒常的な建物ではなく、下層遺構群の存在した時期もやはり庭としての機能を果していた。3、第二堂下層については、桁行が上層の朝堂に匹敵する規模をもち、その位置も一致するから、上層の朝堂は下層の建物を踏襲したと考えてよい。4、下層の第一堂と第二堂との間には柱筋がずれること、廂の違い、桁行寸法の違い等いくつかの相違が見られるが、それらの違いは他の宮の朝堂にもみられる第一堂と第二堂との違いと同様であると考えられる。5、第一堂のみならず、第二堂の下層にも掘立柱建物が検出されたということは、第三堂以南の朝堂についても下層遺構が存在する可能性が高くなり、合計12棟の先行する遺構を想定することができる。

課題 このように下層遺構を朝堂と考えると、次の点が問題となろう。1、下層の朝堂の存続年代がいつからいつまでか。2、平城宮中央の第一次朝堂院と今回の第二次朝堂院との関係をどう考えるか。3、下層の朝堂の正殿、つまり大極殿下層建物は何か、などである。

1については、年代を決定づけるものが出土していないが、上限は平城遷都当初まで遡る可能性があると考える。文献史料によると既に和銅年間から朝堂の記載がみられるのに対して、第一次朝堂院の成立は、発掘の成果によって、最も古く考えたとしても靈龜までしか遡らず、これを和銅の朝堂に当てることはできない。したがって、今回検出した第二次朝堂院下層遺構を和銅の朝堂に当てることもできよう。下限は上層朝堂の建設時となるが、この点については上層朝堂院全体の建設が聖武天皇即位の頃か、平城京遷都後かの議論が分かれるところであり、現状では明確な結論は得られない。

2に関しては、これまで第一次朝堂院から第二次朝堂院へ、という時期的な前後関係で説明してきた。これは第二次朝堂院の下層遺構群の存在が明らかになる前の見解であるが、すでに奈良時代前半から下層に朝堂が存在すれば、二つの地区的朝堂院は並存したことになる。第171次調査では、第一次朝堂院と第二次朝堂院の間で両者の朝堂南門をつなぐ線上で実施されたが、奈良時代前半には二つの朝堂院に取り付くと考えられる掘立柱東西辯が確認された。ここにも朝堂並存の徵証が見られたわけであるが、今回の調査によってさらにその点が補強されたと考える。朝堂並存の意味については、第一次の朝堂が4堂で、第二次のそれが12堂であることを重視すれば、平安宮の豊樂院・朝堂院と同様に機能の分化と考えることができよう。第一次朝堂院では主として儀式・宴会が、第二次朝堂院では朝政が行われる、といった使い分けの端緒となつたのではなかろうか。

3に関しては、大極殿下層も「大極殿」と称すべきか、大極殿に類似する機能を持つ「大安殿」に比定するのか、さらに別の殿舎か、難問であり今のところ断案はないが、いずれにせよ、朝堂が付属すべき大殿であることを前提にして今後検討を続けて行くべきであろう。

はじめに

調査区は内裏東外郭とその東方の堆積基壇建物群からなる官衙（内裏東方官衙とよぶ）に挟まれた、東大溝SD2700を中心とする地区で、南北120m、東西は最大26mの範囲に及ぶ。北は第21次、東は第38・40・159次、南は第154次、西は第26・33・70次の各発掘区にそれぞれ接する。東大溝の整備に先立ち、溝の状況とともに、溝の両岸、内裏東外郭及び内裏東方官衙に挟まれた部分の性格の解明を主な目的とした。調査区の北三分の一は東大溝部分のみである。この部分を溝発掘区、これ以南を主発掘区と呼ぶことにする。

遺構

調査地周辺は丘陵部の東斜面にあたり西北から東南に向かって緩やかに傾斜する。主発掘区の西北端と東南端では約1.7mの高低差がある。

今回検出した主な遺構は、掘立柱建物22棟、門1棟、築地2条、掘立柱塀27条、溝10条である。以下、今回新たにその存在が判明した、東大溝と内裏東外郭に挟まれた内裏東外郭東接官衙、東大溝、内裏東方官衙の順に各遺構の説明を加える。

内裏東外郭東接官衙 主発掘区で検出したこの官衙域は、東西は東大溝SD2700と内裏東外郭の東面築地SA705に限られ、南は第154次調査で検出した内裏内郭からの排水溝SD4240によって限られる。その東西幅は、当初約16m、のちに東大溝の堆積土上に南北塀SA12800が築かれ、約17mにひろがるが、平城宮の官衙区画としてはきわめて幅の狭い特異な形態の区画である。SA705まで主発掘区西端から約4.5mを残すのみである。

この官衙域で検出した遺構は、重複関係や配置状況から大きく4時期に区分できる。各時期ごとに遺構を概観する。

A期 南北に並ぶ掘立南北棟4棟と塀5条があり、大きく南北2区に分かれる。

南区のSB12810は、桁行4間（柱間7尺）、梁行2間（同6.5尺）。SB12

820は、桁行5間（柱間は北端8尺、次が7尺、南3間6尺）、梁行2間（同7尺）で、北から2間目に間仕切りを持つ。両建物の間は東西塀SA12819（2間以上、柱間9尺）で画されているが、両建物は東側柱筋をほぼ揃える。SB12820の東10尺の所には南北塀SA12833（2間、柱間10.5尺）があり、東20尺の東大溝際には南北塀SA12816（7間、柱間9～11尺）がSB12810南端近くまで伸びる。SB12820の北には桁行3間（柱間7尺）、梁行2間（同6.5尺）のSB12846がある。SB12846の東側柱筋はSB12820の東側柱筋より1尺西へよる。東西塀SA12850（3間以上、柱間8～9尺）が南区の北の区画施設である。

約20mの空闊地をおいて、北区には桁行3間（柱間6.5尺）、梁行2間（同6.5尺）の南北棟SB12880と、その東北の隅柱にとりつき、東側柱筋に柱筋を揃える南北塀SA12888（7間、柱間5～7尺）がある。

B期 挖立柱建物6棟、塀6条があり、A期同様南北2区に分かれる。

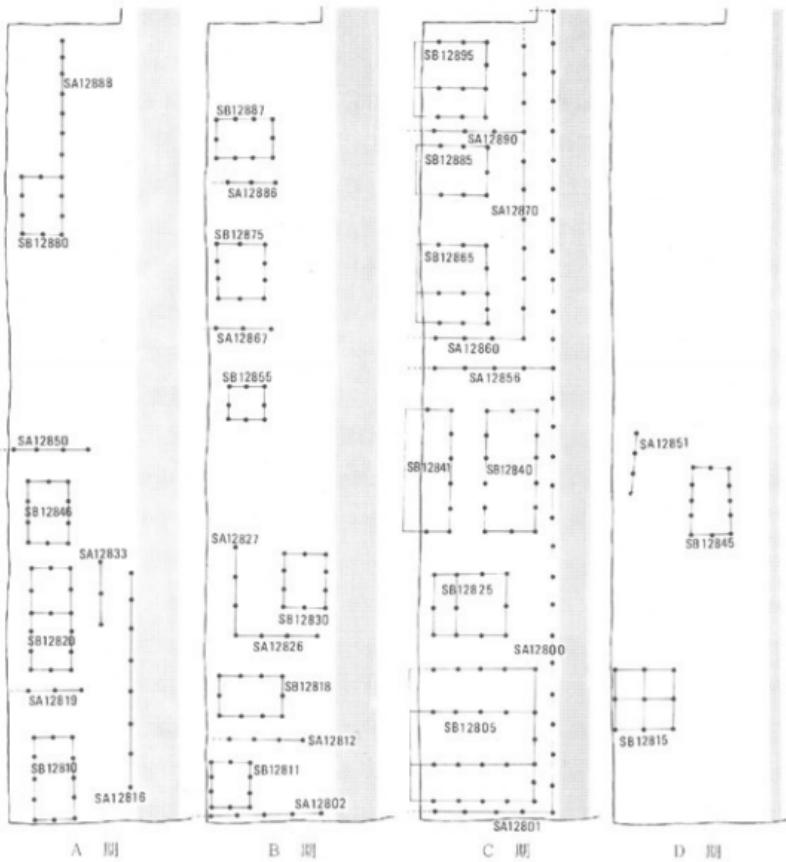
南区南端には東西塀SA12802（4間以上、柱間9～10尺）が走り、その北側西寄りに桁行3間（柱間5尺）、梁行2間（同6.5尺）の南北棟SB12811がある。その北のSB12818は桁行3間（同7尺）、梁行2間（同6.5尺）の東西棟である。SB12811とSB12818の間の中心を東西塀SA12812（3間以上、柱間8尺）が走る。東大溝際に接つ南北棟SB12830は桁行3間（柱間6尺）、梁行2間（同7尺）で、その西側柱はSB12818の東側柱と柱筋を揃える。SB12830の南と西はL字形の塀SA12826（3間、柱間9尺）・12827（3間、柱間10尺）が区画する。

約12mの空闊地をはさんで、北区は南から東西2間（柱間6.5尺）、南北2間（同5.5尺）のSB12855と桁行3間（同6尺）、梁行2間（同8尺）の南北棟SB12875が東側柱筋を揃えて並ぶ。SB12875の南10尺には東西塀SA12867（2間以上、柱間9尺）がある。SB12887は桁行3間（柱間6尺）、梁行2間（同6.5尺）の東西棟で、その西側柱はSB12875の西側柱と柱筋を揃える。SB12887の南8尺には、東西塀SA12886（2間以上、柱間8尺）がある。

C期 内裏東外郭東接官衙の建物配置が最も整った時期で、掘立柱建物7棟、

塀6条があり、東と南を塀で仕切った中をさらに二重の東西塀で大きく南北二区に分ける。

南区は東と南を南北塀SA12800と、それによりつく東西塀SA12801（4間以上、柱間10尺）で区画する。SA12800は東大溝西岸の堆積土上に築かれ、この官衙地区全体の東側を限る区画施設で、27間（柱間10尺）分を検出した。柱穴



第5図 内裏東外郭東接官衙造構変遷図

の多くに径30cm前後の柱根が残る。SA12801のすぐ北には桁行5間以上（柱間8尺、東端のみ10尺）、梁行2間（同9尺）の身舎の南北に両広廂のつく東西棟SB12805がある。桁行は、内裏外郭東面築地SA705との間隔から、5間であると推測される。廂の出は北側14尺、南側12尺で、南側は間柱を持つ。南北両区を通じて最大の建物である。その北のSB12825は桁行2間（柱間10尺）、梁行2間（同8尺）の身舎に西廂（廂の出8尺）をもつ南北棟で、その柱位置はSB12805の柱筋に合う。SB12825の北には、南北棟SB12840・12841が東西に並び建つ。SB12840は桁行5間（柱間8尺）、梁行2間（同8尺）でSB12841もこれと同規模とみられる。

SB12840・12841の北には南北両区を仕切る2条の東西塀SA12856・12860が10尺の間隔で柱筋を揃えて平行に走る。SA12856（4間以上、柱間10尺）は、南区の南端を限るSA12801から150尺の位置にあり、SA12800の南から15間目の柱にとりつく。SA12860（3間以上、柱間10尺）はSA12800の西10尺にある南北塀SA12870（10間以上、柱間10尺）にとりつき、北区を二重に囲む区画施設となる。SA12856・12860とも主發掘区西方へもう1間ずつのびると見られる。

北区は10尺の間隔で二重に囲む塀によって東と南を区画される。平行する塀は柱筋を揃え、通路状の区画を形成していた可能性がある。その中はさらにSA12860から北70尺の位置でSA12870にとりつく東西塀SA12890（3間以上おそらく4間、柱間10尺）によって南北に仕切られる。南半部には桁行3間以上（おそらく3間、柱間8尺）、梁行2間（柱間8尺）の身舎に、南広廂（廂の出10尺、間柱をもつ）をもつ東西棟SB12865と、桁行3間以上（おそらく3間、柱間8尺）、梁行2間（同8尺）の東西棟SB12885がある。北半部には桁行3間以上（おそらく3間、柱間8尺）、梁行2間（柱間8尺）の身舎に南広廂（廂の出10尺）がつく東西棟SB12895があるだけである。SB12885とSB12895の間隔は10尺であり、その中心をSA12890が通る。北区の3棟の東西棟はその東妻柱筋をほぼ揃えて建ち、一連の計画のもとに配置されるが、いずれも小規模であり、南区の付属施設と見られる。北区の北を限る施設は、今回の発掘では見つから

かった。しかし、東面塀SA12800が主発掘区を北に出た所で西に折れると想定すると、内裏東外郭の東門SB6820南側に達することから、主発掘区外のすぐ北側にSA12800にとりつく北限区画施設が存在するものと推定できる。

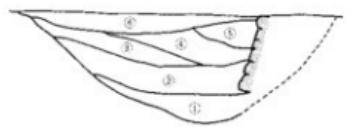
D期 この時期の遺構には掘立柱建物2棟と塀1条があるのみである。SB1281・5は桁行・梁行とも2間（柱間10尺）の総柱建物。SB12845は桁行4間（同5.5尺）、梁行2間（柱間は北端で6尺、南端で7尺）の梯形状の平面形を呈する南北棟である。SA12851は北でやや東にふれる南北塀（3間、柱間7尺）である。

それ以外の遺構 D期以降の遺構としては発掘区北端で見つかった中世の東西棟SB12900がある。また、時期不明の遺構としては2棟の掘立柱建物SB12835・12892と6条の塀SA12806・12842・12878・12879・12898・12899がある。このうちSB12835がD期より古いことは、重複関係からわかる。

各時期の年代 A期では平城宮軒瓦編年Ⅱ期の軒平瓦6664D、B期ではⅡ期の軒丸瓦6135E、Ⅲ期の軒平瓦6689A・6691A、C期ではⅡ期の軒丸瓦6304A・6135A・6288A・6313C・E、軒平瓦6664D・F・6685B・6688Aa・Ab・B、Ⅲ期の軒丸瓦6225A、6282Ba・Dと八世紀中頃から後半にかけての土器片、D期からは八世紀後半の土器片が出上している。また、C期に属するSA12800の柱掘形は後述する東大溝の堆積層⑧層上面から掘りこんでいるが、⑨層からは天平勝宝～天平宝字年間の木簡、Ⅱ・Ⅲ期の軒瓦と、八世紀中頃から後半にかけての土器が出土している。

以上のことから、当官衙が最も整備されたC期は天平宝字年間以降に位置づけられる。そしてA期を奈良時代前半、B期を745年の平城還都以降、D期を奈良時代末に当てることができよう。

東大溝SD2700 平城宮東半部の基幹排水路SD2700を今回120mにわたって検出した。ただし北40mの溝発掘区については調査区の制約上、西岸全体を完全に検出することはできなかった。東大溝に関する従来の知見は、第21・129・139次調査などの北方地域では両岸が石積みによって護岸されていたものの、南の第154次調査では、石積はSD2700とSD4240合流点の南にある、橋SX11505以



第6図 東大寺SD2700堆積層概念図

北の東岸に限られ、西岸は素掘りのままであった。両調査区をつなぐ今回の調査区でも、石積みによる護岸は東岸に限られ、西岸は素掘りのままである。東岸の石積みは人頭大の玉石（三笠山安山岩）を5～6段前後積みあげたものであるが、部分的に石積みの乱れがあり、改修をうかがわせる。

埋土の堆積状況は場所により微妙な変化をもちらながらも、ほぼ共通した堆積の様相を示す。その概念図を示すと第6図のようになる。堆積層は大きく6層に分かれれる。下層から順次説明すると、①層は石垣を築く以前の素掘りの時期にあたり、溝幅は石垣の時期より広く5～6m、深さ1.6～1.8m。②層は素掘り溝の東岸を西によせてせばめ、石垣を構築して以後の堆積で、この時期の溝幅4～5m、深さ1.2～1.4m。③層上面に瓦の堆積が多く、また粘土を敷いたらしい痕跡がある。④層は瓦を多量に含む上で溝の西半を埋め立て、護岸としたもの。これによって溝は幅3～3.5m、深さ1mたらしくなった。⑤層の堆積により溝はほぼ完全に埋まった。その後、東岸沿いに幅約0.6～0.8m、深さ0.3～0.4m程掘りこんで細溝に改修し、⑥層の堆積ができた。細溝の東岸は石垣をそのまま利用し、西岸は板材・石・瓦などで護岸する。⑥層は⑤層埋没後の、溝の最終末期の堆積である。

①層からは神龜元年～養老7年、②層からは天平～天平宝字年間、③④層からは天平勝宝～天平宝字年間の紀年をもつ木簡が出土した。また、⑥層からは紀福足の名を記す木簡が出たが、紀福足は延暦12年6月11日「東大寺使解」（『平安遺文』8巻4289号）に正六位上行中監物として名の見える人物のことと見られる。①～③層からは内裏東方官衙所用軒瓦の6135A-6688A（Ⅱ期）が多く出土した。②層からは内裏東外郭地城所用軒瓦6304A、6311A・B-6664D・F（Ⅱ期）の出土も目だつ。④層では6282B-6721C（Ⅱ期）が若干見られ、細溝の西護岸材にはⅡ期の軒平瓦6664D、Ⅲ期の軒平瓦6689A・6691Aが転用されている。⑥層からはⅣ期の軒平瓦6702Aが出土している。これらのこととは、奈良時代を通じて

順次溝が埋没していったことを示し、出土土器の年代もこれに矛盾しない。

以上の出土遺物の検討から、石垣を積んだのは天平年間前後、西岸を瓦で護岸したのは天平宝字年間前後、細溝に改修したのは奈良時代末のことと考えられる。

次にSD2700に東西から流れ込む暗渠・溝を全部で7条（東の内裏東方官衙から6条、西の内裏東外郭から1条）検出した。そのうち5条には改修のあとがある。内裏東方官衙からの6条中、南4条分については内裏東方官衙の項で述べる。他の3条はいずれもSD2700の側壁で、その流出口を確認しただけである。

SX12911は第40次調査区内の片廻廊SC4895の西で検出した塙敷溝SD4924の西延長部にあたり、2度の改修をうけている。下層は石垣最下段に口を開き、石垣構築時に対応した木樋暗渠である。中層は瓦護岸溝に対応するが構造は不明。上層は細溝段階で塙を用いた暗渠になっている。SX12912は、SC4895の北にあり内裏東方官衙を南北に二分する東西築地SA2746の北側溝SD4947の西端部にあたり、石垣中段に口を開くが詳細は未詳。

一方西方から流入するSD2350は第78次調査で検出した内裏内郭内の井戸SE7900からの排水溝の東端部で、2度の改修をうけている。その南北両側にも溝と思われる堆積があるが、詳細は未詳。

SD2700の西岸よりで、SA12800の北延長上及びその東側に柱穴が3個ある（SX12906）。これは柱間寸法からSA12800とは別のもので、このあたりに木材の堆積の多いこと、前述のようにこの西方に内裏東外郭の門SB6820があることから、門から東へ続く道に架けられた橋の橋脚の可能性がある。しかし東岸においては対応する柱穴を検出できなかった。

SX12906の北で、10尺等間の南北塙SA12907を検出した。それはSA12800の延長線上にあたる。一方さらにその北延長線上では第21次調査で南北塙SA2675とそれととりつく東西塙SA2710を検出している。これらはいずれも一連の性格を持ち、内裏東外郭にとりつく官衙が今次調査の主発掘区の北にも延びることが予想される。ちなみにSA12801からSA2710までの距離は約133m（450尺）となる。しかしSA2675は9尺等間で10尺等間のSA12907とは柱間を異にする。

またSA2675の南半部ではSA2675に重なる10尺等間の南北溝も検出されているが、その柱穴を10尺間隔で南へ割り付けていってもSA12907とは一致しない。このようにSA12907が北で、あるいは南でどのようになっているかは溝発掘区の東大溝西岸の未調査区を発掘しないと不明である。今後未発掘区を調査することによって官衙全域が解明されることが待たれる。

次に石垣の構築について考えると、現状では東岸にしか石垣はない。このことは南の第154次調査の所見とも一致する。ところが北側の第21次調査では、本調査区に接する南5m分を除いては両側に石垣があり、著しい対照を示す。また溝幅も第21次調査では約2.6mであったものが、今次・第154次調査とも約5～6mとひろがっている。西岸の石垣の有無について考える手掛かりとなる知見は、溝発掘区の北寄りの一部で東岸石垣底部より約1.4m西の①層上面に石垣に用いたのと同大の石、あるいは布掘り状の痕跡、杭列を検出したことである。

西岸石垣の有無には2つの可能性が考えられる。1つは、前述の石・布掘り状痕跡を西岸石垣の最下段、あるいはその掘えつけ痕跡と考えるものである。これによれば、西岸も本来石垣が築かれたが、後に②層の堆積時期に崩壊したことになる。2つ目は西岸にはもともと石垣がなく、杭と杭の間に柴・竹等を渡した、しがらみによって護岸した可能性である。この場合、石は杭をおさえるために断続的におかれたもので、布掘り状の溝はしがらみの掘えつけ痕跡となる。いずれの見方をとるにせよ、石垣構築時の溝底での幅は約1.4m前後になるが、石や杭の残らない部分でも西岸が抉れてひろがっていない所では、③層上面（石垣底部）の幅はそれとほぼ同じであり、西岸の傾斜が東岸と同程度とすると、溝幅は上端で2.6m前後となり、第21次調査での知見と一致する。また、西岸が東岸に比べて傾斜が緩いのは、石垣ないしがらみの裏込めの土が崩壊・流出したためであろう。

いずれの想定が正しいか判断は難しいが、石垣が築かれていたとするなら、きわめて大量の石が崩壊しそれを除去したことになるが、その割には溝中での石の残存がきわめて少ないと、溝底の石も東岸石垣最下段の石のように偏平でないことなどから、西岸は当初から石垣が作られず、杭としがらみで護岸していた可

能性の方が大きいと一応考えておく。いずれにせよ堆積層中に崩壊の痕跡が見られないことから、西岸護岸施設は構築後かなり早い時期に崩壊し、崩壊土を右垣底部まで浚渫したと見られる。

内裏東方官衙　上発掘区東端で内裏東方官衙の西面・南面築地の一部と西門、それに東大溝に注ぐ暗渠4条等を検出した。

西面築地SA2940・南面築地SA12780（遺構番号を今回訂正した）は既に第40次調査で検出しているが、その時未検出であった部分も含め、SA12780の西端部と、SA2940の地山削り出しの基壇を南端から約46mにわたり検出した。築地基底幅は約1.8m。築地の東側には塙を敷き並べ、建物雨落溝と歩道を兼ねている。西側には雨落溝SD11695がある。築地の両側には2～4mの間隔で、築地をはさんで東西両側に柱筋を揃えて添柱ないしは寄柱穴列SS12788・12789がある。SA2940の西門SB5450以南の築地下層から、掘立柱南北塙（10間、柱間8～9尺）を検出した。第154次調査の知見と合わせれば、南北塙はSA2940南端で東へ曲がり南面築地SA12780の下層につながるとみられる。

西面築地南端に、築地端から西へ伸びる東西塙SA12785（2間、柱間5尺）があり、この官衙と東大溝の間を閉塞していたと思われる。その柱位置は下層南北塙南端柱とずれ、上層の南面築地の南面に揃うため、築地塙に作る施設であることがわかる。西門SB5450は第40次調査で検出した小規模な門で、唐店敷を兼ねた礎石が残る。

次に内裏東方官衙内から東大溝に注ぐ暗渠に移る。SX12787は西面築地南端近くにあり、改修を受ける。下層は塙を敷いた中に木樋を据える。SD2700への流出口は石垣面から0.5m奥、石垣底部から約0.35m上にあり、前方、石垣面までの間に塙を敷き並べる。上層暗渠は下層の西半部のみを改修したもので、その先端は下層より約0.6m上にある。塙を敷かずに木樋を置くが、流出口の前には流れ落ちる水を受ける偏平な石を置き、さらにその水が南へ流れるよう、東岸石垣に平行に約3mにわたり石を並べ、約1m幅の細い溝を作る。上層への改修は、東大溝堆積層の④層の時期に対応するものである。なお、この暗渠から約6m南

の東大溝堆積層上の西半部に、大溝を横切るように平瓦を6枚敷並べた施設が見つかったが、これは西岸から上層暗渠に伴う細溝に水を流すためのものであろう。

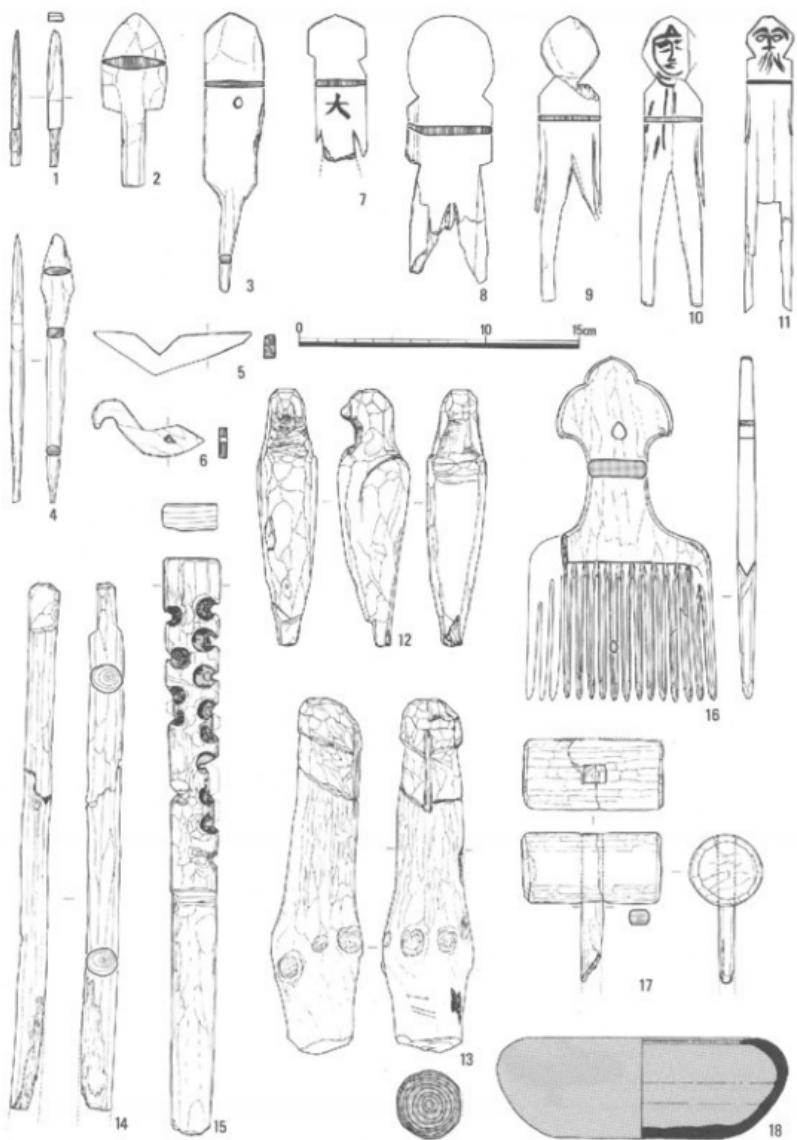
SX12792はSA2940南半の中央部を抜ける暗渠でやはり改修されている。下層暗渠は木樋で、その先端は石垣面より少し奥に入り、底部を石垣底部に揃える。流出口の天井部には偏平な石をのせる。上層暗渠が築地を抜ける所は下層より約0.6m高く、下層暗渠掘形の埋土を掘り込み、その中に埴・土器・石などを入れ埋め戻したあと、上に平瓦・丸瓦をつなげ、丸瓦は上に丸瓦でふたをして暗渠とする。築地をぬけたあとは下層の掘形埋土を掘り込み、開渠にしていたとみられる。SX12792の北1.9mの所にも丸瓦で築地をくぐる暗渠SX12793がある。SD12793は築地をぬけたあと南に曲がり、SX12794上層開渠に流れ込む。さらにその北、西門までの間に4カ所築地の中から外への水抜きの溝状施設があるが、築地西に溝はなく、築地をぬけた水はたれ流したと考えられる。

SX12798暗渠は西門心から約5m南にあり、改修の痕跡はない。木樋の先端部の作り方はSX12792下層木樋暗渠と同じである。

SX12863暗渠は西門を挟んでSX12798と対称の位置にある。改修を受けており、下層は西でやや北にふれている。木樋は残存しない。のちにまっすぐに掘り直し、東大溝への流出口から1mほどの部分まで埴を積み、木樋を置く。東大溝石垣裏込め土との関係から、下層は石垣構築以前の時期に遡る。上層への改修は④層の時期に対応する。

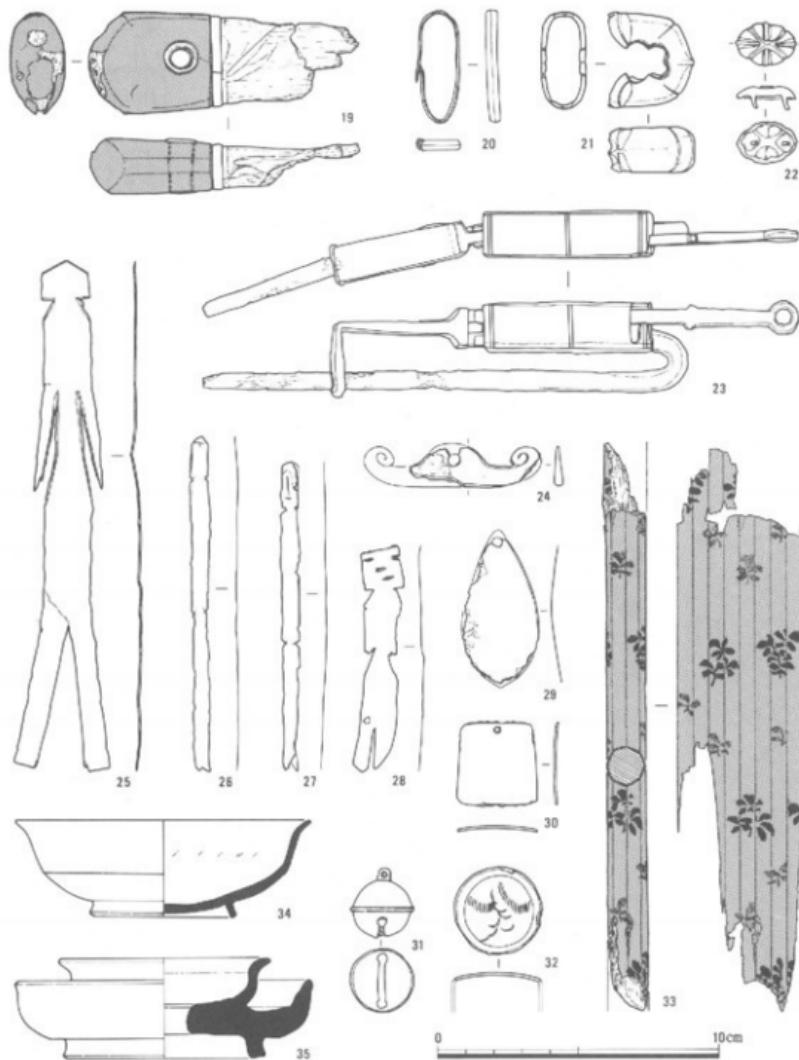
遺物（第7～10図）

東大溝SD2700から大量の木製品・金属製品・土器・瓦埴類・木筒等が出土した。木製品には人形・刀形・鳥形・斎串・陽物などの祭祀具、曲物・皿などの食膳具、櫛・留針などの装飾具、下駄・火鑽臼・独楽・木球・物指・黒漆塗把頭などがあり、多様な内容をもつ。なかでも花卉文を金銀で表した蒔絵の八角棒状品は、正倉院に伝存する金銀鉢装唐大刀と同じ技法をもち、蒔絵技術の発達を解明するうえで貴重な資料となろう。直径1.5cm、両端を折損し、現存長20cm。金粉

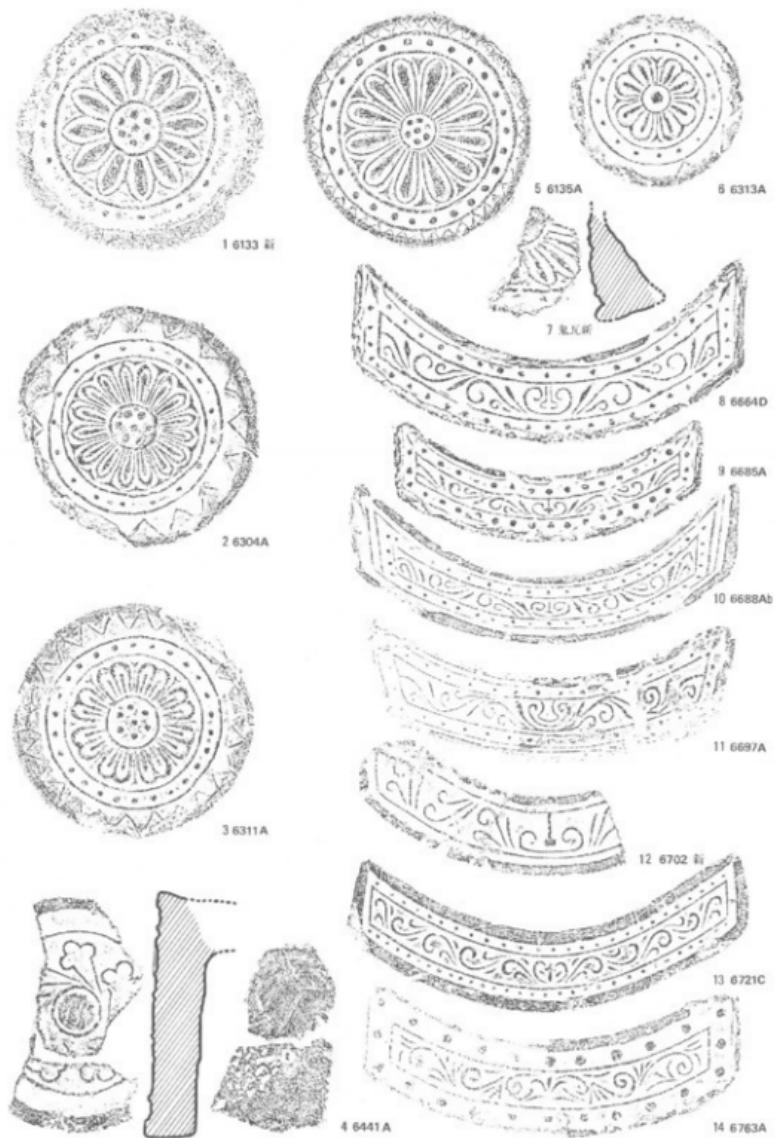


第7図 SD2700出土木製品(1～3 断面図裏は広葉樹材)

1～4 繩形 5・6 鳥形 7～11人形 12鳥形木製品 13陽物形 14丸木弓
15火きり臼 16たて搾 17木砧 18漆塗焼鉢



第8図 SD2700出土遺物(1 : 2, 34のみ1 : 4)
 19黒漆塗把頭 20銅製直金具 21銅製鞘尾金具 22金銅製飾針 23鉄製鍔子
 24鍔鉄 25～28銅製人形 29金銅製腰絡 30佐波理腰絡 31銅鏡
 32銅製軸頭金具 33金銀蒔絵八角桶 34鈍形須恵器 35須恵器托



第9図 SD2700出土軒瓦(1:4)



第10図
SD2700出土
統一新羅時代
土器 (1:2)

は純金に近く、角を整えた粉を蒔く。一部に銀粉をまじえる。金蒔絵は一茎の花卉文を一単位とするのに対し、銀蒔絵は三茎を一単位とし、更に金蒔絵と銀蒔絵を上下に交互に配するなど、意匠的にも優れている。その年代は、出土層位から奈良時代末に位置付けることができる。

金属製品には和同開珎・萬年通寶・神功開寶・隆平永寶などの皇朝錢や、銅製人形・海老鋌（縄子）・帶金具などがある。また和同錢のバリ錢や鈎竿も出土したが、これが宮内での鑄銭を意味するものかどうかは今後の詳細な検討が必要である。

土器には、日常什器の土師器・須恵器の他、施釉陶器（奈良三彩・綠釉・灰釉陶器）・新羅製陶質土器・祭祀用ミニチュア土器（猿投窯須恵器）・ミニチュアかまと・上馬・人面墨書土器などがある。新羅製陶質土器（第10図）は壺口頸部の破片で、④層から出土した。統一新羅時代の土器の出土は平城宮内では2例目である。また、宮内省・造宮内・内舍人所・□〔大カ〕舍人寮・女官所・大炊・中衛・衛□・主典□・庁・上番・下番・考・考番・槐皮膏・□刀自・井・神人・寺・東・若・水・牛・生・道・七・十・廿などの記載がある墨書土器が出土した。

瓦塙類では本文中で述べてきたもののほか、綠釉塙、「足」「修」刻印瓦、「東」ヘラ書き瓦、「献軍器□」墨書塙などが注目される。また、軒瓦に新型式のものが発見された。新型式には、まず單弁蓮華文軒丸瓦6133の新種と飛雲文軒丸瓦（7単位）6441Aがある。6441Aはその文様からみて飛雲文軒平瓦6801Aと組み合うものと考えられる。6441Aの中房は文様が削り落とされた痕跡があり、6801Aの中心飾り同様、「修」の字があった可能性がある。6441Aが④層から出土したことは、6801Aが平城宮出土軒瓦編年IV期に位置付けられてきたことを裏付ける。また6311系の單弁蓮華文をもつ鬼瓦が発見された。蓮華文鬼瓦が平城宮内で出土したのは初めてである。次に均整唐草文軒平瓦6688Aの范の彫り直し品が確認されたので、これを6688Abとし、従来の6688Aを6688Aaとする。以上のほか、薬師寺周辺にのみ分布していた均整唐草文軒平瓦6697Aが平城宮内で発見され、また均整唐草文軒平瓦6763Aの良好資料も出土した。6133の新種と6135

Aの頸部には、「^彫型作り」を示す枷型の圧痕が残されている。6441Aの瓦当裏面と丸瓦部凹面に残る布圧痕は連続しており、「一本造り」で製作されていたことが明らかとなった。

木簡は全部で4570点（うち削屑2901点）出土し、そのうち181点（うち削屑125点）は暗渠・SD2350からの出土。木簡の内容の特徴としては、貢進物に付けられた荷札の木簡が多いこと、造営や兵に関わる木簡がまとまっていることがあげられる。さらに中務省に関係するものが目立つ。一方、墨書き器にも中務・宮内省関係のものがあり、付近にそれらの内裏に関わる官司の存在したことがうかがえる。

また、桃・栗・オニグルミ・瓜等の種子が多量に見つかり、当時の食生活の一端をうかがわせる。なお、今回は電動篩を併用して、遺物の検出をおこなったことを付記しておく。

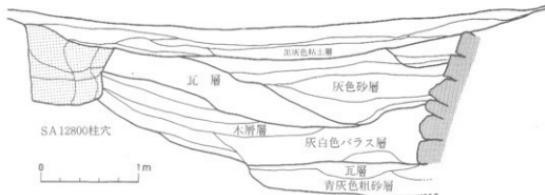
SD2700出土木簡訳文

| | | |
|----|-----------------------------------------------|--------|
| 1 | 参河国芳岡郡比莫嶋海部供奉九月料御費佐米六斤 | 6031 |
| 2 | 阿波国那賀郡武芸駅子戸主生部東方戸同部毛人調堅魚六斤 | 天平七年十月 |
| 3 | 上總國平群郡狹隈郷口丁若麻績マ麻呂養錢六百文 | 6031 |
| | (穿孔) | 6032 |
| 4 | ・ 造東院所 請藁參口 | |
| | (穿孔) | |
| | ・ 鳴万侶行 各長七寸 右為字相下柄固 | 6019 |
| 5 | ・ 造五丈殿所請合釘四隻 | 料請如件 |
| | 九月九日領紀廣穂 | |
| | ・ □□□歳馬 | 6011 |
| 6 | 僧房所 「□□」 中房預紀福足食 (穿孔) □□□食一升五合 三月十三日別當佐伯下口 | 6011 |
| 7 | □内親王 (軸木口) 6061 8 □大上天皇 | 6081 |
| 9 | 縫殿寮宮人口 6081 10 造兵司欠作表万呂 | 6011 |
| 11 | 兵衛 6091 12 人中衛 6091 13 附子 | 6021 |

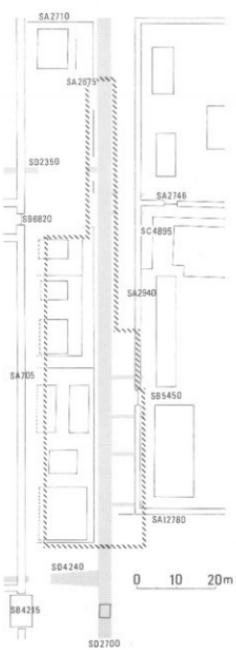
まとめ

今回検出の内裏東外郭東接官衙は、C期に最も整然とした姿を示した。その改修は東大溝③層の瓦護岸（天平宝字年間前後）と一連の作業とみられるが、③層からは東方官衙所用の瓦が大量に出土しているし、暗渠SX12787・12863・12911を上層暗渠に改修したのは瓦護岸後まもなくの頃であるなど、天平宝字年間前後に内裏東方官衙を含め、この地域は大規模な改作をうけていることが知られる。それは『続日本紀』に見える天平宝字元（757）年5月の大宮改修、あるいは同5年10月の平城宮改作などと関連する可能性があろう。なお、内裏東方官衙の下層から上層への改修と、内裏東外郭東接官衙の時期変遷との対応関係は今後の課題である。

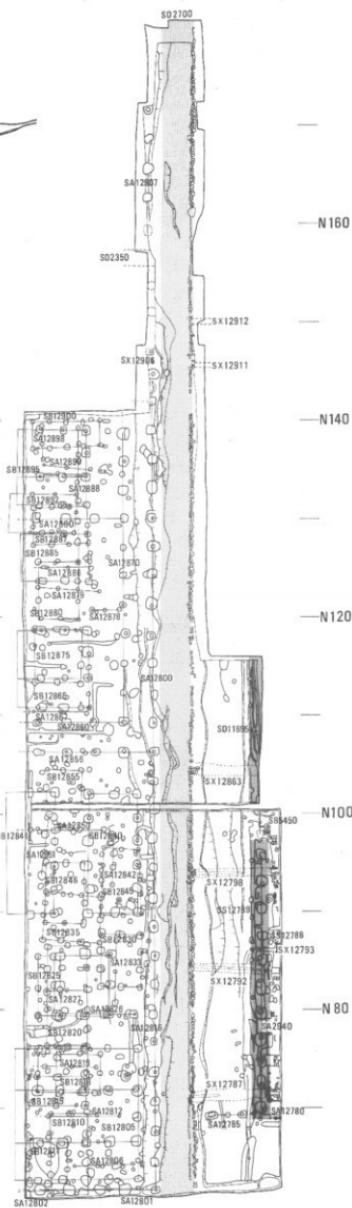
内裏東外郭東接官衙は内裏東外郭の東にとりつき、C期には塀で囲まれた一区画を形成する。その規模は東西約17m、南北約82.5mときわめて細長く、通常の官衙配置とは性格を異にする。そして調査区のすぐ西には内裏東外郭内の官衙があり、宮内省の可能性が指摘されている。そこで、東大溝西側官衙の性格については、2つの可能性をあげておく。1つは内裏東外郭内の官衙の付属施設であり、その官衙が狭小になったため、外郭外に付属施設を設けたという可能性である。もう1つは、東大溝西側官衙は内裏東外郭の門SB4215とSB6820との間に位置することから、内裏ないしはその外郭の門を守る兵の詰所的なものという可能性である。奈良時代には内裏に通じる門（内門、闇門）は兵衛府が、内裏外郭の門（中門、宮門）は衛門府と衛士府が守衛していたと思われる。また神亀5（728）年8月には天皇の側近にいて警護にあたる中衛府が設置されている。今回出土の遺物にも「兵衛」「中衛」「馬従料」、五衛府の主典である「大志」、兵部省被官の「造兵司」などの記載のある木簡や、「獻軍器」の墨書壇、「中衛」「衛」の墨書上器、黒漆塗把頭など武官の存在を物語るものがあり、付近に兵のいたことをうかがわせる。第13次調査で出土した木簡から、内裏北外郭内に兵衛の詰所があったと推定されていることも参考になる（『平城宮木簡一解説』）。今回の調査知見では、いずれとも明確に断言することはできない。今後、主発掘区の北を調査することにより、官衙の性格はより明らかになると思われる。



第12図 SD2700堆積状況図 (N80地点断面南壁) (1 : 40)



第13図 調査区周辺構造配図図 (1 : 1000)



第11図 内裏東方東大溝地区発掘構造図 (1 : 400)

1 はじめに

第一次朝堂院の南面を区画する施設については、これまでに119次、136次、171次などの調査が行なわれている。昭和54年度の第119次調査では、南面中央の門と、その東西にとりつく掘立柱塀を確認し、昭和56年度の第136次調査では、第一次朝堂院区画の東南コーナーの遺構の様相が明らかにされた。また昨年度の第171次調査では、第一次朝堂院の南面の塀が東面の塀をこえて東に延び、第二次朝堂院との中間地区を閉塞していたことが判明している。いっぽう、第一次朝堂院の内部と東面の区画施設の調査も進められ（第97次・102次・111次・140次）、区画の東半部のはば全域の遺構が明らかにされている。

第一次朝堂院の南面を区画する施設が、東面のそれと一連のものであることは疑いない。東面の区画施設については、次のような変遷が考えられている。奈良時代当初には、基壇をもった掘立柱塀SA5550Aが造営される。天平12年（740）の恭仁京遷都とともに、この塀は解体撤去され、柱掘形の小さな掘立柱塀SA5550Bに改作される。天平17年（745）の平城京還都後、従来の掘立柱塀は全面的に築地塀に作りかえられる。東面に比べると、南面の区画施設にかかるる遺構については、調査場所によって遺構の残りがよくないことや、細部の状況が異なることなどのために、遺構の性格や区画の変遷に関する所見は、調査が進むにつれて、若干の修正がくり返され、必ずしも一致した見解を



第14図 第一次朝堂院地区調査位置図

得るにはいたっていない。今回の調査は、いくつかの懸案の問題に解決の糸口を見出すことを目的の一つとして、第一次朝堂院南面東半部のうち、まだ調査されていない東西30m、南北20mの範囲について行なうこととした。

2 遺構の変遷と概要

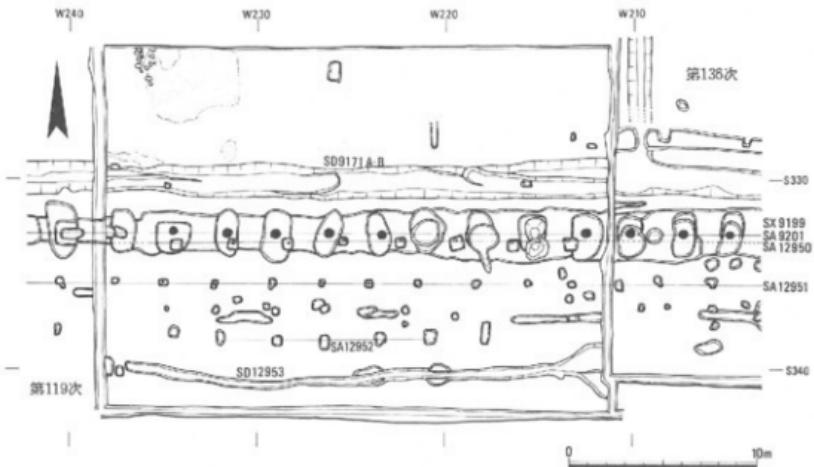
調査区は、西側を第119次、東側を第136次調査区と、それぞれ2m幅を重複させて設定した。基本的層序は、仮整備とともにう山砂層が地表にあり、以下、耕作土、床上（黄褐色砂質土）、暗褐色砂質土の順となり、遺構面の茶褐色砂質土面は現地表下0.60～0.80mであった。検出した遺構は掘立柱塀4条、溝2条である。以下、平城宮に関わる遺構を、これまでの成果に基づき、A～Dの4期に分けて説明する。

A期 第一次朝堂院の南面区画施設が造営される以前の段階で、東西方向の布掘状掘込地業SX9199が掘削される。調査区の西端では南北幅1.5mであるが、すぐに拡がり、2m前後の幅で東へのびる。調査区の東半部でさらに拡がり、2.5～2.8mの幅で136次調査区に続いている。この掘込地業の深さは、浅いところで80cm、深い場所では180cm近くあり、一様でない。また、その深さの変化に一定の規則性はみとめがたい。埋土は砂質土や粘質土が無秩序な層序をなしており、とくにつき固めた形跡はない。

SX9199について、第119次調査区では、幅がせまく、次の時期の掘立柱塀SA9201の大きな柱掘形と重複していたこともあり、掘形を掘削したものか、柱を立てずに埋め戻した、いわば未完の東西塀の遺構と判断した。ところが、第136



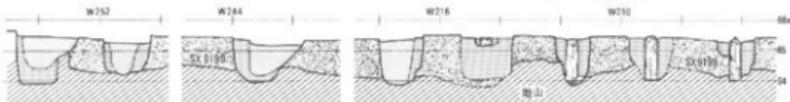
第15図 第一次朝堂院南面周辺発掘遺構図



第16図 第一次朝堂院南門東側発掘遺構図（1：300）

次調査区では、SA9201の掘形よりも南北幅が広く、掘立柱塀SA9201にともなう布掘状の地下地業ではないかと考えられた。SX9199は、後に造営される第一次朝堂院南門のすぐ東から始まり、約70m東でおわっており、朝堂院区画の南面東端まで続いている。また、南門の西側では、これに対応する掘込地業は確認されていない。さらに、SA9201の柱掘形のはうが、多くはSX9199よりも深いこと、SX9199の埋土が周囲の地盤よりもむしろ軟質であることなどを考えると、SX9199が掘立柱塀SA9201造営のための地下地業とはみなしがたい。

B期 第一次朝堂院の南面区画施設として、掘立柱屏SA9201が造営される。
SA9201については、今回の調査で、新たに11か所の柱穴を確認した。そのうちの6か所には柱根が残っており、他は抜き取られていた。柱間寸法は2.58~2.90



第17図 SX9199・SA9201東西断面図

mのあいだでかなりのばらつきがある。概して南北に細長い楕円形で、長径2.9～1.7m、短径2.0～1.2mをはかる。かなり深く掘られており、遺構検出面から1.4～1.8mに達する。柱根はいずれも直徑45cmほどの太さで、材質はコウヤマキ。下端近くの側面に「八十」と刻んだものが2本ある。SA9201の北1.5mにある東西溝は上下2層に分れる。このうち下層のSD9171AはSA9201の北雨落溝である。

C期 SA9201を解体撤去した後に、柱筋を南に44cm移して掘立柱東西塀SA12950がつくられる。柱間寸法は2.85mから3.00m、平均すると2.96mであり、10尺等間で計画されたとみられる。柱掘形は一辺50～70cmの方形で、直徑約20cmの柱痕跡が残っていた。SA12950は、調査区の西端に近い場所では検出できなかったが、掘形が浅いので削平されたとみている。

第119次・136次調査区では、SA12950に該当する遺構は確認されていない。しかし、第一次朝堂院の東を限るSA5550Bと柱間や掘形の脱模が共通しており、SA12950はSA5550Bと一連の、南面を区画する施設であったと考えられる。

D期 第一次朝堂院の東面区画施設が築地塀SA5550Cに改作されるのにともなって、南面区画施設も掘立柱塀から築地塀に作りかえられたと推定される時期。南面では、これまでの調査も含めて、築地塀本体に関わる遺構は確認されていない。すべて削平されてしまったためと考えられるが、第136次・171次調査の結果、SA9201の北の東西溝のうち上層のSD9171Bが築地塀にともなう北側雨落溝と判明している。SD9171Bは下層溝SD9171Aを埋め、北に約70cm移した位置に作られている。

その他の遺構 SA12951はSA9201の南2.64mにある掘立柱東西塀。柱掘形は一辺約50cmと小さく、柱はすべて抜き取られている。柱間寸法は2.58～3.11mで、平均すると2.90m間隔となる。この柱位置はSA9201、SA12950のいずれとも対応関係がないが、掘立柱塀SA9201あるいは築地塀の造営か解体にともなう足場の柱穴であろう。SA12952はSA9201の南約5.7mにある柱間4間の東西塀。柱掘形の形状は不規則で、柱間寸法も東から2.7・3.1・2.5・3.0mと不等

間である。柱掘形の中に瓦片が比較的多く埋まっていた。SD12953は調査区の南端近くにある東西溝。埋土に多くの瓦片が含まれていた。

3 遺 物

遺物のはとんどは瓦である。合わせて82点の軒瓦が出土したが、そのうち37点は雨落溝SD9171Bからのもの。大半は軒丸瓦6273・6274・6275・6279・6281型式、軒平瓦6641・6642・6643型式などの藤原宮式の軒瓦であるが、平城宮瓦編年のⅡ期以降に属する6311B・6663C型式の軒瓦が各1点含まれている。

4 まとめ

今回の調査で明らかになった主な点は次の通りである。

- 1) 挖込地業SX9199は、掘立柱塀SA9201と直接関係しない可能性が強い。
- 2) 掘立柱塀SA9201は2時期の柱掘形の重複ではなく、1時期だけである。
- 3) SA9201のすぐ南に、それよりも新しい東西溝SA12950を確認した。これは、東面の区画施設SA5550Bと遺構の状況が共通している。

上記したような事実と、これまでの調査の成果を合わせて、第一次朝堂院の区画施設の変遷を考えてみると、すでに述べたようにA～Dの4時期に大別できる。

A期 第一次朝堂院の区画施設が造営される以前の段階。この地域の基幹南北排水路SD3765が、第一次朝堂院の中軸線の東約102mの位置に掘削される。朝堂院を区画する施設として、中軸線の東約120mに南北方向の柱掘形列(SA8410)を掘り下げるが、柱を立てることなく、埋め戻されている。南面では、掘込地業SX9199を、第一次朝堂院南門の東12.2mの地点から東西約72mの間にわたって掘り下げるが、これも建造物の地下地業として完成することなく、造営の途中で埋め戻される。

B期 第一次朝堂院の区画施設として、掘立柱塀がつくられる時期。塀で区画される第一次朝堂院の規模は、東西約214m・600大尺(1大尺=1.2小尺≈0.355m)、南北約284m・800大尺である。南門が造営される前後でB₁・B₂の2小期に分かれる。

B₁期 南面は東半部をSA9201で、西半をSA9202で限られるが、中央のS

A9201・9202の間には、およそ15mの間隔があり、まだ門などの閉塞施設はつくられていない。全掘された東半部のSA9201は37間あり、柱間寸法は2.58～2.90mの間で一定していないが、平均すると2.68m、ほぼ9尺となる。38か所の柱穴のうち10か所で柱根が掘形内に残っていた。いっぽう東面塀5550Aは、柱間寸法が約2.96m・10尺で、96間ある。柱はすべて解体に際して抜き取られている。第140次の所見によれば、掘立柱塀SA5550Aは、柱を立てたのちに、幅4.4m、高

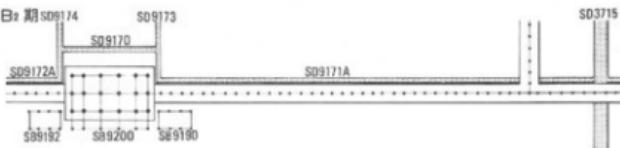
A期



B1期



B2期



C期



D期



第18図 第一次朝堂院南面区画施設変遷図

さ0.25mの基壇がつくられている。SA9201でみると、柱の直径は45cmもの太さで、柱掘形の深さは2m近くある。第一次大極殿院東回廊の下の暗渠の木樋に転用されていた柱材から復原されているよう（『平城宮発掘調査報告XI』）、塀の高さはおそらく5m前後あり、柱と柱の間には土壁を設け、屋根には瓦を葺いた大規模な施設であったと考えられる。この時期には、基幹排水路として南北溝SD3715がつくられる。SD3715は南北扉SA5550Aの東約17.5m・50大尺（60小尺）の位置にある。

B₂期 SA9201・9202の間に第一次朝堂院南門SB9200が造営される。この時期には第一次朝堂院の内部に東第一堂・第二堂も建てられ、第一次朝堂院が完成する。南門SB9200を造営する際に、SA9201・SA9202の中寄り各2間分を取り壊して門基壇の掘込地業を行っている。門の建物は桁行5間、梁間2間で、柱間寸法は桁行中央3間が15尺等間、両脇間が10尺、梁間が各15尺の切妻造りとみられる。門の南側には庇がつく。庇の出は15尺（約4.5m）で門基壇の外（南）側に庇を受ける掘立柱の掘形列がある。この庇の柱列と南側柱通りを揃えて、門の南側の東西に、桁行3間、梁間1間の東西棟掘立柱建物各1棟（SB9190・SB9192）が配置される。

門とSA9201・9202の北側に雨落溝がつくられ（SD9170・9171A・9172A）、門の東西には、第一次朝堂院内部の中央から南下した2条の南北溝（SD9173・9174）がSD9171A・9172AとL字型に接続する。

C期 第一次朝堂院を区画する塀SA5550A・9201が撤去されて、SA5550B・12950に改作される時期。SA5550B・12950とも柱は直径が20cmほどの細さであるのに、柱間隔は3mと広いので、SA5550A・9201のような壮大な塀ではなく、仮設的な板塀であったと考えられる。

D期 第一次朝堂院の区画施設が東面、南面とも築地塀につくりかえられる。南門SB9200は、南庇が取りはずされ、門南側東西の建物SB9190・9192も撤去される。門の東西の溝SD9173・9174は、それぞれ南に直流するように掘削され、南北築地塀の北側の雨落溝SD9171・9172は、約0.7m北に移される。

この調査は、店舗建設に伴なう事前調査である。調査地は、内裏北外郭に北接する所で、南北に細長いトレンチを設けて調査を行なった。

調査区の基本的な土層は、上から表土①、バラス混暗褐色砂質土②、黒色砂質土③で、そ下が黄褐色粘土の地山となる。

地山までは、すべて近世以降の堆積で、奈良時代の遺構は地山面で検出した。

検出した遺構は、近年まであった建物のコンクリート基礎と便座を除けば、東西溝2条が主なものである。

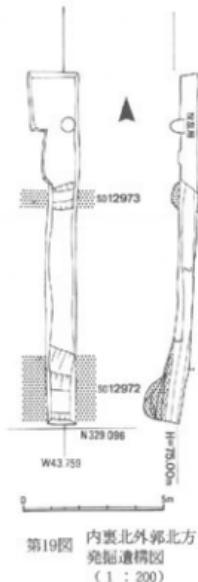
東西溝SD12972は、調査区の南端で検出した。溝幅は上端で2m、底で0.9m、深さが1.0mある。北肩の上端は少し崩れている。溝内の堆積層は灰色ないし茶褐色の粘質土で、奈良時代の瓦を含む。

東西溝SD12973は溝心々で、上記SD12972の北7.5mにある。溝幅は0.8~

0.9m、深さ0.3mである。溝内に砂混じりの黄褐色粘質土が堆積し、奈良時代の土器少量が出土した。

出土遺物のうち軒瓦は、SD12972から軒平瓦6664Dおよび6664L型式が各1点出土した。いずれも平城宮出土軒瓦編年II期に属する。土器は土師器小片が少量のみ。

本調査区は、「内裏北外郭」に北接する場所であり、「内裏北外郭」の北面を画する施設の存在が予想されていた。第139次調査では「内裏北外郭」の東北隅の築地が確認されており、これから復原される「内裏北外郭」官衙の南北規模は築地心々で、約64mである。今回検出のSD12972の溝心は南面築地SA488（第10次調査）心の北約70mに位置することから、北面築地の北雨落溝もしくは、「内裏北外郭」に北接する官衙の南限施設に関わる遺構と考えられる。



第19図 内裏北外郭北方
発掘遺構図
(1 : 200)

本調査は、平城宮の西北部にある佐紀池の南辺において、排水施設の建設に伴なう調査として実施した。佐紀池は、これまで数次にわたる調査によって、奈良時代にも苑池であったことを確認している。とくに、本調査区の東隣りで実施した第92次調査においては、池の南岸と新旧2時期の堰を伴なう排水路を検出しておらず、今回も池岸を確認する期待がもたれた。

基本層位

調査地の層序は、上から置土・旧耕土・床土の順であり、南半部では、この下に中世の遺物包含層（灰褐色質土・灰色混礫砂質土）が残り、以下は奈良時代の整地土となる。奈良時代の整地土は、北から南に順次埋められており、調査区の北端では厚さ約1.0m、南端では厚さ約0.4mまで残る。なお、奈良時代の整地土の北端に厚い炭層を認めたため、この部分を中心に地山面まで掘り下げて遺構を検出した。

遺構

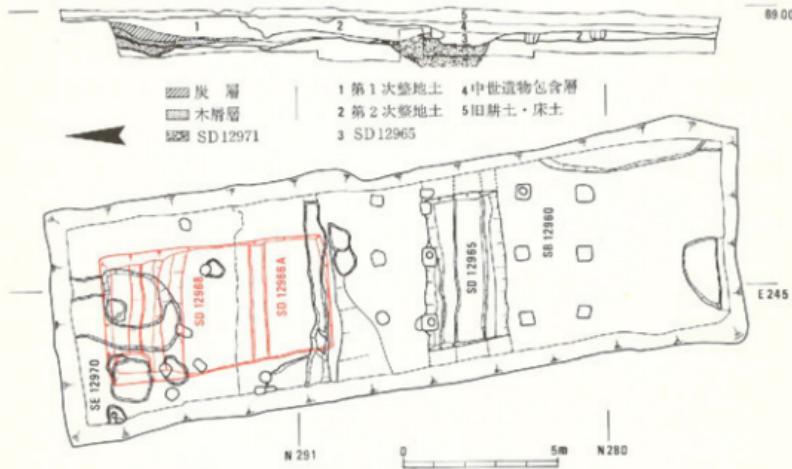
今回検出した主な遺構は、奈良時代の掘立柱建物1棟（SB12960）、溝4条（SD12965・12966A・12966B・12968）であり、他には時期不明の井戸1基（SE12970）と溝1条（SD12971）、中・近世の溝2条といくつかの土壙がある。奈良時代の遺構はA～Dの4時期に区分できる。

A期 この時期の遺構には、地山面で検出した2条の平行する東西溝SD12966A・12968がある。SD12968は幅約1.6m、深さ約0.3m、SD12966Aは幅約0.5m、深さ約0.2mであり、心々距離は約3.6mを測る。SD12968の底からは、平城宮出土軒瓦編年第I期（708～721年）の軒半瓦6664C・6665Aが出土している。A期の開始年代は、次のB期との関連からみて、奈良時代当初に遡る。調査区中央付近の断削り調査によって、奈良時代の整地上の下、地山面上で検出した東西方向の溝状遺構SD12971（幅約3.9m、深さ0.5m以上）は、木屑の他は遺物がなく年代が明らかでないが、位置的にはC期の東西溝SD12965とほぼ重なるの

で、その前身遺構になるのかもしれない。

B期 この時期には、調査区の北辺部が北から南に堆積する厚い木屑と炭層で覆われ、さらにこの上に暗茶褐色粘質土・黒褐色粘質土・青灰色粘土が積まれる（第1次整地土）。この積土は調査区北端から約6m南で0.5mほど1段低くなり、その裾には幅約0.3m、深さ約0.2mの東西溝SD12966Bが設けられる。SD12966Bは、位置的にA期のSD12966Aと重なるが、溝底が0.3mほど高くなる。A期からB期への移行年代については、木屑・炭層から和銅～養老6年の紀年木簡、平城宮土器IIの土器、平城宮出土軒瓦編年第I期の軒丸瓦6284C、軒平瓦6664C、第1次整地土中から平城宮土器IIの土器、平城宮出土軒瓦編年第II期（721～745）の軒丸瓦6313Aが出土し、他に新しい遺物を含まないことから、養老6年（722）頃に限定することができる。

C期 この時期には、B期のSD12966B以南を黄褐色混疊粘質土で整地（第2次整地土）し、調査区のほぼ中央部に幅約2.6m、深さ約0.5mの東西溝SD12965を設ける。この溝の埋土からは、平城宮土器Vの土器、平城宮出土軒瓦編年第III



第20図 佐紀池周辺発掘遺構図

期（745～757）の軒丸瓦6225C・6133、軒平瓦6721Cなどが出土しており、奈良時代末頃まで存続したことがわかる。B期からC期への移行年代については、第2次整地土中から平城宮土器Ⅲかと考えられる上器が出土しており、奈良時代中頃の時期が推定される。

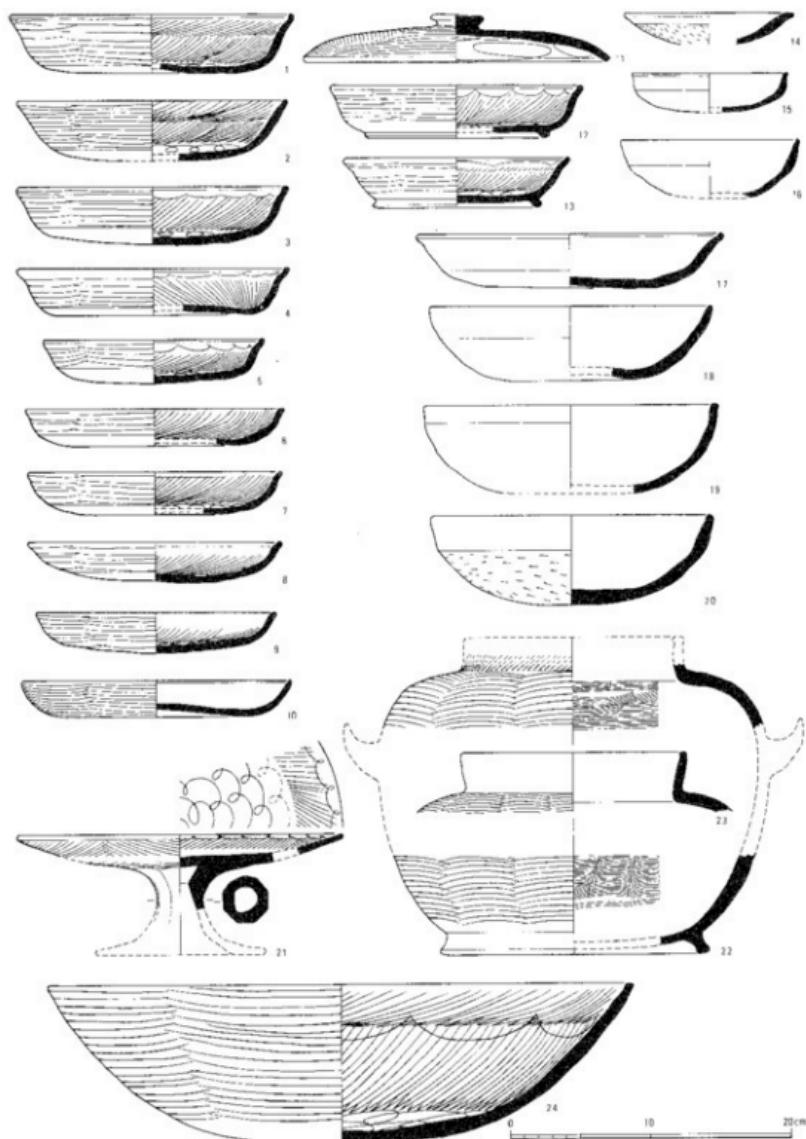
D期 この時期には、C期の東西溝SD12965が埋没したあとに、南北両廂付東西棟建物SB12960が設けられる。SB12960は桁行3間分を検出した。柱間は、桁行が7尺等間、梁行が身舎5尺等間、北廂5.5尺、南廂6.5尺である。時期はSD12965の焼絶後、奈良時代末もしくは平安時代初め頃と推定される。

遺 物

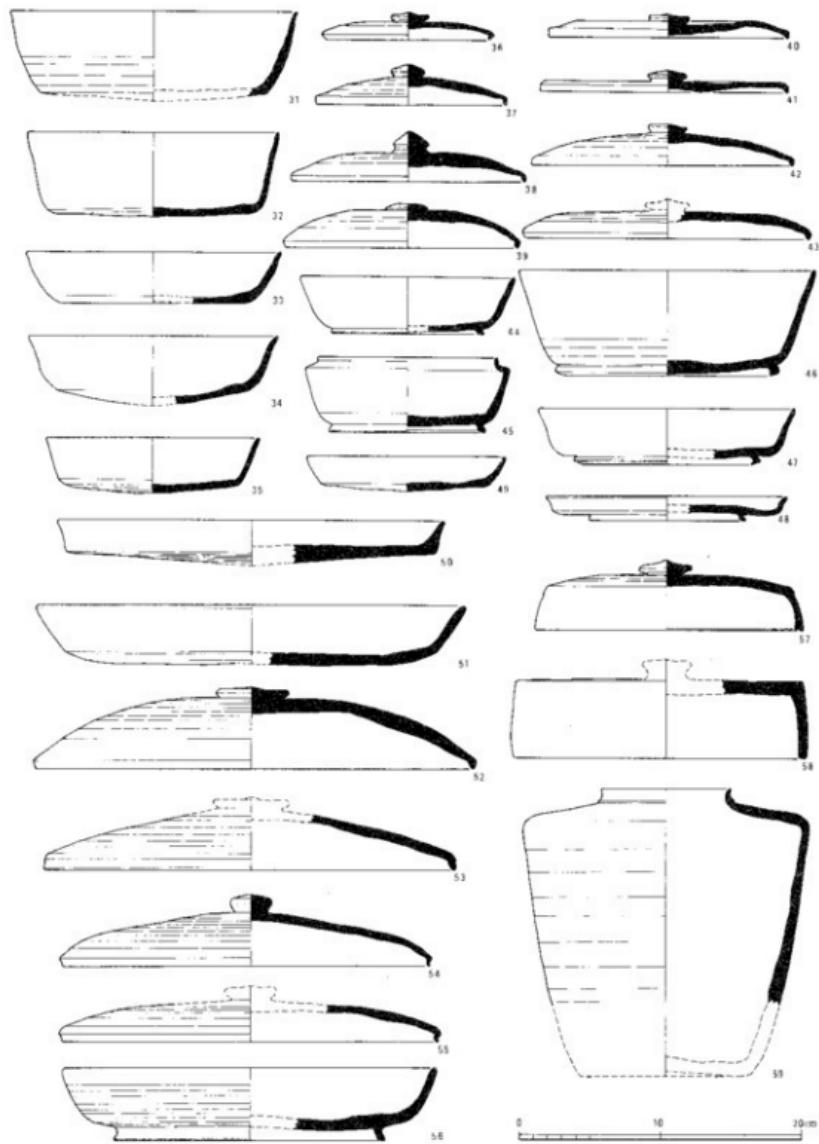
今回の調査では、奈良時代の第1次整地土とその下にある木屑・炭層及び東西溝SD12965などから、比較的多量の木簡・木製品・瓦・土器が出土した。このうち、奈良時代の第1次整地土と木屑・炭層から出土した遺物は、養老6年を下限とする一括遺物であるので、これらを中心に遺物の概要を述べることにする。

木簡 総点数207点が出上した。うち4点はSD12960から、他はすべて木屑・炭層からの出上である。後者の木簡には、荷札が多く、和銅4年と養老2・3・4・6年の紀年木簡、四葉の中に「天壇」「丈部若麻呂」と書き、下左右にそれぞれ「熱口」「長口」「口河」と書いた、呪符かと考えられるものなどがある。以下、木屑・炭層出土の主要な木簡の釈文を掲げておく。

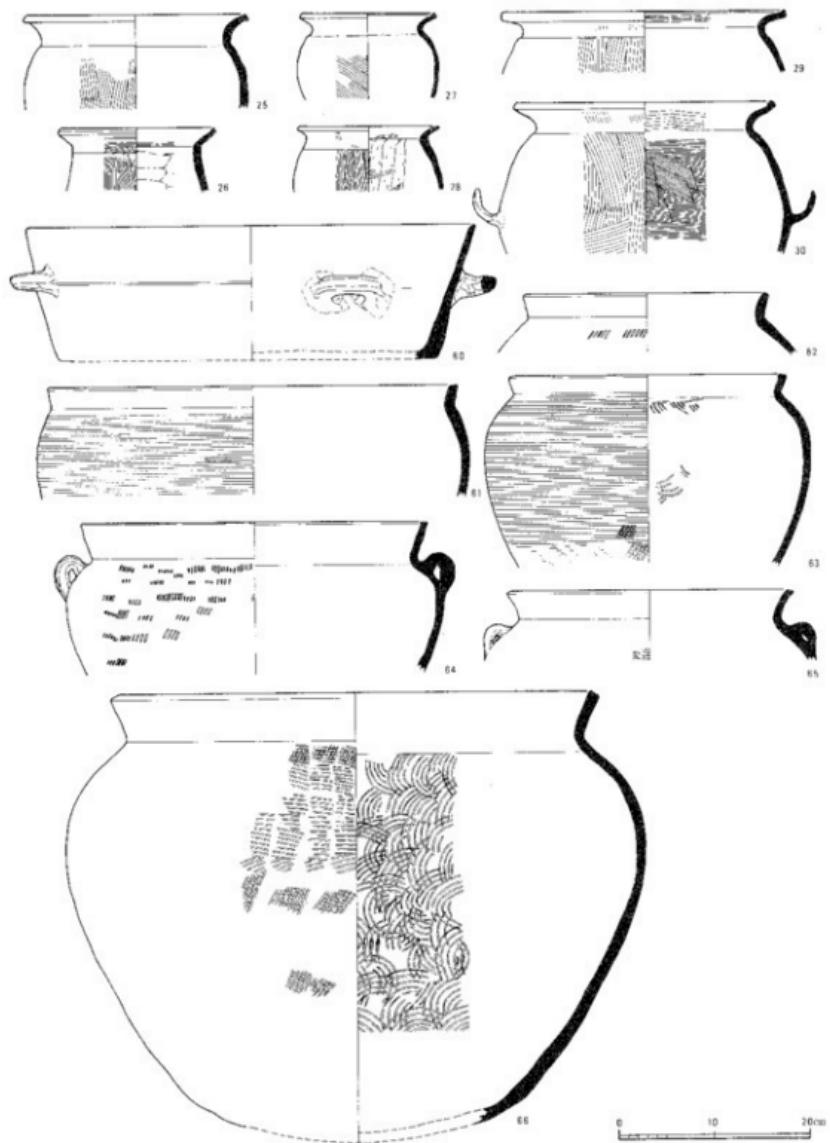
| | | |
|---|---------------------------------------|--------------------|
| 1 | 參河國芳豆郡比莫嶋海部供奉四月料大賛黒鯛六口 | 6032 |
| 2 | 主水司布一端六尺 | 6032 |
| 3 | 供 御口糸十絹 | 6032 |
| 4 | ・若狭國遠敷郡速敷里口口果口 ・若狭國遠敷郡調塙一斗 口口 6031 | (耳か) |
| | ・和銅四年四月十一日 | |
| 5 | 伯耆國相見郡巨勢郷雜脂一斗五升 養老口年十月 | 6031 |
| 6 | ・口烏口受 米九石六口 ・養老四年十月十六日 | 6061 (馬形に転用 第24図右) |



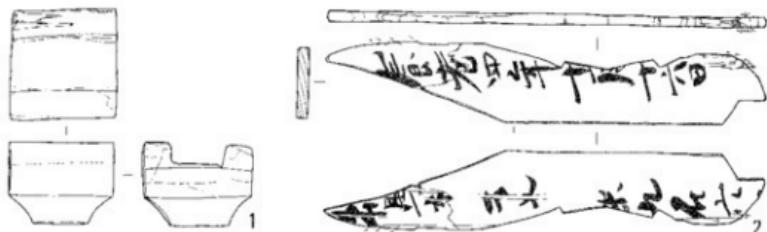
第21図 第一次整地土下出土上上器(1) (1 : 4)



第22図 第一次整地土下出土器(2) (1 : 4)



第23図 第一次墳地土下出土土器(3) (1 : 6)



第24図 木屑層出土建築ひな形部材巻斗・馬形（1：2）

瓦塼類 軒丸・軒平瓦各10点、皿戸・廁斗瓦各1点のほか、比較的多量の丸・平瓦が出土した。軒瓦については、第1次整地上及び木屑・炭層から、6284C-66 64Cのほか、6313A、6665Aが出土し、その下限を養老6年とする成果を得た。

上器類 SD12965から奈良時代末頃の土器が若干出土したが、他は養老6年を下限とする第1次整地土最下層の暗茶褐色粘質土、木屑・炭層から、平城宮土器IIの多種多様な上器がまとまって出土した（第21～23図）。なお、第2次整地上中から円筒埴輪の比較的大きな破片が1点出土した。

木製品・金属製品 第1次整地土中から火鑛臼・漆器鉢、木屑・炭層から杓子・箸・曲物容器底板・馬形（第24図右）・建築ひな形部材巻斗（第24図左）・錐柄及び多量の削屑や桧皮が出土し、SD12965から鉄釘の完形品1点、第1次整地土及び木屑・炭層からフイゴ羽口が数点出土した。

まとめ

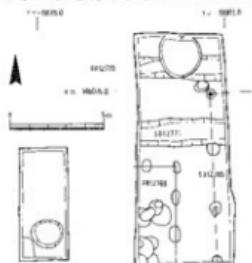
今回の調査では、当初の目的であった、池岸を確認するまでには至らなかった。ただ、B期においてはSD12966B以北が一段高くなってしまっており、これが堤の一部であった可能性を考えることができよう。本調査区の東隣りで実施した第92次調査の池岸は排水路にむかって南に張り出し、本調査区付近では池岸が幾分か北に後退するものと推定される。第1次整地土下の木屑・炭層は多量の削屑・桧皮を含み、この地域において養老6年頃に何らかの造営が行なわれたことが考えられる。次に、SD12965は、位置的には、宮西辺部の推定馬齋やその東方官衙の北面を限る築地の北側溝より約3m北になり、この地域における何らかの官衙の北限にかかる溝と推定される。

工場建設にともなう事前調査。調査区は、1976年度に柱穴を検出した第98—19次調査区のすぐ北方にあたる。調査は、12m×5.5mの南北トレンチ、およびその西方に6m×2.5mの拡張区を設定して行なった。

表上下には中・近世の遺物を包含する灰褐色の砂質土があり、その下、現地表面下0.6mで、奈良時代の遺物包含層である灰褐色のパラス層に達する。遺構は、その下の黄褐色を呈する地山面で検出した。検出した主な遺構は、奈良時代の掘立柱建物2棟、東西溝2条、近世の野井戸2基である。他に、奈良時代の柱穴群があるが、調査面積が狭小だったこともあり、その性格を解明するには至らなかつた。

SB12766は桁行3間以上、梁間2間の南北棟建物と推定され、東の側柱と北の妻を検出した。耐は持たないと思われる。SB12765は10尺等間の南北に並ぶ柱穴列で、3間分を検出した。発掘区北端では柱穴を検出しえなかったことから、柱穴列は東方に折れ曲がり、南北棟となるものと思われる。SD12770・12771は東西に平行に走る2条の溝で、なんらかの区画にかかる施設であろう。切り合ひ関係からみて、SB12765よりは新らしい。

SD12771からは、Ⅲ期の軒平瓦6727Bと奈良時代後半の土器が出土した。柱穴からも奈良時代の瓦、土器が出上したが、いずれも小片である。



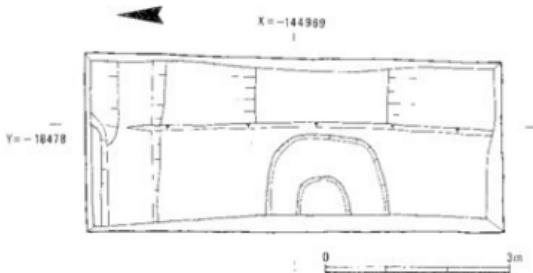
第25図 馬寮地区北方発掘遺構図
(1:300)

今回の調査では、調査面積が約75m²と狭かったにもかかわらず、建物群と区画にかかると思われる溝を検出することができた。平城宮内のこの地域では、従来の調査では奈良時代の顕著な遺構を検出することができなかつたが、今回の調査により、これまで不明であったが馬寮地区北方地域の様相を解明する手がかりの一端が得られたと言える。今後、こうした遺構の性格の解明をも含めて、調査の進展が期待される。

個人住宅増築とともになう事前調査である。調査地は、歌姫街道沿い西側の宮北面大垣推定地に位置し、平城宮第23次調査区のすぐ東にあたる。東西3m南北7mの調査区を設定した。

調査地の土層層序は、表土が北半では0.2~0.3mあるが、南にかけて徐々にさがり南端で0.7mの厚さとなる。表土下は黄褐色土となり、中央部はやや淡い黄褐色土であるが、南は若干暗みをおびた黄褐色土となる。なお北端1m程は一部新しい土壤があり、黄褐色土が落ち込んでいる。この状況を北面大垣との関係からみると、この北端の落込み部分が、大垣の北雨落溝にあたり、その南の淡黄褐色土部分が大垣築土基底部にあたると考えられる。大垣築土は幅2.1m、厚さ0.35m残存していることになる。なお西半について築土を排土して下層遺構の有無の確認を行ったところ、築土直下に南北2.0mの柱掘形1個の東半分を検出した。第23次調査では、北面大垣に関して、築地基底部およびその下層遺構として部分的にはあるが掘立柱塀の柱掘形を確認している。今回検出遺構はその東延部にあたると考えられる。

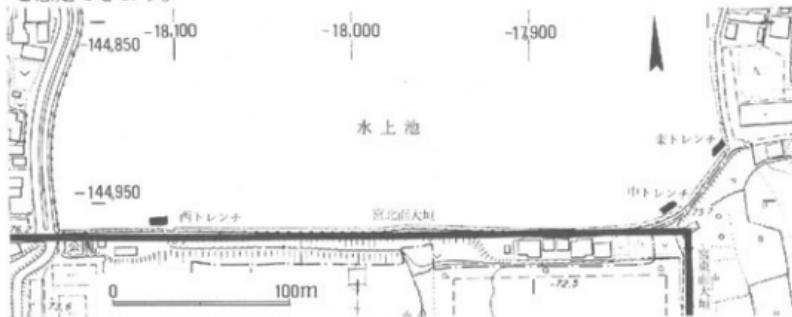
遺物は、大垣築土からほとんど出土しなかったが、北雨落溝にあたると考えられる東西溝からは瓦の出土をみ、軒瓦として軒丸瓦6225A 2点・軒平瓦6663C 2点が出土している。



第26図 平城宮北方遺跡発掘遺構図 (1 : 100)

市道都跡910号線の道路拡幅と水上池南岸の護岸工事にともなう事前調査である。調査区は平城宮北辺大垣（現在の市道）のすぐ北側で、一条北大路・堀地が想定される所である。同時に、水上池は西側の佐紀池同様、地形的に谷筋にあたり、谷筋を堰きとめた奈良時代の園池の存在も考えられ、池の堤と大路、大垣の関係を知る上で重要な所である。但し、魚の保障などの問題で水が充分に引けず、調査は、東・中・西の3箇所のトレンチに限られ、西トレンチ（30m²）では奈良時代中頃～末にかけての整地の状況を確認しただけである。中トレンチ（26m²）では、トレンチ北側に国土方眼方位にのる東西溝SD12975を検出した。北肩を検出できず、溝巾は未確認であるが、深さは検出範囲で30cmである。溝の堆積土は炭混りの黒色粘質土で、奈良時代末の完形に近い土器（第28～31図）をはじめ、土馬・瓦片などの遺物を多量に含んでいる。東トレンチ（39m²）では地表下10～20cmで黄褐色粘土の地山が、西へ向ってやや下がっていく状況を確認し、西南部に厚さ10cmの灰色砂質土の堆積があり、埴輪円筒棺と奈良時代土器片を含む。

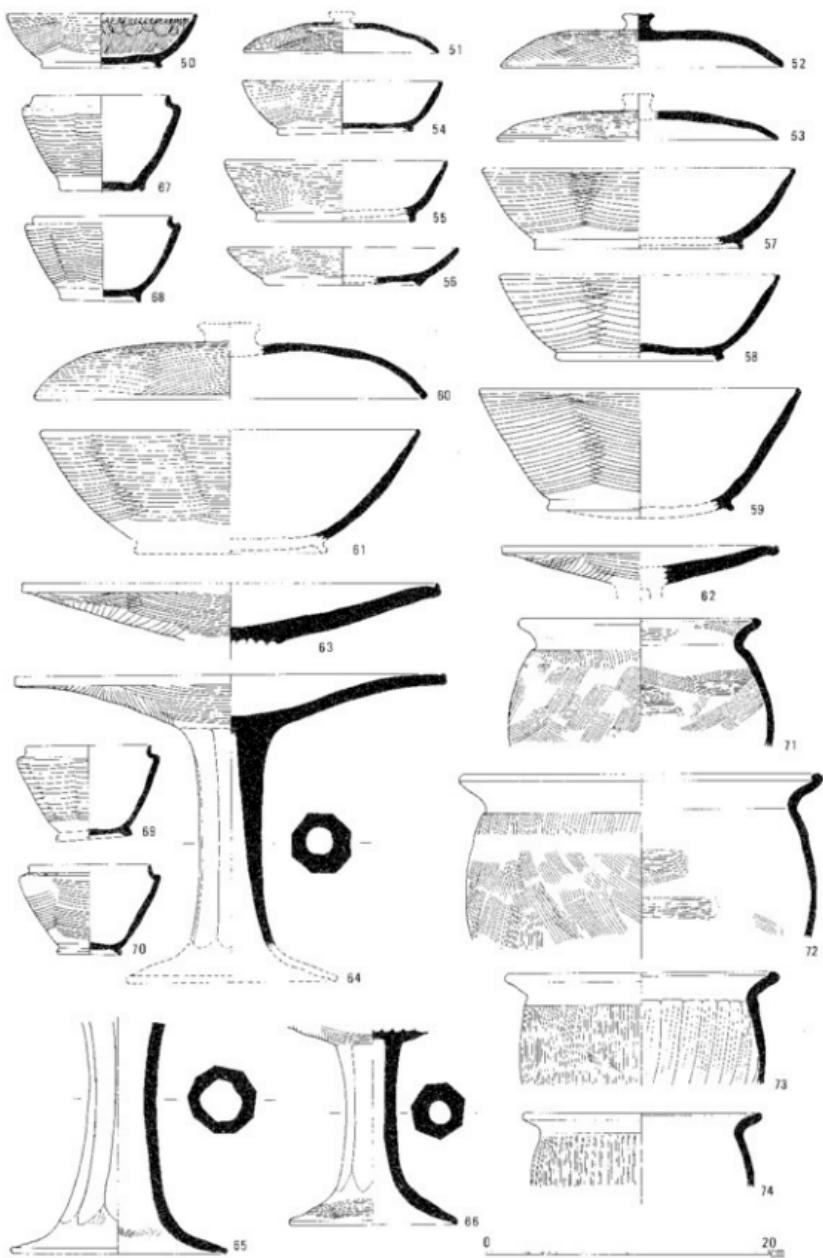
以上をまとめると、地山の下がりが東トレンチと中トレンチの中間に想定されることや、中トレンチ・西トレンチの堆積状況から、現在の水上池があるもともとの谷筋を少くとも奈良時代中頃には北辺大垣の近くは整地して利用されていたと想定できよう。



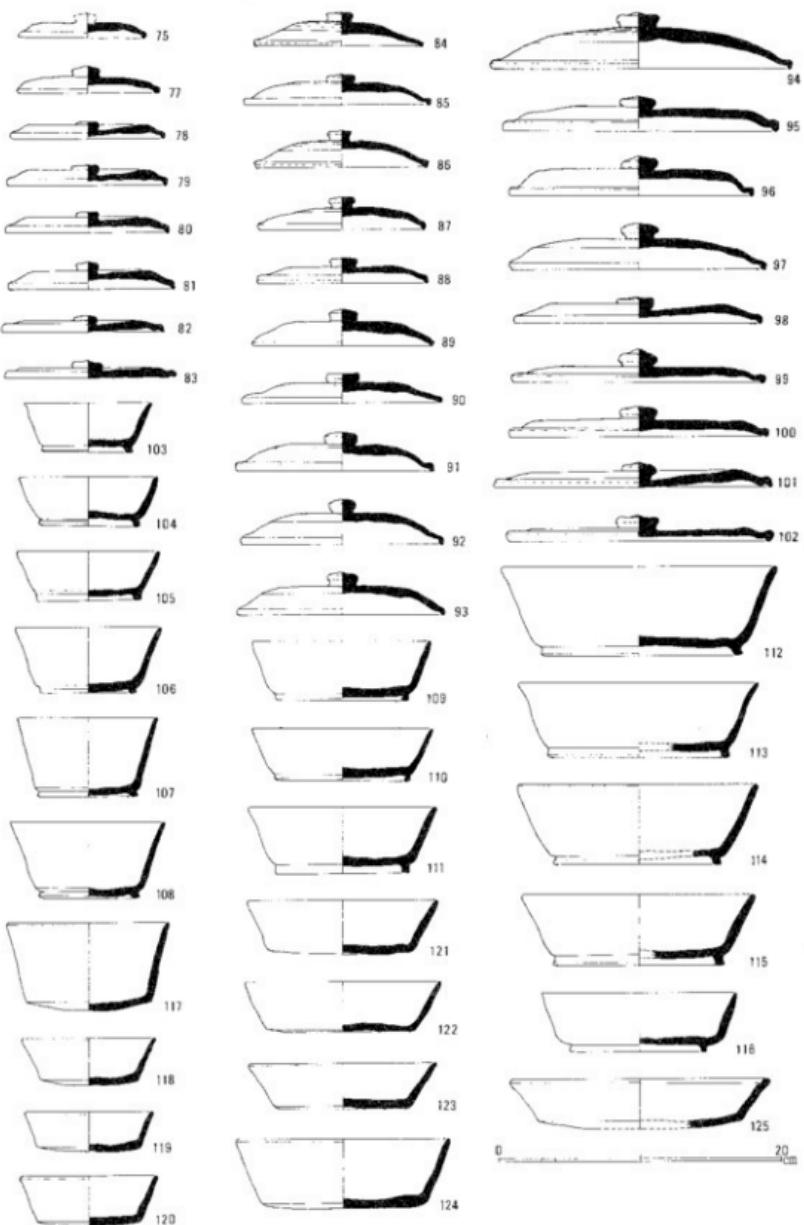
第27図 平城宮北方遺跡調査位置図



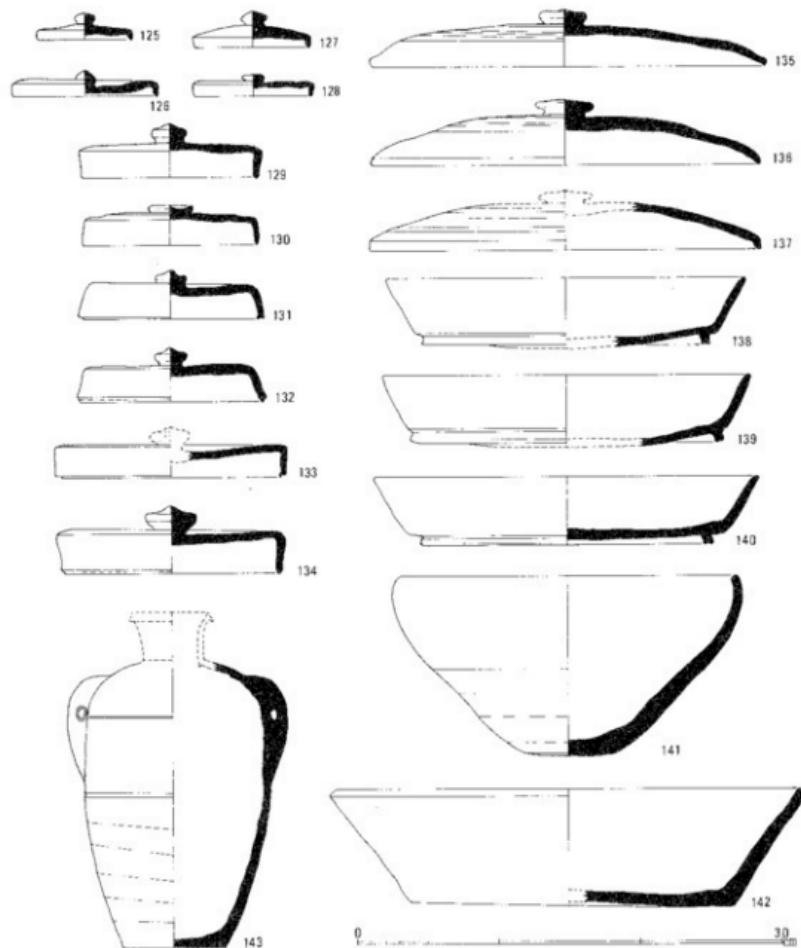
第28図 SDI2975出土器(1)(1 : 4)



第29图 SDI2975出土器(2)(1:4)



第30図 SD12975出土上器(3)(1 : 4)



第31図 SD12975出土器(4)(1:4)

出土遺物 SD12975から平城宮土器Vに属す保存良好な土器類（1～74；土師器、75～142；須恵器）が大量に出土した。土師器には河内産（50）、須恵器には猿投産、播磨産と目されるものが含まれる。他に墨書き土器（「絵」）、亀甲片が出士している。東区からは、1個体分の埴輪円筒棺が出士した。

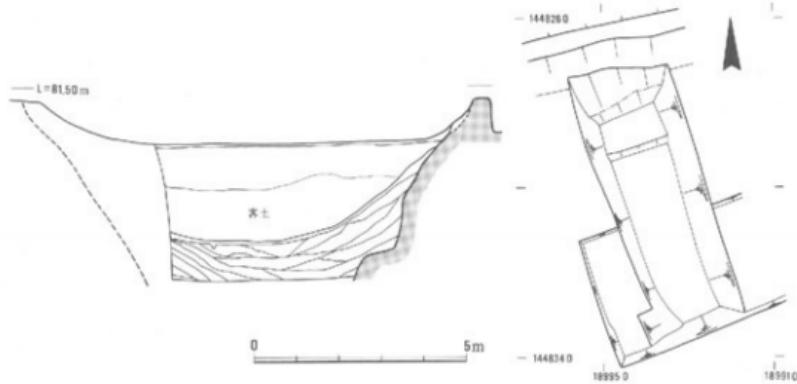
山陵町における民家増築に伴う事前調査。調査地は平城宮北辺地域の西北部にあたり、下吉堂池の西南、超昇寺城跡の西方に位置する。調査地は現在は平坦地であるが、かつては深さ3mほどの谷状地形で、これを十数年前に埋立てたとの地主の証言があり、調査の結果、超昇寺城に関連した濠の存在が明らかになった。濠の上部には埋立て時の客土（黄褐色山砂）が厚く堆積し、現地表下2.3mで旧表土の黒色腐蝕土に達する。これより濠の埋土を1mほど掘り下げたが、湧水が激しく以下の掘り下げを断念せざるを得なかった。したがって濠の底面の形状は不明である。北岸から発掘区底面までの深さは4.2mに達する。検出した濠の北壁は55度近い急勾配で立ち上り、下半部に軟弱な細砂層の崩壊によって生じた自然の段差がみられる。南壁は既存建物の敷地下に位置するが、濠の壁面にそって堆積した埋土の傾斜などから、濠幅は10.6m前後に復元できる。濠の北側は後世に大きく削平され、北岸が上塁状の高まりとなって遺存する。濠内からは時期を決める遺物の出土がなかったが、東接する超昇寺城に関連する濠とみてよいだろう。

超昇寺城は興福寺衆徒超昇寺氏の城郭で、15世紀中頃に記録に登場する。現在残る形態の城壁に整備されたのは、筒井・松永両氏の抗争が激化した16世紀中頃のことと考えられる。永禄12（1569）年には松永久秀によって破却されたが、再び修復され、天正8（1580）年の織田信長による一団破城の時まで存続したことが知られる。城跡は御前池の西北に残る空濠や土塁から、主郭と推定される方形郭、その北と東を囲む外郭、外郭から西方へ架かる土橋などの存在が指摘されている。当調査部では超昇寺城の遺存状況を現地形から把握する目的で、昭和55年に実測調査を行ったが、今回の調査により、城の範囲が従来の想定範囲を越えて西方に延びることが明らかになった。この西方一帯を超昇寺氏の居館址に比定する見解もあるが、今回検出した濠は調査区からさらに西方に延び、八幡神社に至る南北道路沿いに南折していたとの地主の証言もあり、東方の城郭遺構と一緒にるものと考えられる。また今回検出の濠を東方に延長すると、下吉堂池の南西の

突出部にぶつかり、この濠が下吉堂池と一体となって超昇寺城の北側の防御施設として機能していたことが想定される。本調査地を含む一帯は、宅地化の進行により旧地形の改変が著しく、超昇寺城の全容を明らかにするためには今後の発掘調査の積み重ねが必要となろう。



第32図 平城宮北方遺跡調査位置図



第33図 平城宮北方遺跡発掘遺構図

住宅建設に伴なう事前調査である。調査地は、宮北面中門推定地の北延長上、宮北面大垣ライン北方約30mにあたる。

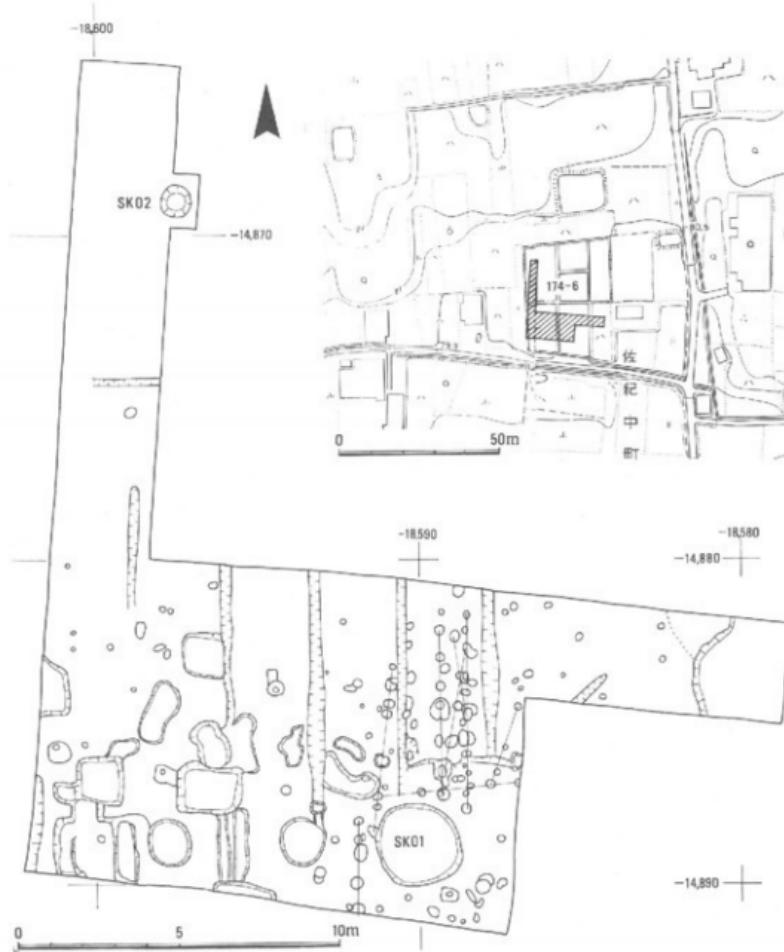
調査地はもと水田で、基本的な土層は、上から①耕土、②炭混り黄褐粘質土、③黄灰砂質土、④バラス混り暗赤褐粘質土、⑤灰褐土、⑥炭混り灰色砂質土、⑦黄褐粘土（地山）となる。このうち④、⑤、⑥層は、調査区の西南より部分にのみ存在する。遺構検出面は、⑦地山の場合、⑤灰褐土の場合、③黄砂質土の場合がある。

検出した主な遺構には塀8条、土壙12個所、溝6条の他、小穴多数がある。

土塙SK01は、直径2.5mの不整円形を呈し、井戸と思われるが、井戸枠は残っていない。深さ1mまで確認したが、崩壊の危険のため、最底部は確認するに至らなかった。土塙SK02は円形で、深さ1.2mある。この他多数の土壙があり、多くは、一辺が1.0~1.5mほど、深さ50cm位のもので、土層の状況等からみて粘土の採掘場と考えられる。塀は南北塀が7条、東西塀が1条あり、大部分がSK01の北側に集中して存在する。柱間間隔は、0.8~1.3mで、2間、3間、6間の3種がみられる。南北塀には柱穴の重複があり、同時存在のものは1~2条に限られると思われる。南北溝5条は調査区の中で最も時期の下がる遺構で、水田耕作に伴なう溝である。

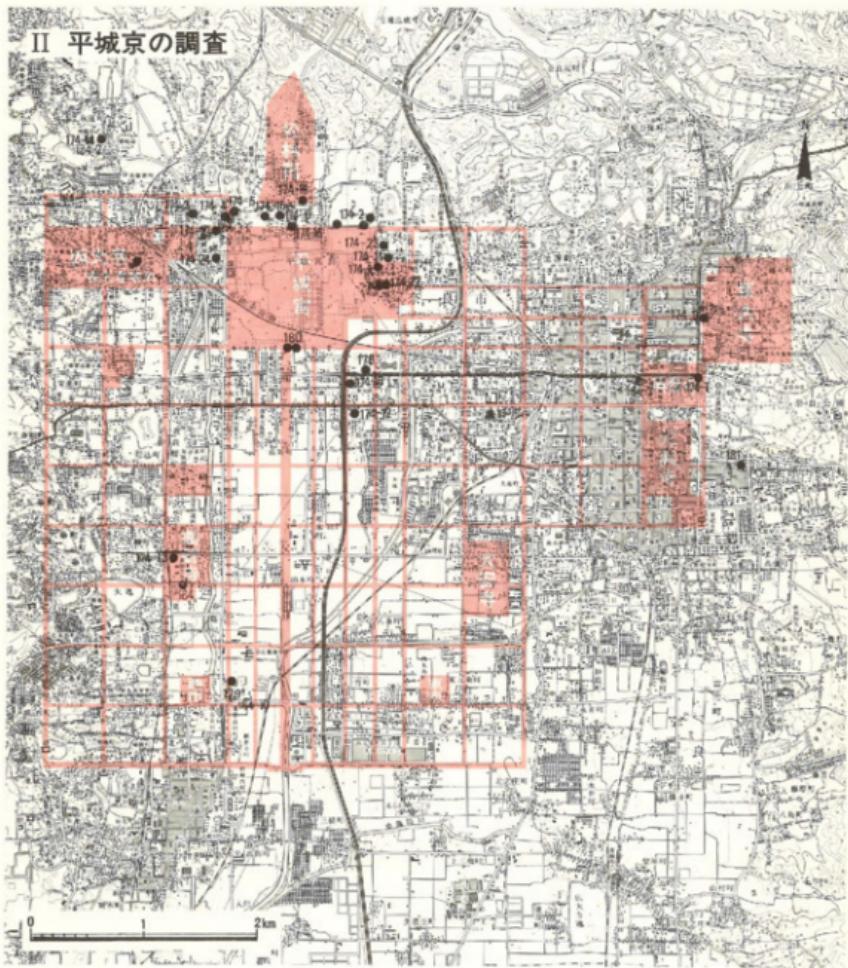
出土遺物としては、SK01、SK02他から中世の土師器（羽釜）、瓦器（楕・小皿・火舎）、陶器や中世の瓦、埠の破片が少量出土している。奈良時代に属す遺物は殆んどみられない。

以上のように本調査区は中世の井戸、粘土採掘場を主体とすることが判明した。奈良時代の遺構は無く、また、この付近に想定されている超昇寺との関連もなお明らかでない。



第34図 平城宮北方遺跡調査位置図・発掘遺構図

II 平城京の調査



第35図 昭和61年度平城京内発掘調査位置図

昭和61年度 平城京内発掘調査地一覧

| 調査次数 | 調査地 | 面積 | 調査期間 | 備考 | 発掘担当者 | 掲載頁 |
|-------|------------|---------------------|-------|-----------------|-------|-------------------|
| 174-1 | 法華寺旧境内 | 法華寺町930・931 | 16 | 86.4.18 | 塙本 宗敬 | 松村 恵司 82 |
| 豪 3 | 右京一条北辺二坊 | 山陵町110-2他 | 34 | 5.7 | ヒラサワ | 下田 则道 |
| 豪 7 | 興福寺旧境内 | 飛鳥路町48他 | 950 | 5.19~7.29 | 地下歩道 | 山岸 常人 88 上野 邦一 |
| 豪 9 | 東大寺旧境内 | 押上町31-1 | 21 | 6.24~6.26 | 大谷 悅子 | 山岸 常人 |
| 10 | 左京三条二坊三・四坪 | 二条大路一丁目 591-1, 4 | 490 | 7.7~7.25 | 原谷 泰之 | 小林 謙一 58 |
| 11 | 左京一条二坊十四坪 | 法華寺町字北町村中 945 | 9.9 | 7.10~7.11 | 駿河 義一 | 鶴 淳一郎 55 |
| 12 | 左京四条二坊一坪 | 四条大路一丁目 794 | 1,070 | 7.19~9.6 | 永井 正雄 | 金子 裕之 72 |
| 13 | 薬師寺旧境内 | 西の京町 375 2 | 10 | 8.7~8.12 | 白川 政公 | 小林 謙一 89 |
| 豪 14 | 秋篠寺旧境内 | 秋篠町 758 | 7.5 | 9.9 | 河辺 政子 | 上野 邦一 |
| 豪 19 | 右京一条二坊 | 佐紀町21-1, 2 | 5 | 12.3~12.5 | 大西 利明 | 井上 和人 |
| 22 | 法華寺旧境内 | 法華寺町西海町630-3 | 95 | 87.1.7~1.27 | 公民館 | 島田 敏男 83 |
| 豪 23 | " | 法華寺中町 633 | 4.6 | 1.30 | 本田 ヤエ | 島田 敏男 |
| 24 | 右京一条二坊三坪 | 二条町2-2-65-1 | 43.2 | 3.2~3.5 | 杉本喜久藏 | H辺 征大 74 |
| 178 | 左京三条二坊七坪 | 二条大路南一丁目 111-1他 | 6,900 | 86.9.30~87.4.24 | そごう | 井上 和人 61 岩永 駿一 |
| 179 | 右京八条一坊十四坪 | 大和郡山市九条町 132他 | 1,100 | 11.7~12.26 | 焼却場 | 本中 真 75 |
| 180 | 左京三条一坊一・八坪 | 北新町(北新大池, 小池) | 150 | 87.1.28~2.16 | | 橋本 義則 56 |
| 181 | 頭塔 | 高畠町字頭塔 921 | 300 | 2.2~4.17 | 奈良県整備 | 高瀬 要一 77 |
| 次数外 | 西大寺 | 西大寺芝町一丁目 | 456.7 | 86.7.23~9.29 | 防 災 | 黒 淳一郎 90 |

豪は本文に収録せず。巻末「その他の発掘調査一覧」参照。

この調査は、住宅改築に伴なう事前調査として実施した。

調査地は、法華寺北方、通称一条通りから南に下る道路と一条通りと平行して走る東西道路の交差するすぐ東側の宅地である。

調査は、宅地東側の畠地に南北トレーナーを設けて実施した。

遺構

現地表下約20~40cmで黄褐色粘土の地山となり、この面で井戸SE01、南北溝SD02、土壌SK03を検出した。SE01は、径2.0m程の円形の掘形で、埋土から江戸時代の陶磁器片が少量出土した。深さは60cm以上あるが調査区の制約のため、底を確認するに至らなかった。SD02は、幅約30cm、深さ10cm程の細い溝で、SE01に切られる。SK03は、深さ10cm程の浅い土壌で、遺物は出土していない。

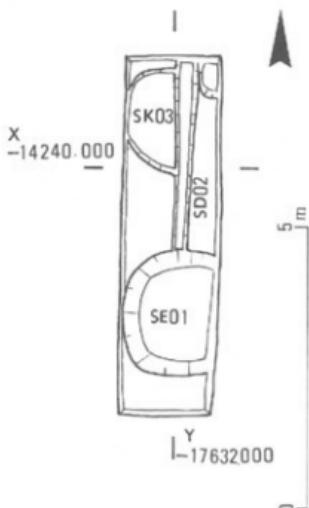
いずれも、中世以降の遺構であり、奈良時代の当坪に関連する遺構は検出していない。

遺物

出土遺物は少なく、井戸SE01から江戸時代の陶磁器片、地山面直上から15世紀頃の青磁碗の小片が出土しているに過ぎない。



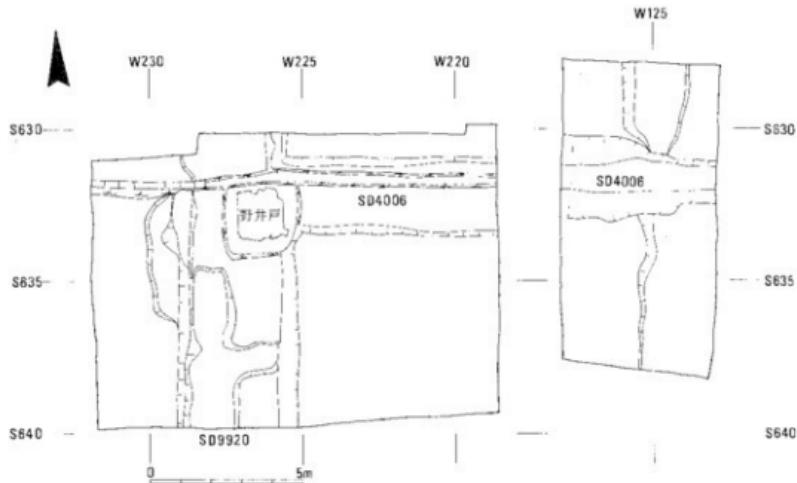
第36図 左京一条二坊十四坪調査位置図



第37図 左京一条二坊十四坪発掘遺構図

本調査は、当研究所と奈良市がそれぞれ平城宮跡に南接する北新大池の北半分および北新小池を埋め立てて、二条大路と朱雀大路を復原整備するのにともなう事前調査である。本調査の目的は、二条大路南側溝と朱雀大路東側溝の位置とその残存状況、および左京三条一坊一・八坪の西北隅の状況を確認することにおいた。これまで、二条大路南側溝は、第32次・第118-22次・第122次・第133次・第155次・第167次の各調査で検出しており、また朱雀大路東側溝については、第130次調査で二条大路北側溝との合流点を確認している。今回の調査では、従来の知見に基づき、二条大路南側溝と朱雀大路東側溝の存在が推定される北新大池の池底と北新小池の岸沿いに、二か所の発掘区（東区と西区）を設けて行った。

東区 北新大池の西岸沿いの池底部に、東西約5m、南北約10mの発掘区を設けた。大池の池底下約20cmで二条大路南側溝SD4006を検出した。SD4006は、幅

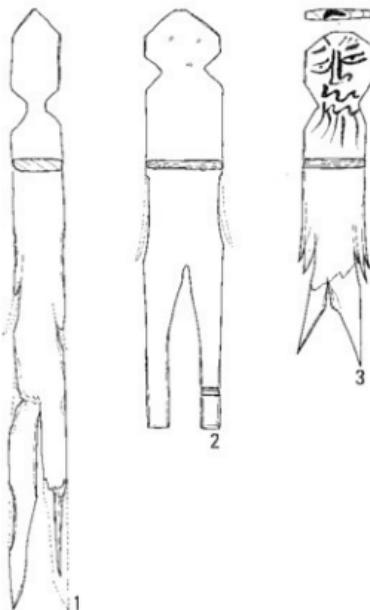


第38図 左京三条一坊一・八坪発掘遺構図

約4.5m、深さ約90cmの素掘りの東西溝で、溝内の堆積は大きく上下二層にわけられる。下層には比較的多量の平瓦・丸瓦の破片が落ち込んでいたが、上層には全く遺物が含まれていなかった。なお溝の南側は後世の削平をうけており、左京三条一坊八坪北辺を限る築地塀の痕跡は確認できなかった。

西区 北新小池の東堤に沿って、東西約13m、南北約9mの発掘区を設けた。現地表下約50cmで朱雀大路東側溝SD9920と二条大路南側溝SD4006の二条の溝を検出した。SD9920は、幅約3.8m、深さ約60cmの素掘りの南北溝で、溝底は部分的に深くえぐられているがほぼ平坦である。溝内の堆積はおおむね上下二層にわかれるが、二層とも遺物をあまり含んでいない。二条大路南側溝との合流点の下層の堆積から3点の人形（第39図）のはかに比較的多量の木屑が出上した以外は、少量の須恵器・土師器・瓦片と藤原宮式の薪平瓦（6642-B）1点が出土したに過ぎない。SD4006は、幅約3.3m、深さ約40cmの素掘りの東西溝で、溝の底は平坦になっている。溝内の堆積は東区同様に上下二層に分かれ、判読できない木簡2点が出上したほかは、遺物の量はきわめて少ない。なお左京三条一坊一坪の西面および北面を限る築地塀の痕跡は確認できなかった。

以上、今回の調査の成果をまとめると、二条大路南側溝と朱雀大路東側溝を東西区両発掘区で推定位置に検出することができたが、左京三条一坊一坪の西辺・北辺および八坪北辺を限る築地塀を確認することはできなかった。



第39図 SD9920出土人形(1:2)

この調査は店舗建設に伴なう事前調査である。調査地は、国道368号線（大宮通り）の南約150m、国道24号線バイパスの東に接しており、平城京左京三条二坊四坪の西北部分にあたる。

調査地は、全体に厚さ0.8~0.9mの盛土（現代）があり、その下は、水田耕土、床上、灰色ないし暗褐色の砂質土、黄褐色粘質土の順となる。遺構面は、砂質土の上面であるが、調査区の西南部では、炭化物を含む灰色粘質土の遺物包含層がひろがる。

遺構

調査の結果、掘立柱建物7棟、掘立柱塀7条、井戸1基、三・四坪の坪境小路とその南北両側溝のほか、多数の土壌、溝などを検出した。

これらの遺構は、遺物や、遺構の状況からA~Dの4期に区分できる。

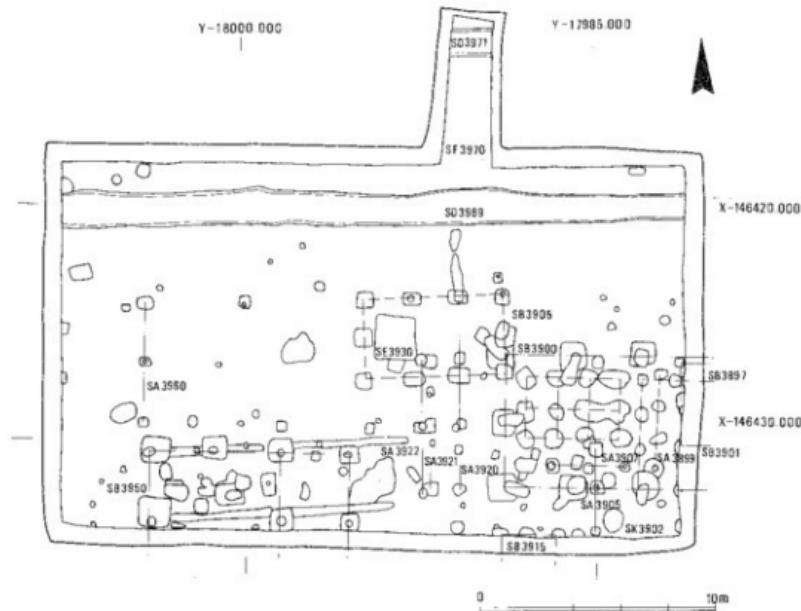
A期 調査区の東南部で検出した掘立柱建物3棟、掘立柱塀1条がこの時期に属する。SB3910は、2間×3間、総柱で倉庫風の東西棟、柱間は1.35m(4.5尺)等間で、柱はすべて抜き取られている。東に接するSB3897は、2間×3間の南北棟。北妻の柱筋がSB3910の北側柱と揃う。東側柱は発掘区の外になるが、柱間は、梁行1.85m(6.2尺)、桁行1.55m(5.2尺)である。SB3915は、1.2m(4尺)間隔で東西にならぶ柱掘形を検出したのみであるが、南北棟の北妻部分とみられる。SA3907は2間の東西棟で、柱間は、1.55m(5.2尺)である。以上の遺構は方位を揃え、北で東に振れる。SB3910の東南隅柱の抜き取り穴から奈良時代中頃の土器が出上している。また、SB3897の西南にある上墳SK3902からも奈良時代中頃の土器が出土した。A期の遺構の廃絶に伴なうものであろうか。

B期 この時期には、掘立柱建物2棟と井戸1基がある。SB3900は東西棟建物の一部で、梁行2間桁行2間以上である。柱はすべて抜き取られている。SB3950は、東に廂がつく南北棟建物で、柱の抜き取り痕跡がある。柱間寸法は、い

ずれの建物も梁行2.8m（9.5尺）、桁行2.95m（10尺）である。SB3950の廻の出は2.95m（10尺）である。建物方位は北で少し東に振れる。SE3930は、井戸枠が完全に抜き取られている。柱抜き取り穴や井戸からは、奈良時代中頃から後半にかけての遺物が出土している。

C期 調査区中央の東西棟建物SB3925の1棟のみがある。2間×3間で、柱間は梁行1.7m（5.8尺）、桁行2.0m（6.8尺）である。建物方位は、他の建物と異なり北で西に振れる。東妻柱と東南隅柱の掘形がSB3900の西北隅柱の掘形を破壊しており、奈良時代末以降と推定される。

D期 掘立柱建物1棟と掘立柱塀4条がこの時期に属す。SB3901は、調査区の東に続く東西棟の一部と考えられる。柱間は1.8m（6尺）。SA3905は南北塀で2間分を検出。柱間は1.9m（6.5尺）。SA3920は3間分を検出した南北塀。



第40図 左京三条二坊二・四坪 発掘構造図

柱間は2.8m（9.5尺）で、北端の柱掘形がSB3925の柱掘形と重複する。SA3921、SA3922は南北塀で、それぞれ2間分を検出。柱間はSA3921が2.65m（9尺）、SA3922が2.8m（9.5尺）である。SA3921を廻してSA3922としている。これらの遺構の方位は、ほとんど振れを示さない。

条坊関係の遺構 SF3970は三・四坪の坪境小路。SD3969、SD3971は小路の南北の側溝。SD3969は幅1.55～1.9m、深さ40cm前後、SD3971は幅1.45m、深さ25cmほど残っている。両側溝の心心距離は7m強で、令の20大尺（=24小尺）にはほぼ相当する。現状での小路の路面幅は約5.5mとなる。なお小路心の座標値は、X=-146416.877、Y=-17991.400である。

その他の遺構 SA3899はA期の遺構よりさらに北で東に振れる3間の南北棟。柱間は、1.35m（4.5尺）。SA3960は、2間の南北塀で柱間は2.55m（8.7尺）。B期の建物とはほぼ同じ方位を示す。

遺 物

包含層、土壤、柱掘形などから、主として奈良時代中頃から後半にかけての土器が出土している。瓦類は、それほど多くなく、軒瓦として軒丸瓦6311B型式が1点、軒平瓦6721C型式が2点出土しているのみである。また、井戸SE3930からは、木簡1点が出土している。訛文は「小□郷弟国□」である。

まとめ

四坪の西北部分のさらに東北部にあたる本調査地は、坪の東西中軸線の推定位置のすぐ西になる。SB3897・SB3900は、いずれも坪の東西中軸線上に建つものであり、この坪が奈良時代には細分されていなかった可能性が考えられる。ただ、前半には、倉庫などの雑舎的な建物が並んでいるのに対して、後半になると、大きな建物が整然と配置された様子がうかがえる。しかし、坪のなかでの位置や廂を持たないことなどから、SB3900を正殿とはしがたい。むしろ、SB3900を後殿と考え、その南方に正殿が想定されよう。

デパート建設にともなう事前調査である。デパートの敷地は、東を蘿川、南を大宮通り、西を国道24号線、北を近鉄線で囲まれた面積約40000m²の場所で、平城京左京三条二坊・二・七・八坪にあたる。このうち約30000m²を2年半の期間で発掘調査する予定で1986年9月30日から実施している。今回の調査区は敷地南端の東西約140m、南北約50m、面積約6900m²の範囲で、七坪の南半分にあたる。調査は現在最終段階に達しているが、継続中である。本稿は4月末までに得た所見にもとづき執筆した。

調査地周辺は、近年急激に市街地化している地域である。こうした開発にともなう発掘調査の増加により、左京三条二坊は平城京内で発掘調査がもっとも多く行なわれた地区となっている。これまでの調査成果によれば、左京三条二坊には、上級官人に班給された一町以上を占める宅地が、三・六・九・十五坪にある。こうした大規模な宅地が多く見られること、平城宮の東南に接する通勤に便利な位置にあること、などから左京三条二坊は平城京内でも一等地の高級邸宅街であったと考えられる。今回調査した七坪の周辺でも、西隣りの二坪で大規模な建物が（第118—15次）、南隣りの六坪では平城宮と密接な関係をもつ公的賓遊施設が見つかっており、七坪の利用状況が注目された。

遺構の概要

調査区の基本的層序は、1mを越す盛土下に、上から水田耕土（約20cm）、床土（約10~30cm）、遺物包含層（暗灰褐色粘質土、約5~30cm）が堆積し、遺物包含層を除去した面で奈良時代の遺構を検出した。この面は、調査区の東1/3と西2/3とで情況が異なっている。西方は全体に奈良時代の整地層（灰黄粘質土、約10~25cm）があり、その下が地山（調査区西端部のみ黄白砂質土、それ以東は黄灰粘質土）である。東方は整地層がなく、遺物包含層の直下が地山（黄灰粘質土ないし黄灰白砂質土）である。地山面には平城京造営以前の河川が縦横に流れ、粘質

上と砂質土が細かく入れ変る複雑な様相を呈している。

検出した遺構は、掘立柱建物50棟以上、掘立柱塀39条以上、溝10条以上、井戸14基、坪境の道路1条、坊間路1条、坪内道路2条、旧河川数条などである。これらは、平城京造営以前（A期）と奈良時代以降（B期～）に大別される。後者はさらに、重複関係・配置などから7期に区分できる。以下の記述では、各時期について、遺構の配置を概観してから、個々の遺構を説明する。

A期 調査区東半部に自然の河川が数条ある。図示したものが最大で、菰川の旧河川にあたる。蛇行しながら北東から南西へ流れ六坪へ続く。幅約4～12m、深さ約1.5mで、堆積層の砂礫層から5世紀中頃～8世紀初頭の土器が出土した。奈良時代当初には、自然堆積により深さ約50cmになっていた。

B期 七坪と西隣りの二坪との坪境小路がなく、両坪が一体として使われた。七坪の西半部から二坪にかけて、掘立柱塀で開まれた区画があり、その中に規模の大きな中心的建物群がある。七坪の東半部は空閑地が多く、菰川の旧河川を掘り直した河川がある。B期はさらにB₁～B₃の3小期に区分できる。

B₁期 二坪と七坪の境界のやや西側に大規模な掘立柱建物SB100があり、掘立柱塀SA50・95がこれをとり開む。SB100とSA50のはば中間に掘立柱塀SA70があり、この塀の東側に掘立柱建物SB56・62がある。SB100の妻には逆L字形に掘立柱塀SA97が取り付く。SA95の内側には、両側溝をもつ道路SF77があり、SA50の外側には掘立柱建物SB45がある。

SB100は、身舎梁行2間の東西棟で南北二面に廂をもつ。柱間は身舎・廂とともに3m(10尺)等間である。SA95は東西塀で14間分を検出し、さらに西へ延びる。柱間は、東側7間分が5.3m(18尺)等間、西側7間分が2.6m(9尺)等間である。SA50は南北塀で17間分を検出し、さらに北へ延びる。柱間は2.6m(9尺)等間である。SA97はSB100の東妻に取り付く逆L字形の塀で、東西方向が1間分、南北方向が2間分あり、SA95との間が8m(27尺)あいて通路となっている。柱間は東西方向が2.6m(9尺)、南北方向が5.2m(18尺)等間である。SA70は南北塀で4間分あり、SA95との間が5.4m(18尺)あいて通路となって

いる。柱間は5.3m（18尺）等間である。SF77は東西道路で、南北に側溝をもつ。長さ17m分を検出したが、本来はさらに東西に延びていたと考えられる。路幅は側溝心々で2.9～3.5m（10～12尺）あり、路心はSA95の北3.1～3.5m（10.5～12尺）にある。側溝は幅0.6～1.2m、深さ30cmである。SA102はSB100の北11m（37尺）にある東西塀で4間分あり、柱間は2.3m（8尺）等間である。西端がSB100の東妻柱筋と揃う。SB56は4間×2間の東西棟で、柱間は2.9m（10尺）等間である。南側柱がSA95の北5.9m（20尺）の位置にある。SB62は2間×2間の東西棟で、柱間は桁行2.7m（9尺）等間、梁行2.1m（7尺）等間である。SA50とSA70の北延長部との中間に位置し、SB56と東妻柱筋を揃えている。SB45は3間×3間の東西棟総柱建物で、柱間は桁行2.5m（8尺）等間、梁行1.7m（6尺）等間である。

SD14は蘆川旧河川の堆積層を穿って幅狭く造成した流路である。旧河川が深さ50cmほどになった時点でその底を掘り直したもので、旧河川の肩はそのまま生きた状態で存続している。後述のB₃期ないしC期の廃絶時には、茶褐色粘質土で旧河川の肩まで一気に埋め立てられる。幅は3～7m、深さは流路自体では45cm、旧河川の肩からは90cmである。堆積上から8世紀前半の土器や木簡が出土した。SD22はSD14に流れ込む斜行溝で、幅50cm、深さ40cmである。SD106は東二坊坊間路西側溝で、平安時代初頭まで存続していた。幅3m、深さ1.2mである。堆積土は大きく3層に分れ、遺物は主として下層から出土した。遺物には、土器・木製品・墨書き器・木簡・和同開珎などがある。

B₃期 SB100は存続するが、その東側の建物や塀が撤去され造り替えられる。SA70の位置を踏襲して掘立柱塀SA71が、SA95の位置の少し南に掘立柱塀SA38が、SA50の位置の東11.5mに掘立柱塀SA39がある。これら3条の塀で囲まれた区画の中に掘立柱建物SB40・60があり、SB40にはSA39が取り付く。このほか、SB100とSA71の中間に小規模な掘立柱建物SB86、SB40の東側には掘立柱建物SB25がある。流路SD14は存続している。

SA71は南北塀で15間分を検出し、さらに北へ延びる。柱間は2.9m（10尺）等

間である。SA38は東西塀で13間分あり、柱間は2.9m（10尺）等間である。SA39は南北塀で11間分あり、SB40の東妻柱に取り付く。柱間は2.9m（10尺）等間である。SB40は3間×2間の東西棟、SB60は7間×2間の東西棟で、両者が柱筋を揃えて東西に並ぶ。柱間は両者ともに桁行2.9m（10尺）等間、梁行2.8m（9.5尺）等間である。SB60とSA71の間が2.9m（10尺）、SB60とSB40の間が5.8m（20尺）あいている。SB86はSB100とSA71のほぼ中央にある3間×2間の東西棟で、柱間は桁行1.8m（6尺）等間、梁行1.5m（5尺）等間である。SB25はSA39の東19.5m（66尺）にある3間×2間の南北棟で、柱間は2.1m（7尺）等間である。北妻柱筋がSB40の北側柱筋と揃う。

B₃期 B₂期の建物や塀がすべて撤去され、掘立柱塀SA34・35で囲まれた大きな区画が作られる。この区画は掘立柱塀SA101で東西に2分され、東区画内には掘立柱建物SB63・90や掘立柱塀SA91がある。SA34をはさんでSB90の南側には小さな掘立柱建物SB85と掘立柱塀SA99がある。SA35の東側には掘立柱建物SB26があり、これの南方に掘立柱建物SB21がある。流路SD14の埋め立てが当期まで遡る可能性がある。

SA34は東西塀で28間分を検出し、さらに西へ延びる。柱間は2.65m（9尺）等間である。SA35は南北塀で6間分を検出し、さらに北へ延びる。柱間は2.7m（9尺）等間である。SA35は条坊計画による坪の南北中軸線上に位置し、SA34は条坊計画による坪の東西中軸線の南約10m（34尺）にある。SA34・35とともに改修がおこなわれており、SA34A・35Aの柱を抜き取った後に、同位置にSA34B・35Bの柱掘形を掘り直し柱を立てている。SA101は南北塀で、6間分を検出しさらに北へ延びる。柱間は南端の1間のみ2.4m（8尺）で、他は2.65m（9尺）等間である。SA34の東から26間目に取り付くが、この位置は条坊計画による二坪・七坪の境界線上にある。SB90は身舎が4間×2間の東西棟で、南北に廂をもち身舎は床張りである。柱間は桁行2.3m（7.5尺）等間、梁行1.9m（6.5尺）等間で、廂の出は南が2.5m（8.5尺）、北が1.5m（5尺）である。SA91は南北塀で2間分ある。SB92の南廂の東2.7m（9尺）にあり、柱間は2.5m

(8.5尺) 等間である。SB63は3間×2間の東西棟で、柱間は桁行2.1m(7尺)等間、梁行1.75m(6尺)等間である。北側柱筋がSB90の棟通と揃う。SB85は3間×2間の東西棟で、北側柱がSA34の南5.9m(20尺)にある。柱間は桁行1.7m(6尺)等間、梁行1.8m(6尺)等間である。SA99は東西塀で3間分あり、柱間は2.4m(8尺)等間である。SB85の北側柱筋の西延長上にあり、SB85の西妻との間が3.9m(13尺)あいている。

SB26は7間×2間の南北棟(桁行規模は第103—1次調査で確認)で、柱間は桁行3m(10尺)等間、梁行3.3m(11尺)等間である。西側柱がSA35の東9.3m(31尺)にある。SB21は5間×2間の南北棟で、柱間は桁行2.3m(8尺)等間、梁行1.9m(6.5尺)等間である。北妻がSB26の南妻の南15m(50尺)にあり、SB26と棟通り筋を揃えている。

C期 七坪と二坪の境に南北方向の道路SF117Aが設けられ、七坪と二坪とが区画される。七坪内には東西方向の道路SF87が通り、坪が南北に二分される。七坪の北半区画には掘立柱建物SB65があり、区画の西南隅にはSF117A東側溝とSF87北側溝に沿ったL字形の溝SD104・105がある。七坪の南半区画には、掘立柱建物SB01・42・55・81・84がある。流路SD14は当期には埋められていた。

SF117Aは南北道路で、東西に側溝をもつ。長さ48m分を検出し、さらに南北に延びる。路幅は側溝心々で7.5m(25尺)である。西側溝は幅1.7~2.3m、深さ40cmで、調査区の北から南まで通る。東側溝は幅1.7m、深さ40cmで、現状では2ヶ所で途切れている。この途切れが本来のものであるのか、後世の削平の結果であるのかについては、本調査区北側の調査の後に再度検討したい。SF87は東西道路で、南北に側溝をもつ。路幅は側溝心々で2.4m(8尺)である。側溝は後世の削平のために断続的にしか残っていない。北側溝はSF117A東側溝とつながり、幅が0.6~1m、南側溝は幅30cmである。SF87の路心は、条坊計画による坪の東西中心線の南約13.2m(45尺)にある。SD104は南北溝で、長さ12m分を検出し、さらに北へ延びる。SF117A東側溝の東4m(13尺)にあり、幅

1m深さ35cmである。SD105は東西溝で、長さ12m、幅1.8mである。SD87北側溝の北3.9m（13尺）にあり、西端でSD104とつながる。SD104・105とSF117A東側溝・SF87北側溝との間は幅2.4m（8尺）の帯状空閑地となるが、築地塀などの施設が設けられていた痕跡はない。

SB65は北半区画の中心的建物である。身舎梁行2間の南北棟で東西に廂をもつ。柱間は、桁行2.7m（9尺）等間、梁行2.1m（9尺）等間、廂の出は2.7m（9尺）である。南妻がSF87北側溝の北12m（40尺）にある。SB55は南半区画の中心的建物である。身舎5間×2間の東西棟で、南北に廂をもつ。柱間、桁行2.9m（10尺）等間、梁行3m（10尺）等間、廂の出は3m（10尺）である。SB42は5間×2間の南北棟で、南妻柱筋がSB55の北側柱筋と揃う。柱間は、桁行の北端1間が3m（10尺）で、南4間が1.6m（5.5尺）等間、梁行1.8m（6尺）等間である。西側柱がSB55東妻の東7.3m（25尺）にある。SB81・84は南北区画北西隅にある小規模な雜舎的建物である。SB81は3間×2間の東西棟で、柱間は桁行1.7m（6尺）等間、梁行2.5m（8.5尺）等間である。SB84は3間×2間の南北棟で、柱間は桁行1.7m（6尺）等間、梁行1.9m（6.5尺）等間である。SB01は5間×2間の東西棟で、柱間は桁行2m（7尺）等間、梁行2.4m（8尺）等間である。

D期 SF117Aが廃され、再び二坪と坪が一体となる。条坊計画による二坪と七坪の境界線上に掘立柱建物SB96、七坪の南北四等分線上には掘立柱建物SB58・59が南北に並び、七坪の南北中軸線をはさんで掘立柱建物SB20・41が東西に並ぶ。小規模な雜舎的建物として、SB05・06・10・88・93がある。

SB96は身舎梁行2間・桁行4間以上の南北棟で、東西に廂をもつ。柱間は桁行2.6m（9尺）等間、梁行2.4m（8尺）等間、廂の出は2.6m（9尺）である。棟通りがほぼ条坊計画による二坪・七坪の境界線上にある。SB58は身舎4間×2間の東西棟で、南北に廂をもち、身舎は床張りである。柱間・廂の出ともに2.35m（8尺）である。SB59はSB58と柱筋を揃える4間×2間の東西棟で、梁行柱間が2m（7尺）等間である。SB58・59の桁行中心線は、条坊計画による七

坪の南北四等分線上にある。また、SB59の南側柱筋とSB58の棟通りは、条坊計画による七坪の東西中心線から、それぞれ9m（30尺）南と18m（30尺）南にある。SB20は身舎7間×2間の南北棟で、東西に廂をもつ。柱間は桁行2.7m（9尺）等間、梁行2.3m（8尺）等間、廂の出は2.7m（9尺）である。SB41はSB20と柱筋を揃える7間×2間の南北棟で、梁行柱間が2.1m（7尺）等間である。西側柱列がSB58東妻の東14.7m（50尺）にあり、東側柱列がSB20西側柱列の西11.9m（40尺）にある。

SB88は3間×2間の東西棟で、柱間が桁行1.6m（5.5尺）等間、梁行は1.9m（6.5尺）等間である。南側柱筋がSB59の棟通りとほぼ揃う。SB93は3間×2間の南北棟で、柱間は桁行2m（7尺）等間、梁行2.25～2.35mである。SB05は3間以上×2間の東西棟、SB06は3間×3間の南北棟、SB10は2間×2間の南北棟で、いずれも柱間は1.8m～2.1m（6～7尺）である。SB05とSB06は東端が揃い、SB06の北妻はSB20の北妻とほぼ柱筋が揃う。

E期 再び七坪と二坪の境に南北道路SF117Bが設けられ、七坪と二坪が区画される。小規模な建物がSF117Bや坊間路沿いに散在し、坪の中央部にはほとんど建物がない。七坪内をさらに細分する施設は検出されていないが、浅い溝や生垣が存在した可能性がある。E期はE₁・E₂の2小期に区分できる。

E₁期 SF117B沿いに掘立柱建物SB80・83・89が南北に並び、坊間路沿いには掘立柱建物SB09・11、坪の中程には掘立柱建物SB32・53・66がある。

SF117Bの位置・規模はSF117Aと同じである。東西に側溝をもち、両側溝ともに調査区の北から南まで通る。東側溝は幅1.1～1.3m、深さ10cmで、西側溝は幅2～2.2m、深さ20cmである。SB80は身舎3間×2間の東西棟で、南を除く三面に廂をもつ。柱間は桁行2.1m（7尺）等間、梁行1.9m（6.5尺）等間で、廂の出は東面・北面が2.1m（7尺）、西面が2.7m（9尺）である。SB83はSB80と柱筋を揃える3間×2間の東西棟で、梁行柱間が1.9～2.1m（6.5～7尺）である。SB89はSB80・83に柱筋を揃える3間×2間の東西棟で、南に廂をもつ。梁行柱間が1.6～1.75m（5.5～6尺）、廂の出が1.5～1.95m（5～6.5尺）

である。SB53は3間×2間の東西棟で、柱間は桁行2.1m（7尺）等間、梁行1.8m（6尺）等間である。SB32は3間×2間の東西棟で、柱間は桁行1.8m（6尺）等間、梁行1.75m（6尺）等間である。SB66は2間×2間以上の建物で、柱間は1.95m（6.5尺）である。

SD07はSD106の西9m（30尺）にある南北溝で、32m分検出し、さらに南北に続くと思われる。幅は最大1.2mである。SB09は3間×2間の東西棟で、柱間は1.5～2.8m（5～9.5尺）と不揃いである。SB11は3間×2間の南北棟で、柱間は桁行1.6～1.7m（5.5尺）、梁行2.1m（7尺）等間である。

E: 期 SF117B沿いに掘立柱建物SB82・92、坊間路沿いに掘立柱建物SB04・08・13や掘立柱塀SA12、坪の中程に掘立柱建物SB43・64がある。

SB82は身舎4間×2間の東西棟で南に廻をもつ。柱間・廻の出とも2.7m（9尺）である。SB92は4間×2間の東西棟総柱建物で、柱間は桁行が2～2.4m（7～8尺）、梁行が1.3～2.2m（4.5～7.5尺）と不揃いである。SB43は3間×2間の東西棟、SB64は2間×2間の東西棟、SB04は2間×3間以上の東西棟、SB08は3間×2間の南北棟で東廻をもち、SB13は2間×2間以上の建物である。これらはいずれも柱間1.5～2.4m（5～8尺）程度の小規模な建物である。

井戸 井戸は14基あるが、これらの掘削時期・廃絶時期は以下検討中であるので、ここに一括して記述する。記述は東から西へ順におこなう。

SE02は、径2.7m、深さ1.5m以上の円形掘形内に設けた一辺97cmの方形縦板組の井戸。枠は隅柱を横桟でつなぎ、桟外に縦板を交互に重ねあわせたもの。

SE03は、径1.8m、深さ2.4m以上の円形掘形をもつ。井戸枠は遺存しない。

SE16は、径3.9m、深さ2mの円形掘形をもつ。井戸枠は抜き取られ遺存しない。抜き取り痕跡から平城宮土器Vの土器が出土し、廃絶は奈良時代末である。

SE17は、径1.7m、深さ2.3mの円形掘形をもつ。埋上が上から下まではほとんど一様であり、掘削を途中でやめて一気に埋めもどした可能性がある。

SE15は、径2.5m、深さ1.4mの円形掘形をもつ。一回改修されており、改修後の枠は一辺64cmの方形縦板組で隅柱がある。廃絶は奈良時代末である。

SE36は、径2.7m、深さ1.4mの円形掘形をもつ。一回改修されており、改修後の枠は一辺76cmの方形縦板組である。改修前の掘形がSB40を切り、掘削の上限はB₃期である。改修後の枠の据付け掘形から平城宮土器Ⅲの土器が出土した。

SE112は、径2.3m、深さ1.6mの円形掘形をもつ。井戸枠は遺存しない。掘形がS40の西妻中央柱を切り、掘削の上限はB₃期である。

SE113は、径1.6×2.1m、深さ1.3mの楕円形掘形をもつ。井戸枠は抜取られ遺存しない。掘形がSA50に切られ、掘削がB₁期以前に遡る。

SE78は、一辺90cm、深さ1.3mの方形掘形内に設けた一辺60cmの方形縦板組の井戸。隅柱を用いず、各辺に縦板を3～5枚並べている。

SE67は、径1.3m、深さ1mの円形掘形内に、底板をぬいた円形曲物を据えて枠とする。曲物は2段遺存し、下段が径58cmで高さ46cm、上段が径65cmで高さ46cm以上である。掘形がSA34を切り、SB59に切られているので、掘削はC期である。枠内の埋土から平城宮土器Ⅳの土器が出土した。

SE72は、径2.8×2.9m、深さ2.1mの隅丸方形掘形内に設けた一辺125cmの横板蒸籠組の井戸。横板は8段遺存する。掘形がSB60を切り、掘削の上限はB₃期である。枠内の埋土から平城宮土器Ⅳの土器が出土した。

SE115は、径2.6m、深さ1.3mの円形掘形をもつ。埋土が上から下まではとんど一樣であり、掘削を途中でやめて一気に埋めもどした可能性がある。SB60・SA71を切り、掘削の上限はB₃期である。

SE79は、径1.8×2.1m、深さ1.2mの円形掘形内に、底板をぬいた円形曲物を据えて枠とする。曲物は2段遺存し、下段が径64cmで高さ47cm、上段が径75cmで高さ50cm以上である。掘形がSF77北側溝を切り、掘削の上限がB₁期である。枠内の埋土から平城宮土器Ⅴの土器が出土し、廃絶は奈良時代末である。

SE116は、径1.2m、深さ1.4mの円形掘形内に、底板をぬいた円形曲物を据えて枠とする。曲物は3段遺存し、下段が径47cmで高さ56cm、中段が径46cmで高さ28cm、上段が径48cmで高さ27cm以上である。中・上段の外側にはさらに径54cm、高さ46cmの曲物を置いている。

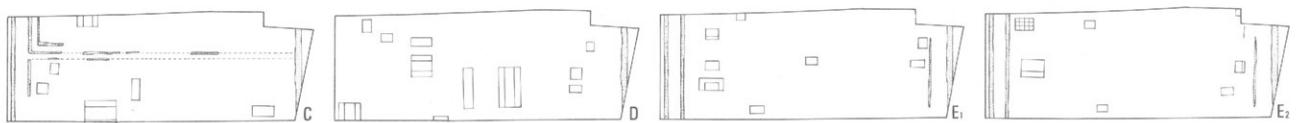
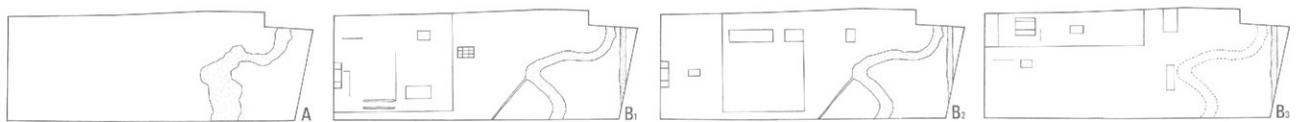
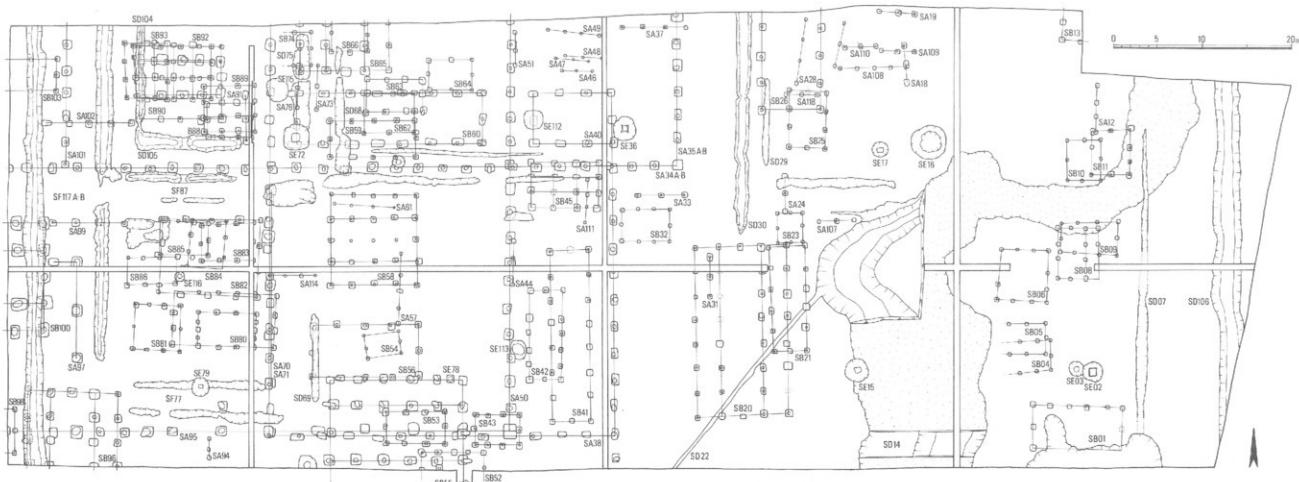
各時期の年代 上記の各遺構から出土した遺物については現在整理中であり、B₁～E₂期の年代を細かく確定するには至っていないが、大雑把な見通しを述べれば、B₁・B₂期が奈良時代前半、B₃・C期が奈良時代中頃、D期が奈良時代後半、E₁・E₂期が奈良時代末～平安時代初頭であろう。当調査区ではB₃期ないしC期にSD14が埋め立てられている。六坪ではSD14を埋め立てて園池を作つており、その造成時期は、SD14の町みを埋め立てた整地層から平城宮土器Ⅲの上器や軒瓦6282・6721型式が出土した事を根拠に、天平末年から天平勝宝年間と考えられている。これを参考にB₃・C期を奈良時代中頃と考えた。また、SF117B側溝や遺物包含層出土の土器の年代によって、平安時代初頭に遺構が廃絶することがわかる。

遺 物

古墳時代の遺物として、菰川旧河川の堆積土から出土した土師器・須恵器がある。奈良時代の遺物は、木簡・土器・土製品・木製品・金属製品・瓦塼類などがある。なお、当調査区内でなされた過去の調査の主要出土品も合わせ紹介する。

木簡 菰川旧河川・SD14・坊間路西側溝から出土した。主要な訣文を掲げる。

1. 尾張國海部郡嶋里 (菰川旧河川最上層)
〔未か〕
・ □連□□□□□
2. 八田須支九□受□守石村 (SD14、第103-1次)
〔人か〕〔資か〕
3. □□并□人等上□帳 (坊間路西側溝)
4. 正宮四人 内藏一人 (")
5. 人万呂□丸部鯨无一斗 (")
・ 十月料
6. 播磨國神前郡陰山郷□□ (")
7. 厨布直錢二貫□ (")
8. 名吉魚八隻 (")
9. 手枕里戸主糧得津君千鯛一石 (" 、第118-23次)



第41図 左京三条二坊七榉発掘遺構図・変遷図

土器・土製品 溝・土壤などから一括多量に出土した。硯10個体以上、有孔把手付円面硯、形象硯の可能性がある異形品、水滴、二彩陶器（整地土・第112-3次）、縁軸陶器（SF117側溝・第112-3次）、漆付着上器（SF117側溝・第112-3次、坊間路西側溝・第178次）、土馬、土錘（整地土・第112-3次）などがある。このうち、有孔把手付円面硯は珍らしい物で、類例に福岡県春日市浦ノ原4号窯、静岡県宮原古墳、長野県丸山町長瀬負沢出土品などがある。墨書き土器の文字には、「宮」（SD14・第141-35次）、「鯨」（土壤・第178次）、「主水司」「匱造少乃古」（坊間路西側溝・第118-23次）、「山部乙万品」「寺」「林」「廣（記号）」「廣匱」（坊間路西側溝・第178次）などがある。

木製品 坊間路西側溝から多量に出土し、漆器、木蓋（第118-23次、第178次）、斎串（第118-23次、第178次）、人形・刀形・儀仗用弓・曲物（第118-23次）、鐵形・へら（第178次）がある。SE72からは斎串と曲物柄杓が出土した。
金属製品 SF117A側溝から和同開珎・銅鉈、SD14埋土から素文小鏡、坊間路西側溝から和同開珎が出土した。

瓦塼類 平城京城としては比較的多く、丸瓦・平瓦のほかに軒丸瓦約60点、軒平瓦約50点、熨斗瓦3点などがある。軒瓦は、奈良時代初頭から後半までの各時期のものがあるが、前半のものが多い。SB55の柱抜き取り痕跡からは6272A・Bの完形品、SA34の柱抜き取り痕跡から6663Cが出土した。

まとめ

今回の調査の主な成果は次の3点に要約できる。①平城京造営当初から二町以上を占める邸宅ないし施設が設けられていたことを確認した。②七坪と二坪とが一体に使われた時期と、道路で区画される時期があることが判明した。この道路が坪境小路であるのか、一つの敷地内を区画する施設であるのか、今後の検討を要する。③二町以上の敷地であった時期の中心的建物群が、七坪の西半部以西で今調査区の北側にあることが推定できた。

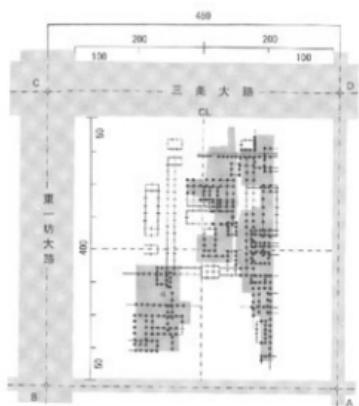
一坪は過去2回、建設に伴う事前調査を実施、塙を多用した八角形の井戸、桁行7間梁行4間の正殿建築などを検出した。今調査区は第2次調査区の東に接し、この時確認した正殿を含む中心部の殿舎配置解明を目的とした。ここでは過去2回の調査成果を含め概略を述べる。奈良時代の遺構には、回廊、柱立柱建物、井戸、塙坪内道路などがあり、初期（Ⅰ）、前半～中葉（Ⅱ）、後半（Ⅲ）に分類できる。

Ⅰ期 桁行規模が5間ないし4間程度の小規模建物がいくつかのグループをなし坪内に分布する。この時期の建物配置は、いわゆる二行八門制を基本としよう。

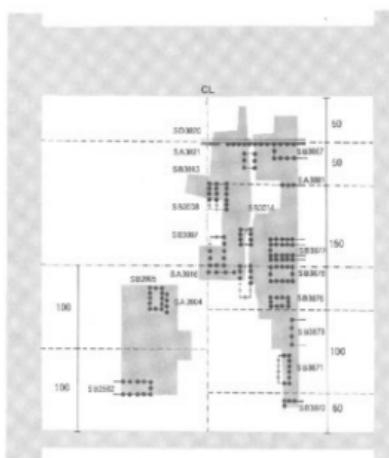
Ⅱ期 Ⅰ期の宅地利用形態は一変し、坪全体を利用する建物配置となる。坪の中央北寄りに、桁行7間梁間4間の正殿が建ち、この東西に南北棟の脇殿と桁行梁間とも2間（？）の建物が建つ。正殿の東西を画す塙は不詳だが、南には東西塙があり、正殿南の未発掘区には門が開いたのであろう。正殿と脇殿はコの字型の配置をとった可能性が大きい。

Ⅲ期 桁行7間梁間4間の正殿を撤去、その位置を踏襲しつつ新たに東西北に廂をもつ三面廂の正殿を營み、この南に前殿を建てる。この2棟は双堂として機能したのであろう。正殿・前殿の周囲は梁間1間の回廊がめぐる。回廊は1尺=0.296cmを基準とする天平尺の10.5尺を1間の寸法とし、東西135尺、南北180尺の規模を東西8間（と門）、南北17間に割りつけたようである。なお北面回廊は全面をめぐらず、東西各1間のみである。南面回廊中央の門は、未発掘であり、規模・構造は将来的課題である。回廊の南北二等分点は前殿の棟通りと一致。正殿・前殿の位置から回廊の南北位置と決めたのであろう。なお、施工誤差か、正殿・前殿の東西中軸と回廊の中軸は約0.7mのずれがあり、回廊全体が東に寄る。

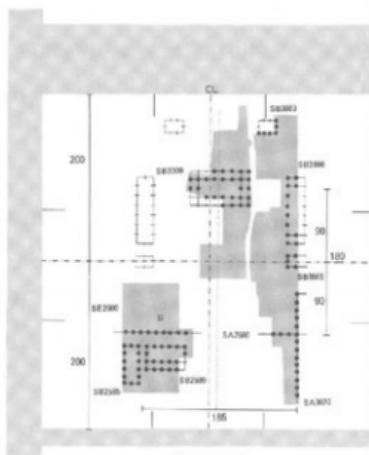
成果と課題 調査の最大の成果は、Ⅱ、Ⅲ期に一坪の中央部にコの字型の殿舎配置を確認したこと。特にⅢ期には回廊を伴う殿舎配置となる。こうした回廊は寺院跡を除けば京内で2例目。宅地の殿舎配置に一形態を加えることになった。Ⅱ・Ⅲ期の継続性とともに発展性を考慮すると、両期の居住者は同一人であろう。



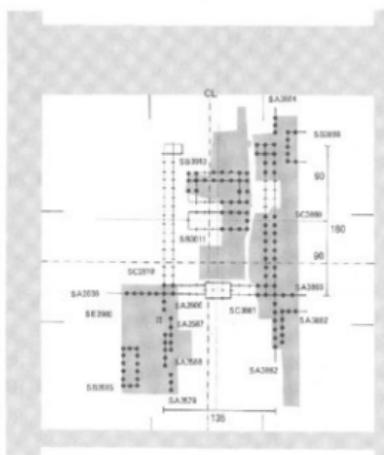
一坪の占地



奈良時代前期



奈良時代中期



奈良時代後半
図中の数字は、実測値も天井尺
尺=1.296で算出し、正しい実数値をとった。

第42図 左京四条二坊一坪の遺構変遷図（1：2000）

6 右京一条二坊三坪の調査

第174—24次

19.158.354



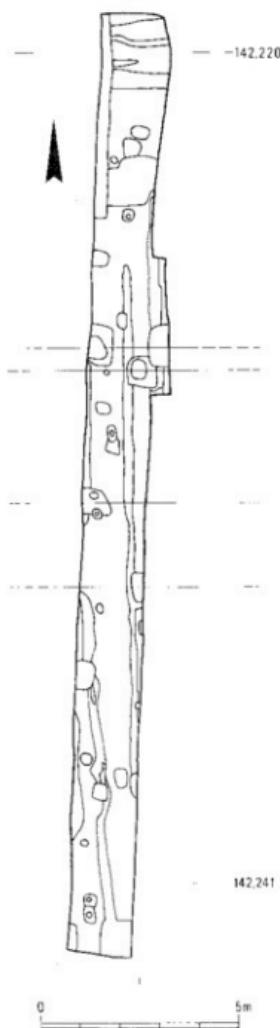
— -142.220

共同住宅建築にともなう調査である。一条条間路の南側溝と三坪内の宅地の一部を検出する目的で、現一条通りの南側から南北に細長いトレンチを25mにわたって設定した。

約65cmの盛土と旧耕土、床土を除去すると、一部うい包含層のある部分をのぞき、すぐに地山となる。地山は、全体に黄灰色系の砂と粘土の入り混った土であるが、北端近くでは、下層の黒褐粘土があらわれる。遺構は、地山面上で検出した。

検出した遺構は、奈良時代の建物の柱穴5、古墳時代上塙1、東西南北に通る耕作用細溝7ほかである。5個の柱穴は2棟の建物のものと思われ、重複関係から新旧2時期に分れる。いずれも東西、南北の柱間間隔からみて、東西棟の一部であろう。

主な目的であった一条条間路とその南側溝については、推定位置を含めて充分の余裕をみたトレンチ設定をしたにもかかわらず、検出できなかった。南側溝は、西方で実施した第106—6次、第141—14次調査でもみつかっていない。すでに削平されたと考えるべきか、あるいは現一条通りの下に想定すべきか決めがたい。古墳時代の土壇は、底に人頭大の石を敷き、土師器小型丸底壺が出土した。



第43図 右京一条二坊三坪発掘遺構図

はじめに

大和郡山市塵芥焼却場建設予定地の事前調査は、これまで大和郡山市教委調査（1984年度、800m²）や、平城宮跡発掘調査部の第149次調査（1983年度、3,300m²）、第156-32次調査（1984年度、330m²）、第168次南・北調査（1985年度、5,600m²）の計5回にわけて継続的に実施してきた。その結果、条坊の道路遺構や、右京八条一坊十三・十四坪内の宅地割について多くの知見を得るとともに、金属、漆工に関する工房がこの地域に存在したことなどが判明し、京内利用の一端を解明する貴重な成果を得ることができた。今回の調査区は上記の調査区にはさまれた区域で、右京八条一坊十四坪のはば中心にあたる。

遺構

検出した遺構は、奈良時代以前の斜行溝1条、奈良時代の塀5条、建物24棟、溝4条、井戸3基、および炭化物を多く含む上塙群などである。このうち、奈良時代の遺構はおおむね2時期に分けることができ、各時期ごとにさらに時期細分が可能である。

A期 道路遺構SF1650によって十四坪内は東西に二分され、その東半は6間×2間の掘立柱建物（南廂付東西棟）SB1710を中心に建物、倉庫が4時期にわたりて建て替られる時期。これらの建物の間をぬうように円形、長円形の土塙や、炭化物を多く含む不整形な上塙が多数存在する。これらの上塙群は、金属製品の製作にかかわる遺構と思われる。なおこの時期の井戸SE1917、1870、1880は金属製品製作に使用されたのであろう。

B期 十四坪内が居住区域として細分される時期。十四坪中心を東西に画する道路遺構SF1650はそのまま踏襲され、区画塀SA1850、SA1900によって一坪

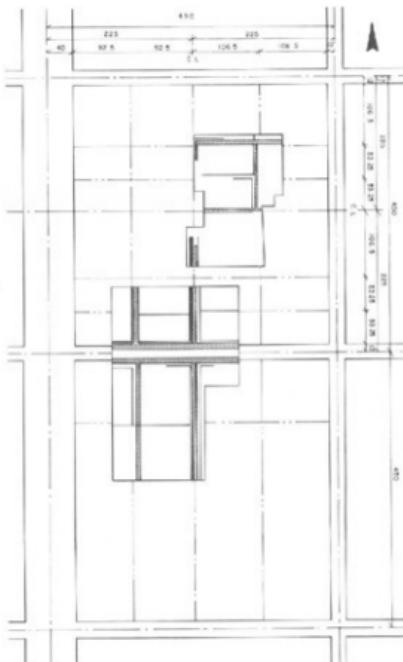
をさらに16分の1に分割している。第168次調査では一坪を32分の1に分割する宅地割が確認されており、同じ坪内でも宅地割に大小のあったことがわかる。

遺 物

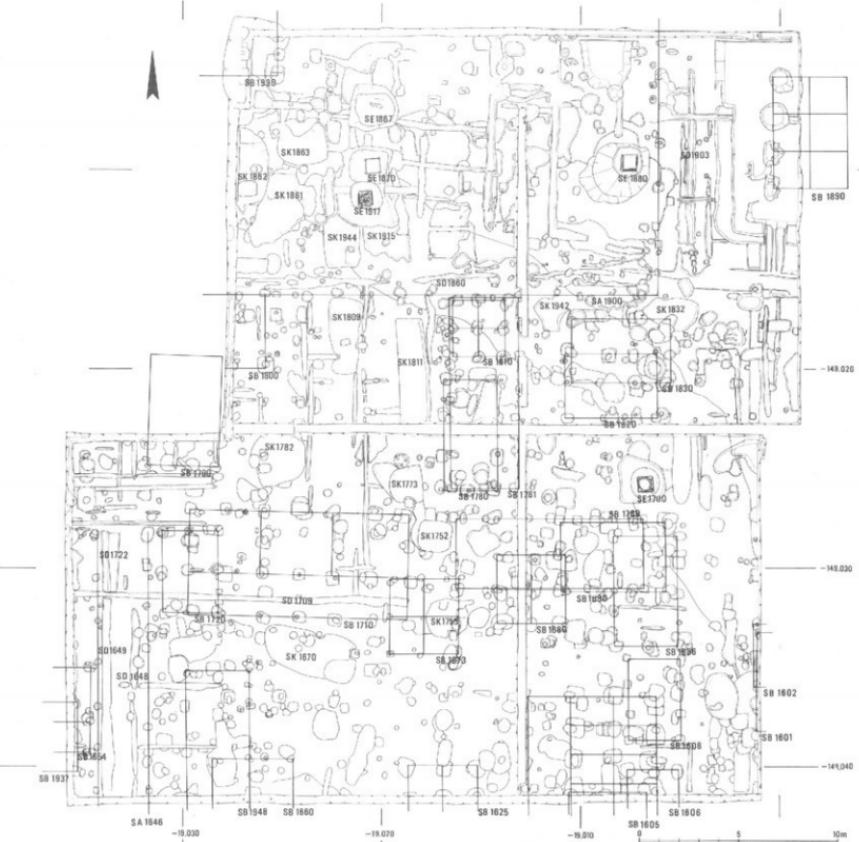
遺物で注目されるのは、炭化物を含む土壌からの出土品である。トリベ、フィグ羽口等の土製品の他、帯金具の未製品、留針など、金属工房関連のものが多い。また、SE1880からは平城宮と同様の軒平瓦が4点、および木簡1点（「秦五匁米一斗 十一月十七日□」）が出土している。

まとめ

今回の調査の結果と、これまでの調査成果とを総合的に検討すると、十四坪の北4分の3の区域と、南4分の1を含めた十三坪の区域とは遺構の様相が異なっていることが明らかとなった。北側は炭化物を含む土壌群とともに建物を中心とした倉庫などがあり、南側は小規模な宅地内に規格性の高い建物が配置される区画である。すなわち、十四坪の中では北4分の3が金属製品を製作する工房、南側が居住区域という坪内での使い分けが行われていたとみられる。そして、後にこの居住区域はさらに北へも及び、宅地が細分化されていったと考えられる。



第44図 右京八条一坊十三・十四坪地割模式図（単位は尺）



第45図 右京八条一坊十四坪発掘構造図 (1 : 200)

はじめに

頭塔の発掘調査は1978年に当研究所が史跡指定地東辺部にL字型トレチを設けて行ったのが最初で、その調査で基壇東辺部の石積と、東面第1段中央石仏の北5.3mの位置に新たに石仏1基を発見している（「奈文研年報1979」）。今回の調査は奈良県が行う史跡頭塔の復原整備事業に先立つもので、頭塔の本来の規模・構造等を確認することを目的として行った。発掘区は前回の調査区を含む頭塔の東北4分の1（約300 m²）の範囲である。

遺構

調査前の現状は一辺約30m、高さ約9mの四角錐形の土壇をなし、また、四面には4段にわたって計13体の石仏が露出していた。調査はまず斜面上に生えた木々のうち大きなものを残して他を伐採することから始まり、ついで発掘前の写真撮影、平板による現況地形測量（縮尺1/100）、地下に埋っている石組遺構、ピット、金属の有無等を把握するための電気探査・電磁誘導探査（金属探査）を行った。

〈電気探査・電磁誘導探査の結果〉 電気探査は地中に電流を通し、地下の電気比抵抗を測定することにより、地中の状態を推定する方法である。頂上の平坦部には30cmメッシュ、斜面部には1mメッシュのグリッドを組み、各グリッド交点間の電気比抵抗を測定した。その結果、頂上平坦部の中央に現存する近世の五輪塔の周辺に3ヶ所の比抵抗の大きい地点があり、石組もしくはピットの存在が推定できた。このうち、五輪塔の東方の地点では別に行なった電磁誘導探査でも金属の存在を示す顕著な反応があり、この地点が今回の発掘区内にかかることから大きな期待をもって発掘を進めたが、結果的にはコンクリートを用いた現代の土壙がその正体であった。一方、斜面部は前述のとおり1m間隔に測定点を設けて探査したが、1m間隔では、後の発掘結果が示す7段に積まれた石積等の遺構に押えることができず、斜面部の探査もさらに小さなグリッドを組む必要があることが判明した。

以上のような発掘前の予備調査の後、表七とその下の黄褐色土（遺物包含層）をとり除き、石積を露出させる作業を行った。その結果、基壇上に7段の階段状に積まれた石積と、新たに5体の石仏を発見した。以下、今回の調査で確認した遺構を、基壇・7段の石積・石仏に分けて、その概要を述べる。

基壇 基壇は地山上に積まれた一層の厚さ10~30cmの粗い互層状の盛土からなり、高さは基壇端で0.7~1.2mである。また、本来基壇外縁部は石積、その外周は玉石敷で化粧されていたものと考えられるが、石積・石敷とも基壇東辺に部分的に残るにすぎない。石積は東辺中央から北へ6m分、石敷もこれに沿う幅1m分を確認した。残存する石積は径30~60m大の自然石を2~3段に積み上げたもので高さ70cmであるが、基壇上面とのとりつきから、ほぼ旧規を保つものと考えられる。石敷は、径10~30cm大の自然石を敷きつめているが、やや上面が不揃であり、かつ裏込土がやわらかく、他と異なることから、当初の石敷ではない可能性がある。基壇北辺は石積自体は残らないものの、基壇盛土の裾が東西に直線的に残ること、また盛土裾部に石積みの裏込めに入れたと思われる石が横に並ぶことなどから、本来の基壇端を推定できる。基壇一辺の大きさを東・北面の中央石仏から得られる想定中軸線をもとに復原すると、東辺30.9m、北辺32.8mの規模となる。この差は基壇上面の幅が東辺約4m、北辺約3mと東に比べ北が約1m狭いことから生じている。

基壇上面は3期の変遷がある。当初は基壇上の第1段石積の裾を巡る幅0.5mの犬走り状の玉石敷と、その外周に1段低く敷かれた幅0.2mの疊敷があり、残る部分は盛土のままである。第Ⅱ期は当初の犬走り状石敷を埋め、その上に同じく第1段石積の裾に沿う石敷を部分的に行い、残る基壇上面全体は径3cm前後の疊敷となる。そして第Ⅲ期には、さらにこの疊敷を覆う版築状のたたきが基壇上面を形成する。ここで問題なのは、第Ⅰ期の玉石敷と第Ⅱ期の玉石敷、疊敷がいずれも第1段石積の下に入り込んでおり、現存する第1段石積が第Ⅲ期の基壇上面に伴うということである。今回の調査では石積を残すために、石積自体を断ち割る調査は行わなかったが、おそらく、この第1段石積は改修後のもので、当初の石積はこれよりひとまわり小さかった可能性が高い。

7段の石積 基壇上には7段の石積が階段状に積まれ、塔の本位を形成する。基壇同様すべて盛土からなり、かつ、盛土中には瓦の破片が含まれる。石積を下



第46図 頭塔発掘構造図（上）・発掘区西壁断面図（下）（1：400）

から順に第1・第2……第7段と呼ぶ。このうち第1・3・5・7段の奇数段に石仏が配され、2・4・6の偶数段には石仏がない。石積は基壇石積と同様径0.3～1.0mの自然石をほぼ垂直に積み上げているが、全体に残りは悪く、第1段が2～3石分、高さ0.7m程を残すのみで、第2段以上の石積では最下段の1～2石が残るにすぎない。各段上のテラスにも玉石が敷かれているが、頂上部には石敷がない。各段の一辺のおおよその大きさは、下から24.9、22.9、19.4、16.5、12.9、10.1、6.7mである。各段上のテラスの幅は同じく下から1.0、1.75、1.45、1.8、1.4、1.7mとなり、やや幅の狭いテラスと、広いテラスが交互に現われる。つまり、石仏上のテラスが狭く、石仏前面のテラスがこれよりも広い。一方、遺物の項にあるように石積を覆う堆積土中には大量の瓦が含まれていた。軒瓦も數多く、しかも大半が東大寺式である。これらの瓦が段上に用いられていたことは確実であるが、どこに、どのように使われていたかを遺構として確認することはできなかった。しかし、瓦の出土量と、テラスの広狭から、この狭いテラスの上に瓦が葺かれていた可能性が高いと考えている。

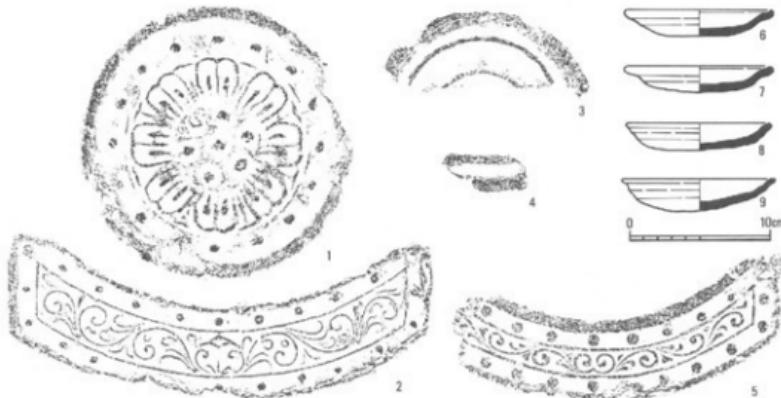
石仏 今回新たに発見した石仏は東面3体、北面2体の計5体である。これまでに確認されていた14体と合わせると、頭塔に計19体の石仏が確認されたことになる。石仏は各段の石積前面より40cm程奥に立てられ、両脇に袖石をおき、全体で仏龕の形をなす。石仏の配置は第46図のごとくになり、このうちA・B・Cの3体は中心部から放射状にのびる軸線上に位置し、従来の推定を裏づけたが、北面ではE・Dの延長上に石仏がなく、東面とは異った配置を示す。また、東面第1段にはAと中央石仏の中間にも昭和53年の調査で確認した石仏があり、左右対称とすると5体の石仏が配されていたことになる。この中間の石仏の北面での相当位置には現在大きなアラカシがあり、石仏の有無を確認できなかった。東面中軸上のX印の2箇所の石仏は盜掘もしくは土取りによって失われていたが、本来は存在したものと思われる。今回発見の5体の石仏の彫刻はB・C・Eの3体はいずれも浮き彫りであり、保存状態もよく明確であるが、A・Dの2体は線彫風であり、また風化も進み、何を表わしたものか不明である。

出土遺物

主な出土遺物は、瓦と土器である。瓦は、多量の丸瓦と平瓦に加え、かなりの軒瓦がある。ほとんどが包含層から出土し、基壇上には多量に堆積していたが、仏龕の周囲に集中することはない。軒瓦は、奈良時代117点、平安時代3点、中近世26点、の合計146点が出土した。奈良時代の軒瓦は、115点が東大寺式軒瓦（軒丸瓦6235型式M種（第47図1）57点、軒平瓦6732型式F種（2）58点）、重圈文軒丸瓦・軒平瓦各1点（3・4）である。平安時代の軒平瓦（5）は荒池瓦窯と同範。その他、面戸瓦がある。

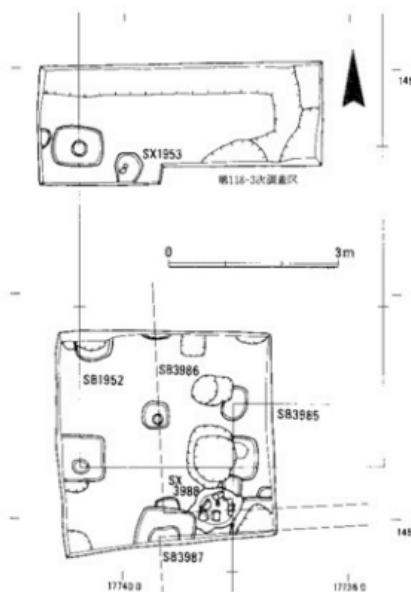
土器は、土師器、須恵器、青磁、白磁などがある。平安時代後期から鎌倉時代初め頃（12世紀から13世紀前半）のものが最も多く、新発見の石仏龕内には、供献された状態で土師器皿が残っていた。東面第三段北側の石仏のもの（6～9）が13世紀初め頃、北面第三段東側と北面第五段東側の石仏のものが、12世紀代である。いずれも、火をともした痕跡を残す。奈良時代の土器はごく少量ではあるが、基壇の盛土のなかから奈良時代後半の土師器が出土している。

造営当初の軒瓦がすべて東大寺式であることは、東大寺の僧実忠が造立した土塔が、この頭塔である、というこれまでの研究成果を裏付けるものである。



第47図 頭塔出土瓦・土器（1：4）

民家増築に伴う事前調査。調査地は法華寺旧境内の北西部にあたり、昭和54年に行なった第118—3次調査と同一敷地内の調査である。調査地の周辺は後世に大きく削平されており、地表下0.2mで地山の白色粘質土層に達する。この地山上面で4時期にわたる掘立柱建物を検出したが、すべて部分的な検出にとどまる。SB1952は両次の調査区にまたがって存在する桁行3間以上の南北棟建物。柱掘形は一辺0.8mの方形で、径0.25mの柱痕跡が遺存する。桁行柱間は9.5尺、梁行柱間は9尺である。SB3985は柱間5尺の小規模な建物。SB1952よりも新しく、一間分を検出したにとどまる。SB3986は6尺等間の建物で、南側柱列はSB3987の柱穴と重複する。一辺0.45mの掘形中に径0.2mの柱痕跡が認められる。SB3987は一



第48図 法華寺旧境内発掘遺構図

辺が1mを越える大形の柱掘形をもつてのに対して柱間は7尺前後と狭く、柱抜き取り穴を伴う。これらの掘立柱建物よりも新しい遺溝に、浅く不整形な掘形内に人頭大の河原石を埋めたSX3988・1953がある。礎石の据付掘形風の遺溝であるが、ともに単独出土のため性格は不明。また調査区内には近現代の土壌・溝が多数存在する。

以上のように調査面積が狭少であったにもかかわらず、かなりの密度で遺溝が存在することが明らかになった。個々の建物の時期は明確にしがたいが、法華寺の付属雜合群を構成する建物の一部である可能性が高く、周辺部における調査の進展が期待される。

本調査は法華寺町公民館改築に伴う事前調査である。調査地は現在の法華寺南門の東南約50mの所で、鐘楼の真南である。南門の南では、これまでに第82—6次（昭和49年度）・第98—21次調査（昭和52年度）が行なわれており、その結果奈良時代の法華寺金堂跡が確認されている。今回の発掘区はその真東にあたり、金堂に取り付く軒廊もしくは北面東回廊の存在が予想された。さらには法華寺造営に先行する藤原不比等邸・皇后宮の遺構の確認が期待された。調査の結果、奈良時代の法華寺造営に伴う遺構と、造営前に遡る遺構を確認した。

法華寺造営前の遺構 検出した遺構は井戸周囲の排水施設である南北溝SD03・東西溝SD04、礫敷SX07・SX08と掘立柱建物SB01である。

発掘区の東北部にある礫敷SX07は、地山を周囲より約1m掘り下げた面にある。その段差には人頭大の河原石を3~4段積み上げ、石積の擁壁としている。SX07の周囲には石積擁壁に沿って、石組の南北溝SD03と東西溝SD04がめぐる。SD03とSD04の内法幅はそれぞれ30cmと60cmである。それぞれの溝のSX07側には高さ約10cmの細長い石を並べ溝側石とし、溝底には偏平な石を敷く。石積擁壁の西側には石積の上端から約1.5m幅で礫が南北に敷かれる（SX08）。そして石積擁壁の南側は、なだらかに東北に向って下がっており、所々礫敷の跡が見られたが、その範囲は確定できなかった。発掘区東北隅での断ち割り調査により、井戸跡と考えられる地山の落ちを確認し、発掘区の東北に井戸本体を推定した。よって、これらの遺構は井戸に伴う一連の施設と判明した。また東発掘区ではSD03・SD04から水を南へ流す南北溝SD05を検出した。SD05は内法幅60cmで

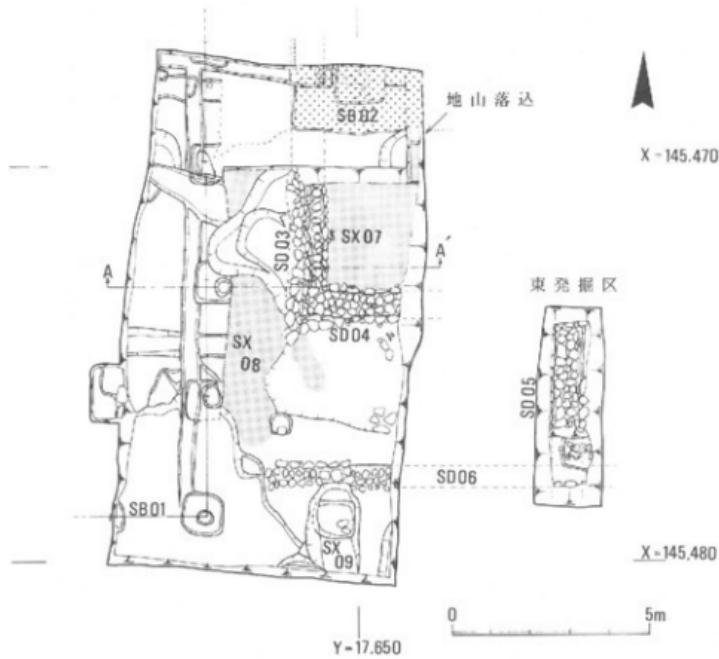


第49図 法華寺旧境内調査位置図

底に偏平な石を敷き、東側には人頭大の石を、西側には低く細長い石を並べる。

SX08の西には礎敷に沿い掘立柱建物SB01が建つ。桁行4間以上で、10尺等間の南北棟である。梁間は東1間を確認したのみで柱間は8尺である。また発掘区東南隅にも掘立柱柱穴（SX09）がある。この柱穴はSB01の南妻東延長上にあり、SB01東南隅柱との間隔は11尺である。これはSB01に取り付く扉もしくは別の建物の西北隅柱の可能性が考えられる。

以上の遺構を埋めた法華寺造営に伴う整地土（以下、単に「整地土」と略す）から、最も新しい遺物として奈良時代中期の瓦が出土しており、遺構の廃絶は法華寺造営時と思われる。しかし遺構本体から遺物は出土しておらず、これら一連の遺構の造営が藤原不比等邸の時期まで遡るかどうかは決定できなかった。



第50図 法華寺旧境内発掘遺構図

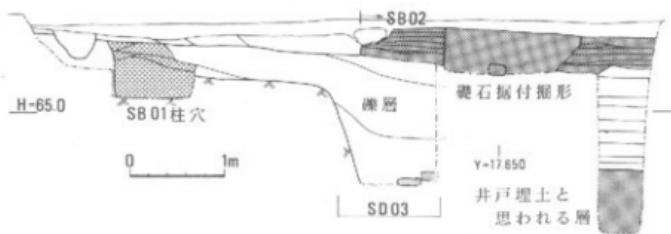
法華寺造営に伴う遺構 磚石建物SB02と東西溝SD06を検出した。これらは法華寺造営前の遺構（以下「下層遺構」と呼ぶ）を埋めた後に造られている。

SB02は基壇建物であり、検出した基壇の範囲は東西3m南北1.5mである。基壇は版築により築成され、茶灰色粘土と淡黄灰褐粘土とを5cm程度の厚さで互層に積んでおり、残存している版築層の厚さは約40cmである。また版築直下に厚く礫を敷いている。これは下層遺構埋立ての際に版築下の地固めのために敷いたものと思われる。なお雨落溝・基壇化粧の痕跡は検出していない。建物は磚石建ちで、西南隅柱跡1カ所を検出した。磚石据付け掘形は方1.2mで、底に人頭大の石を数個敷き根石としている。

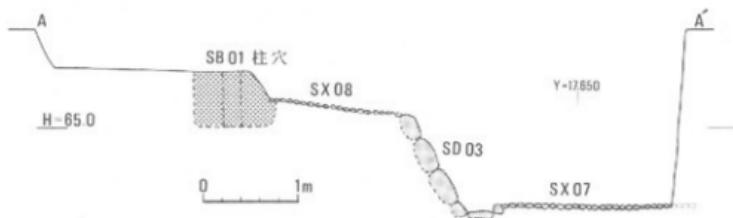
SD06は石組による東西溝である。内法幅約40cmで、底には偏平な河原石を敷き、側面は石を並べ側石としている。位置的に金堂に取り付く回廊の雨落溝と考えられるが、回廊基壇・柱跡を検出していないので、SD06が回廊の南北どちら側の雨落溝となるかは決定できなかった。もしSD06が回廊南雨落溝とすると、回廊は雨落溝心々幅5.2mで金堂中央に取り付くことになり、北雨落溝とすると、回廊は金堂南廂に取り付くと考えられる。

電気探査 発掘調査によりSD03を南北6.5m、SD04を東西3m分検出しが、SD03は発掘区の北方で東に曲がり井戸を開むものと予想された。その位置を推定するために発掘区北側で、東西方向2本、南北方向1本の測線を設け、電気探査二極法により石組溝の探査を行なった。その結果が第53図に示すもので石組溝位置は比抵抗の大きい部分としてとらえられている。それぞれの図中のAとした箇所がそれにあたる。その結果SD03はSD04から北方16mの所で東に曲がることが確認できたのである。また井戸の東にも同様な溝が巡っていると考えられたが、現在アスファルト道路下のため探査できなかった。

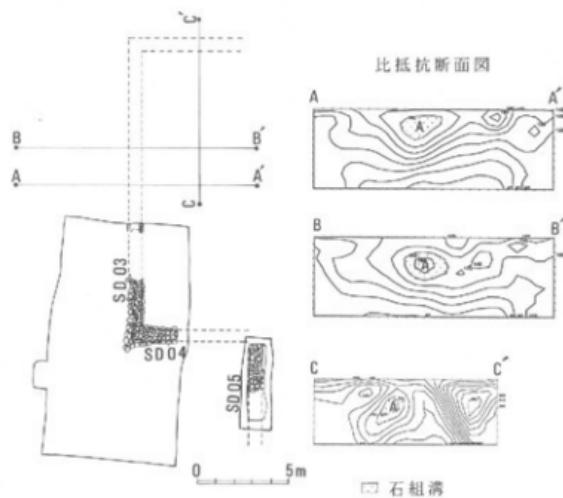
よって石組溝によって開まれる範囲は南北16mである。そして東西幅は、SD05を井戸東の溝の延長とすると7m、SD05が中軸線上にくるものとして14mとなる。第78次調査によって発掘された平城宮内の石敷井戸（SE7900）の規模が東西8.3m南北14.5mであるから、今回発掘されたものは特に立派なものといえる。



第51図 発掘区北壁土層図

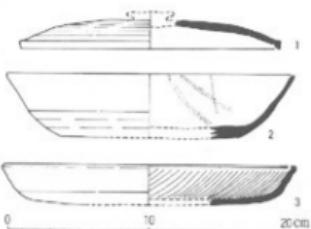


第52図 A-A' 断面図

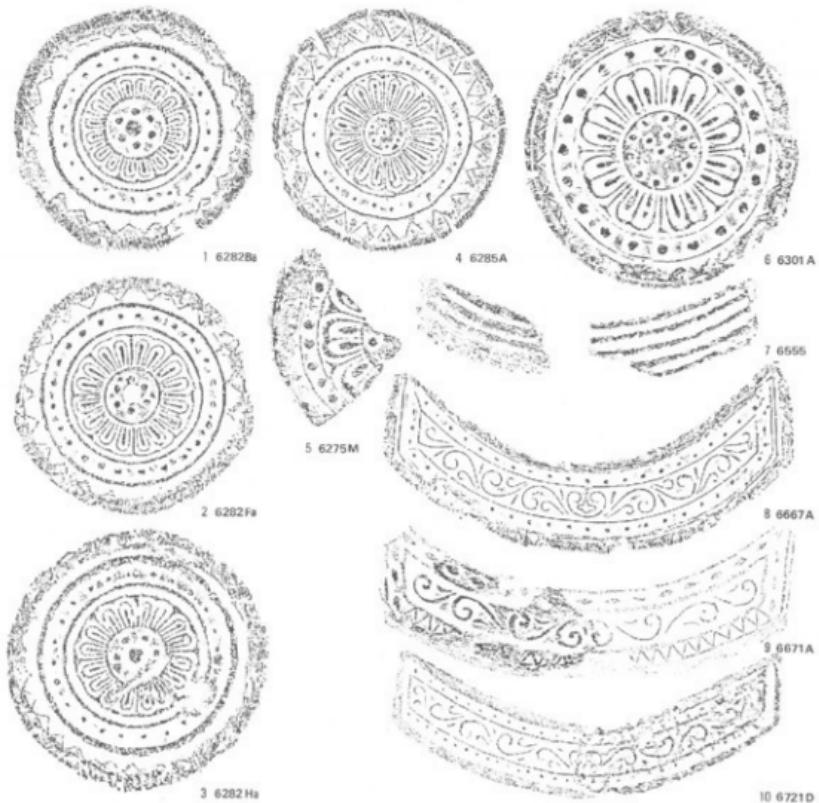


第53図 電気探査成果

遺物 瓦は整理箱に60箱分出土し、軒瓦は74点、内訳は重弧文軒平瓦5点、平城宮出土軒瓦編年Ⅰ期が1点、Ⅱ期が44点、Ⅲ期が8点、平安以降が16点である。最も多く出土したのは6285Aと6667A(Ⅱ期)の組合せである。土器は整地土から平城宮土器Ⅱの須恵器杯A(2)、杯蓋(1)、土師器皿(3)が出土した。



第54図 整地土出土の土器(1:4)



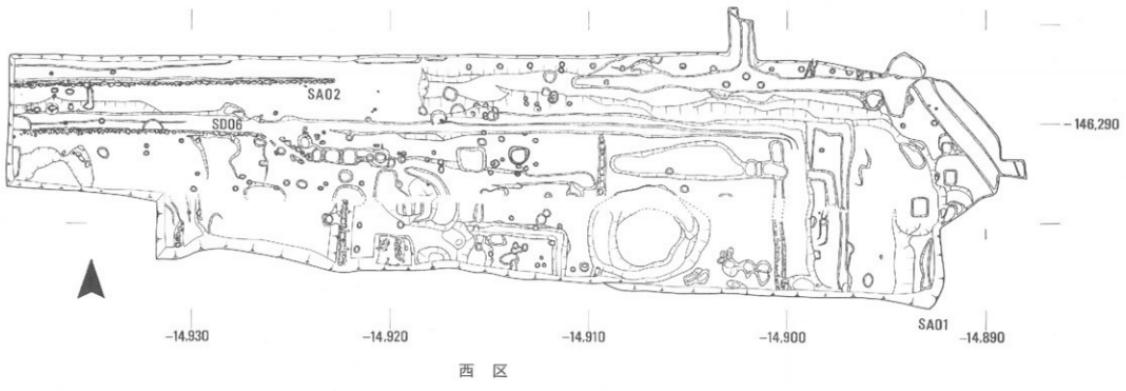
第55図 法華寺旧境内出土軒瓦(1:4)

奈良県庁前の交差点に地下道を建設するための事前調査である。天理街道を挟んで東区と西区に分けて調査をおこなった。

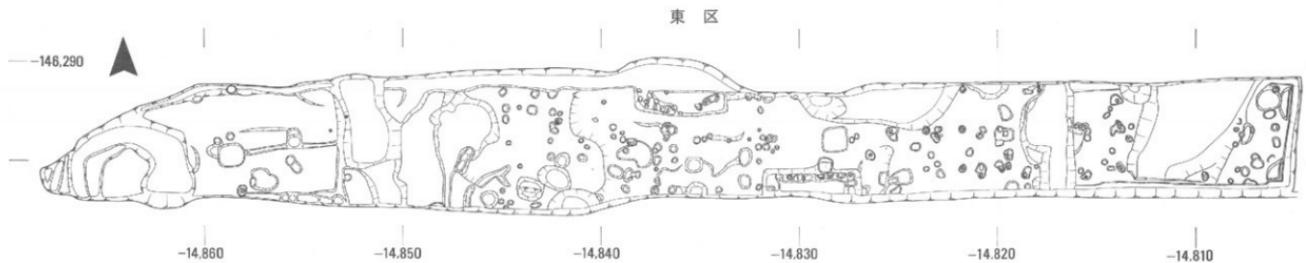
西区 興福寺旧境内の東辺部にあたるところで、発掘区の上層は、上から道路舗装の整地土（現代）、黄褐粘質土、暗黄褐砂質土（整地A）、黒灰砂質土（整地B）、地山（赤黄褐粘質土）となる。整地Aには室町時代の灯明皿を多数含む。整地Bには鎌倉時代前期の瓦器等を多数含んでいる。検出した主な遺構は、興福寺東辺築地SA01、興福寺境内の東西築地SA02、SA02の側溝SD06等である。SA01は地山を削り出した南北築地の基底部で、全幅は確認できないが3m以上ある。SA02は西区東北隅でSA01に連なる東西築地である。この北側は興福寺旧境内の中央を東西に走る通路で、発掘区の北側に東面中門が存在する場所にあたる。SA02も地山を削り出して基底部を造り出している。これも全幅は確認できず、3m以上ある。SA02は西へゆくにつれ地山が低くなるため、黄褐色の土を積んでいる。この積土は整地Bの下に入りこんでおり鎌倉時代以前、おそらくは奈良時代まで週りうるものと推定される。SD06はSA02の南側溝で、南側に玉石護岸が残る。この溝は概略2層に分かれ、上層は東西にまっすぐのび、下層は、発掘区中程で南へ折れ曲る。石の護岸は下層の時期のものである。

東区 興福寺旧境内をはずれた東側である。土層はおおむね西区と同様で、中世から近世に至る多量の土器片の混る上で整地が行なわれている。発掘区西側3分の1程には顯著な遺構がなく、東側3分の2には多数の小穴や土壤・溝等がある。発掘区西側3分の1が奈良時代の東京極大路であったと推定され、そのために建物等の遺構が少ないとと思われる。

西区は近世の絵図では戒壇院と称する子院にあたる。東区東側も同様子院があつたと推定される。



0 10 20m

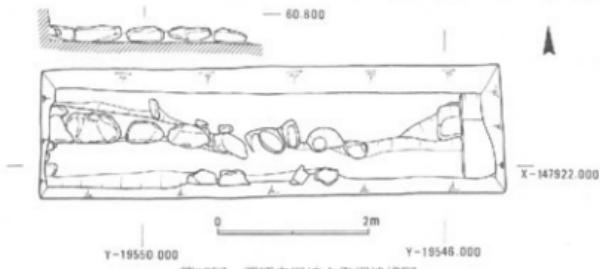


第56図 興福寺旧境内発掘遺構図 (1 : 200)

本調査は住宅建設に伴なう事前調査で、調査地は薬師寺西僧房の北に接する。調査地は全体に盛土（厚さ50cm）があり、以下、水田耕土、床土、灰褐砂質土、灰褐粘質土、黒色砂質土（焼土層）、黄灰粘質土、黄灰砂質土、黄白粘土となる。

検出した遺構は、東西溝と土壙の一部である。東西溝は両岸に石を並べて護岸としたもので、幅約30cm、深さ約20cm。東で南に振れており、さらに蛇行でもするのであろうか、発掘区東端付近では検出できなかった。護岸の石は、発掘区西半の北岸でよく残っている。長さ40～60cm、幅30～40cm、厚さ20cmほどの石を一列に並べ、石の裏込めや空隙に粘質土を充填している。当初は、裏込めに石を用いて安定をはかっていたと推定される部分もある。発掘区中央付近の北岸では、石の抜き取り痕跡が認められた。一方、南岸は発掘区南辺と重なり、3箇所で石を検出したにとどまる。また、発掘区東端と中央付近で、下層の素掘りの東西溝を検出した。幅1mほど、深さ30cm前後と推定される。この素掘り溝を改修して石溝としたのであろうか。石溝を覆う焼土層の上面では、幅40～50cm、深さ10cmほどの素掘りの東西溝を検出している。土壙は石溝の裏込め土を切り込んで掘られており、埋土からは焼土と多量の瓦片が出土した。現状での深さは40cmほどであるが、中心部に向かって、さらに深くなると推定される。

遺物の大半は瓦で、石の抜き取り痕跡や焼土層からは、鎌倉時代の巴文軒丸瓦が、下層溝からは薬師寺所用軒丸瓦6641G型式が鎌倉時代の瓦と共に出土した。



第57図 薬師寺旧境内発掘遺構図

5 西大寺境内の調査 (次数外)

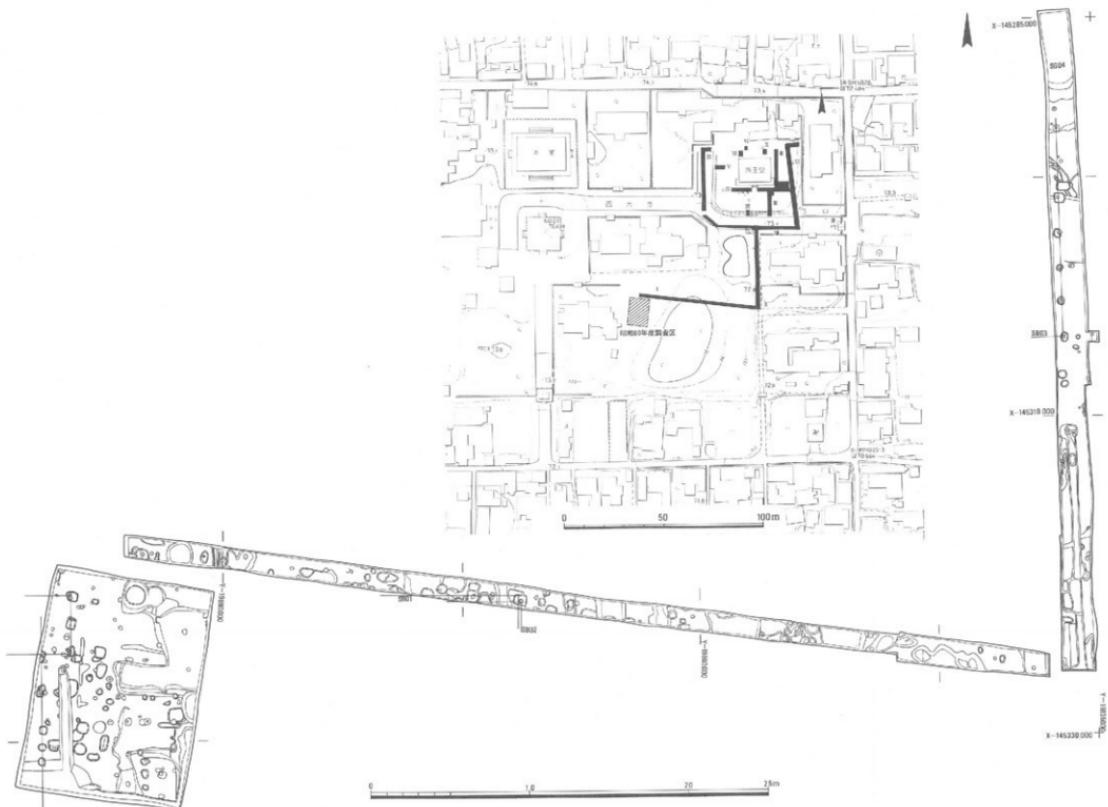
本年度の防災工事は、四王堂を対象としたもので、貯水槽から四王堂に至る区間と堂周辺の配管予定地について調査を行った。また四王堂周辺の配管位置を決定するために、現四王堂基壇にトレントを入れ、本来の基壇規模を確認する調査も合せて行った（第58図参照）。防災工事関連調査報告書は、工事最終年度の刊行予定であるので、ここでは各区の調査成果の概要を簡単に述べるにとどめたい。

I 区

護国院の東にある駐車場に設けた、東西58m、南北1.5mの東西トレント。旧表土下は茶灰褐粘質土・黒褐粘質土の整地土で中世の遺物を含む。この整地面で中世以降の大小の土壌、溝を検出した。整地土下は、部分的に旧流路と見られる砂の堆積があるが、基本的には黄灰色粘土の地山となり、この面でも古代～中世の遺構を検出した。奈良時代の遺構としては、掘立柱建物2棟分を検出したが、調査区が狭いため棟方向は分らない。SB01は柱間9尺（2.7m）等間で東西方向に3間分検出した。SB02はSB01を切る建物で1間分を検出したにとどまる。SB01は昨年貯水槽予定地で検出した掘立柱の東西棟建物と柱筋を揃え、西大寺造営以前の右京一条三坊六坪の宅地に属す建物と考えられる。

II 区

駐車場から四王堂に向う参道に設けた、東西1.5m、南北41mのトレント。表土は近世の瓦を含む路面敷であり、その下に厚さ約0.5mの暗黄褐砂質土があり、地山に至る。I区に較べ遺構密度は薄く、すべて地山面で検出した。主な遺構としては、北端で検出した中世の池SG04と奈良時代の掘立柱建物SB03がある。SG04は後述するVIII区でもその延長部分を検出してるので詳細はその項で述べる。SB03は柱間7尺（2.1m）等間で南北に6間分検出した。南端の柱穴の東側に発掘区を拡張したが、その続きは検出されず、恐らく西側に延びる南北棟であろう。柱掘形等から遺物は何等出土しなかったが、四王堂との位置関係から判断すると、やはり西大寺造営以前の建物と目されよう。



第58図 西大寺境内発掘位置図（1：2000）およびI・II区発掘構造図（1：250）

VII区

現東門から西に向かう参道に設定した東西51m、南北1.5mの東西トレンチ。VII区は、ほぼ全域にわたってⅡ区で検出した池SG04の広がりであるが、西端付近で池の北岸の一部を確認している。またこの岸の近辺では井戸SE05を検出した。SG04は深さ約1.0m、層序は底から黒灰粘質土（堆積土）・黄褐土（埋立土）・暗黄褐砂質土の順で表上に至る。堆積土には比較的遺物は少なく、土師器・須恵器・三彩陶器・瓦器の他、塑像片・泥塔・建築部材等が少量出土している。堆積土には13世紀後葉と目される土師器小皿・瓦器があり、また埋立土からは14世紀頃と考えられる軒丸瓦が出土しており、池の廃絶時期の手掛となる。井戸SE05は一辺約1.0mの方形の横板組で各辺4段分が残っていた。掘形の規模は分らないが、その埋土には瓦や凝灰岩が混る。井戸枠内の上層堆積には多量の瓦を含み、井戸底からは10世紀前半頃の土師器・灰釉陶器等が出土した（第61図参照）。

VIII区

四王堂の東、法寿院に向う道路に設定した東西1.5m、南北45mの南北トレンチ。路面敷直下が暗茶褐粘土の地山であり、地山がくぼんだ部分に黄褐粘土の整地上が残る。検出した主な遺構は、Ⅱ・VII区検出のSG04の北岸の一部、中世の大土壙SK08、奈良時代の掘立柱の東西棟建物2棟などである。

SB07は約9尺（2.7m）で梁間2間の身舎の南北両面に廊が付く。SB06は梁間2間、柱間6尺（1.8m）の東西棟でSB07から12mの間隔を保ち、それと柱筋を揃える。SB07の柱痕跡から西大寺創建軒丸瓦6236Aが出土している。

またSB07は、西大寺資財帳の四王院の項にみえる東北檜皮葺房の規模（梁間寸法）が一致し、同じくSB06も檜皮小屋の梁間寸法に近く、四王院の付属棟と考えてよかろう。

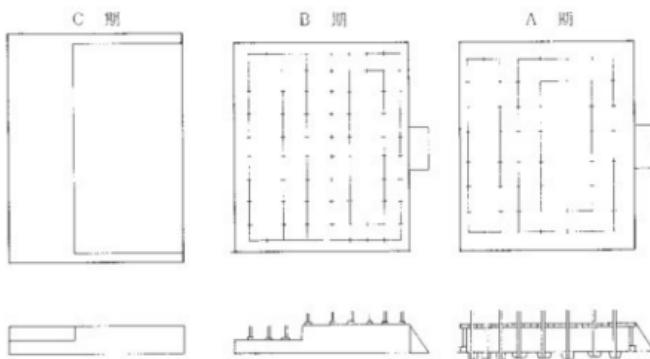
IX区

四王堂の西、幼稚園に向う道路に設定した東西1.5m、南北29mの南トレンチ。道路敷下には、焼土や焼けた瓦を含む整地層があり、その上面及び下面の地山面で柱穴や大小の土壤、池状遺構を検出した。その多くは近世の遺構である。

四王堂基壇の調査（Ⅲ～Ⅵ・Ⅹ～Ⅺ区）

現四王堂の軒下に接して南北、東西の両トレンチ（Ⅲ・Ⅳ区）を、北面・南面・西面には、Ⅴ・Ⅵ・Ⅹ～Ⅺの各小トレンチを設定し、基壇規模の確認調査を行った。その結果、当初の基壇規模を確認し、基壇と四王堂の変遷に関する重要な知見をえた。基壇とそれに伴う建物は大きく3時期の変遷をたどる（第59図）。

A期 創建期の四王堂の時期にあたる。基壇は凝灰岩を使った壇上積で、規模は南北約31m、東西37m。基壇は地土の上に厚さ0.3m程の整地をしたのち版築によって築く。柱はすべて基壇上面から大きく抜取られ、二ヶ所断割ったが、掘形は残っていなかった。柱抜取穴は版築下の整地上をも深く掘込んでいることから、当初の四王堂は基壇を伴う掘立柱建物であり、柱穴は整地した後に掘り、柱を立てた後に版築で基壇を築いたことがわかる。また資財帳によれば、四王堂は桧皮葺の双堂形式の建物であったことが知られるが、Ⅳ区で検出した柱抜取穴の列は、基壇上での相対的位置関係から、二棟の建物のうち北側にあった正堂の南側柱列と考えられる。この正堂は5間×2間の身舎の四面に廂を持つ東西棟建物で、桁行寸法は両端の廂の間13尺（3.9m）、中央間17尺（5.1m）、その他の間は15尺（4.5m）に復原できる。Ⅲ区の北側部分は、東から1間目の梁間筋に当るが、柱

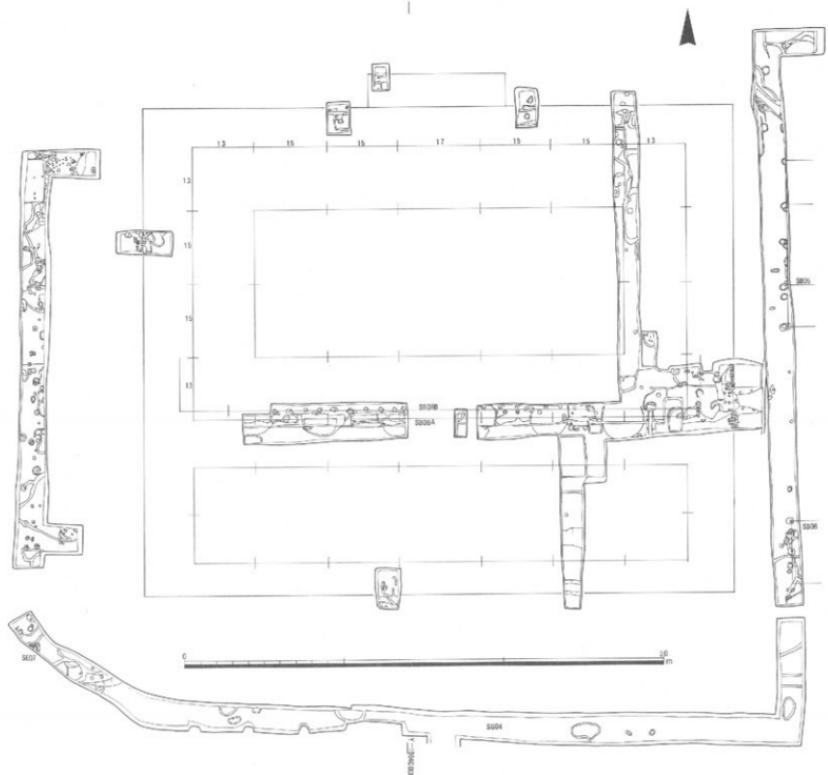


第59図 四王堂基壇と建物の変遷

-12-1424900

+1-143765.00

002000
X-14128500



第60図 四王堂基壇と周辺の調査区検出遺構 (1 : 250)

は溝状の擴を掘ってまとめて抜き取っている。溝状擴はトレント西側に延び、非常に危険で掘り下げるため、渠間寸法については不明である。

B期 当初の四王堂を撤去し、整地を行うとともに基壇北端から19m以南の基壇を全面にわたって約0.6m程削り取り段を持つ基壇を作り直し、礎石建物に建替える。また、基壇端は瓦と石を用い化粧する。この時期の建物遺構としては、IV区で礎石と礎石間をつなぐ縁束石と考えられる石列を検出したが、建物構造については定かでない。仮にこの時期も双堂方式の建物とすれば、段をもつ基壇であり、また検出した礎石が想定される建物規模に比し小形であることなどから、東大寺法華堂のように正堂と礼堂とが屋根統一になる形式の建物が想定でき、この礎石列と縁束石列は両堂の軒下となる造合い間に建つ柱を受けたものとも考えられよう。礎石列から復原できる建物は桁行9間で、柱間は両端の廂の間10尺(3.0m)、他の間は13尺(3.9m)等間である。

基壇端化粧には別の場所から運んできたと考えられる火を受けた瓦類が大量に使われており、奈良時代の瓦を主体とするが最も新しい軒瓦でも平安前期におさまり、承和13(846)年に焼亡した講堂にのっていた瓦の可能性もある。また東側基壇ではB期基壇崩壊上の下に焼土・炭層があり、この建物が火災を被ったことが知られるが、灰層およびその下層から10世紀中頃を降らない時期の土器類が出上している。従って、B期の造営は9世紀中頃に始まり、10世紀中頃に火災で廃絶したものと考えられよう。

C期 B期に切り取った南辺の段を埋立てるとともに東と西についても基壇を拡幅し、東西40m程の平坦面に造営する。C期の建物に関連する遺構は検出していないが、現四王堂の軒先付近とその外側一帯に仏事等に使用した土器類を大量に含む層が広がる事から、既にこの時期には、双堂形式ではなく、「現四王堂の位置にそれとさほど規模の遙わない建物が建っていたものと考えられる。C期の年代については、B期基壇土には10世紀中頃以前の遺物しか含まれず、さらにB期遺構面には11世紀以降の遺物を含む堆積層が広がることから、上限としては11世紀頃の年代が与えられよう。また『興正菩薩御教説聽聞集』によれば、11世紀初

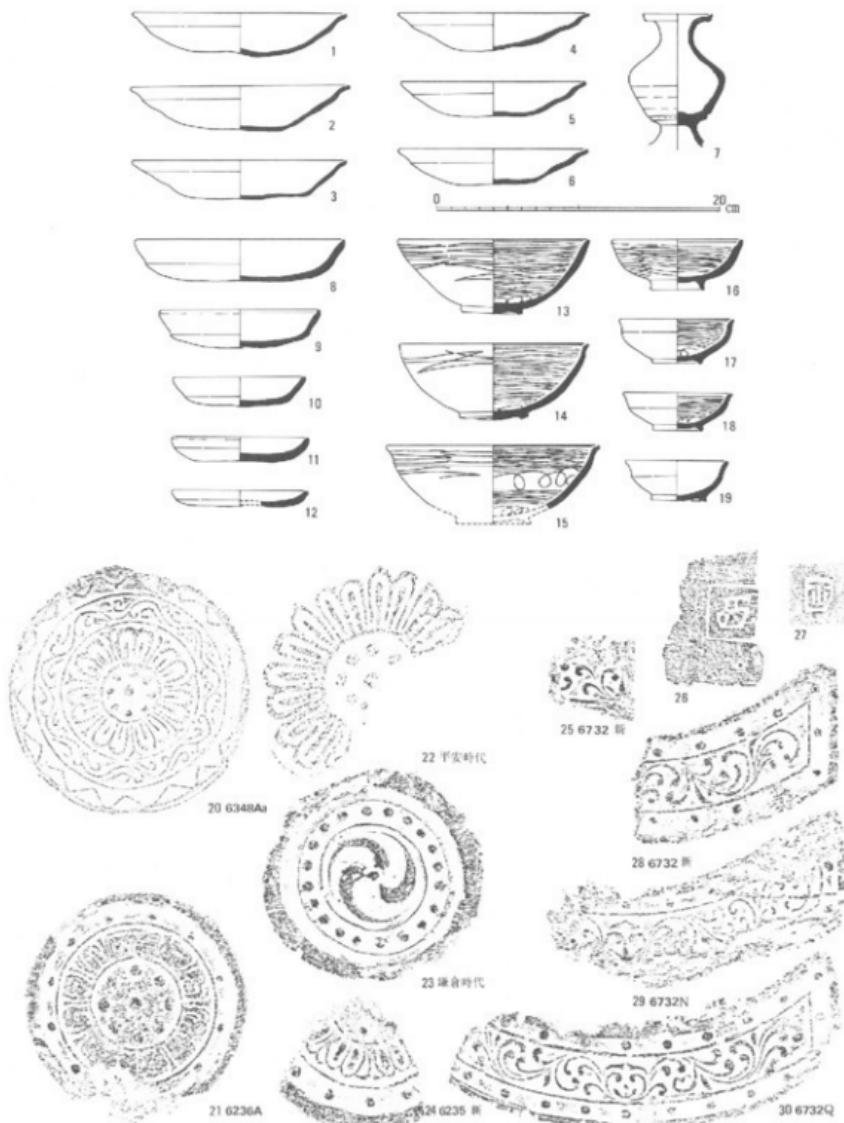
頭の頃、四王堂が露天にうちさらされていたこと、輔静が西大寺の別当に就任した後に四王堂が再建されたことが分る。輔静の別当就任は長保6（1004）年のことであり、調査所見と整合し興味深い。

まとめ

今年度の調査の結果、寺造宮以前の右京一条三坊六坪の宅地関連遺構、中世以降の各時期にわたる遺構を検出するとともに、断片的にではあるが初めて、古代の四王堂関連遺構の実体が把握できたことは大きな成果であり、今後の伽藍配置の復原的研究に対しても貴重な資料を提供することになった。また各地区から各時代にわたる多量の遺物が出土し、寺の歴史を考える上にも重要な資料となっている。古代の土器を取りあげると、三彩陶器、綠釉陶器、灰釉陶器、青磁、白磁等の高級陶器も少量ながら出土しており、往時の寺の繁栄をしのばせるに十分である。瓦類についても、新出型式の西大寺式軒瓦、「西」の刻印をもつ瓦、綠釉壇などをはじめとし、各時期の軒瓦が多量に出土しており、これまであまり明確でかった西大寺の瓦の実体を解明する上で重要な資料となっている。

西大寺四王院関係記事

- 1 天平宝字8年（764）9月11日 称徳天皇西大寺の建立を免願する（資財帳）。
- 2 天平神護元年（765） 称徳天皇西大寺を建て金剛四天王像を造る（資財帳、扶桑略記）。
- 3 西大寺資財帳卷第一 四王院
　檜皮雙堂二宇（各長さ11丈・広さ8丈6尺・蓋頭に竈舌28枚あり） 東南瓦葺房（長さ9丈・広さ4丈） 西南桧皮葺房（長さ9丈・広さ4丈） 東北桧皮葺房（長さ5丈7尺・広さ3丈6尺7分） 次桧皮葺小房（長さ5丈6尺5寸・広さ10丈6尺） 次桧皮小房（長さ5丈6尺5寸・広さ1丈4尺） 檜皮小屋（長さ1丈8尺・広さ1丈1尺） 次桧皮
- 4 承和13年（846）12月11日 西大寺講堂焼亡す（綱日本後紀、日本紀略、旧跡幽考）。
- 5 延長5年（927）10月 西大寺五重塔焼く（日本紀略）。
- 6 保民6年（1004）3月7日 僧仁宗に替て輔静を西大寺別当に任す（御室闇白記）。
- 7 『興正吉備教説聴聞集』（岩波書店版『日本思想大系15 下』錦倉仏教』所収）
　即某當寺に渡りて今は五十年に及び候。即四王はうつき原にて高野笠うち着せまいらせて候しを。
　薬師寺の威精（輔静のあやまり）すでに講の別当に成たる時。形の如く堂を立しより以来（後略）。
- 8 保延4年（1138）12月29日 西大寺の造立功により別当済円を権律師に任す（三会定一記・僧綱補任）
- 9 嘉祐4年（1238）8月25日 西大寺四王堂前に最勝王經を転読する（西大寺文書）
- 10 文龜2年（1502）5月8日 兵火により西大寺一山焼亡し四王堂中門石塔院地蔵院東大門のみ焼け残る（大乘院雜事記・実隆記・伽藍炎上略記）。
- 11 延寶2年（1674） 西大寺觀音堂（四王堂）を建つ（旧跡幽考）。
- 12 正徳元年（1711） 西大寺四王堂を再建す（棟札）。



第61図 西大寺境内出土土器・瓦 (1:4) 1~7 SE07, 8~19 四王堂B期基壇埋土,
22 四王堂B期瓦積基壇, 23 SG04

その他の発掘調査一覧

| 調査次数 | 調査地 | 検出遺構 | 出土遺物 | 備考 |
|--------|-----------|----------------------|-------------------|-----------------|
| 174-4 | 平城宮北方遺跡 | 地山の確認 | 埴輪・瓦少量 | 近年の蓋土から出土 |
| 174-15 | 平城宮北方遺跡 | 柱掘形1 地山の落ち確認 | 土器・瓦少量 | |
| 174-17 | 馬寮地区北方 | 近世大溝、塚 | 瓦・土器・曲物(近世) | |
| 174-18 | 平城宮北方遺跡 | 溝 | 磁器片 | |
| 174-21 | 馬寮地区北方 | 地山(底底か)の確認 | 綠釉陶器(平安)・瓦少量 | |
| 175 | 推定第一次朝堂院南 | 礎石建物 | 瓦多量 | 兵部省推定地の一郭 繼続中 |
| 174-3 | 右京一条北辺二坊 | 旧河川 | 瓦少量(近世以降) | |
| 174-19 | 右京一条二坊 | 溝堆積土面 | 軒丸瓦(6755A型式)・須恵器片 | 北京極大路南側溝 推定地 |
| 174-9 | 東大寺旧境内 | 西面築地基底部 ピット(近世以降) | 軒丸瓦(東大寺式)・近世瓦多量 | |
| 174-14 | 秋羅寺旧境内 | 溝(ごく新しい) | 陶磁器 | |
| 174-23 | 法華寺旧境内 | 地山の確認 | なし | |



写真1 第173次調査（推定第二次朝堂院東第二堂、南から）



写真2 第172次調査（内裏東方東大溝地区、西南から）



写真3 第181次調査（頭塔全景、東北から）

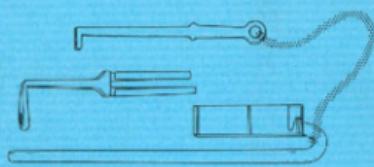


写真4 第181次調査（頭塔東面第5段石仏、東から）

鉄製海老鏡（表紙カット）

平城宮内裏東方東大溝SD2700

（第172次調査）出土品で、全長
21.1cm。社金具・牝金具・匙の3
点がそろって出土したのはごく稀
な例に属する。裏表紙は正倉院の
遺例を参考に作成した分解図。



昭和61
年 度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報

1987.6

奈良国立文化財研究所